岩手県文化振興事業団埋蔵文化調査報告書第385集

船丸館跡発掘調査報告書

広域農道整備事業関連遺跡発掘調査

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

ふなまるたてあと
船丸館跡発掘調査報告書

広域農道整備事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人の貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私達県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました広域農道整備事業を例にあげるもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活を送るための地域開発も県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会文化課の指導と調整のもとに開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本書は、広域農道整備事業に関連して、平成12年度に行われた船丸館跡発掘調査の結果について収録したものであります。調査の結果、千厩川左岸の段丘上に立地する16世紀を中心とした館跡であることが明らかになりました。郭や堀跡からは天目茶碗をはじめとする陶磁器等の遺物が出土しており、周辺に散在する館跡との関連性や当時の社会状況を考える上での貴重な資料を提供することができました。

この本書が広く活用され、斯学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力とご支援を賜りました千厩地方振興局千厩農村整備事務所、千厩町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申しあげます。

平成13年12月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　村　上　勝　治

例　言

1．本報告書は、岩手県東磐井郡千厩町奥玉字船丸51ほかに所在する船丸館跡発掘調査の結果を収録したものである。

2．本遺跡の発掘調査は、広域農村整備事業に伴い、県教育委員会文化課千厩地方振興局農村整備事務所の協議を経て、㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

3．発掘調査は、平成12年度に実施したものである。委託者は千厩地方振興局農村整備事務所である。

4．岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡各次略号は、以下のとおりである。

遺跡登録台帳番号 …… NF81－2212

遺跡略号 …… FMD－00

5．調査期間と調査面積と野外調査担当者は、以下のとおりである。

平成12年 6月2日～7月 26日／4,612㎡／小笠原　健一郎・金　野　　進

6．調査の室内整理期間と整理担当者は、以下のとおりである。

平成12年12月1日～平成13年3月31日／小笠原　健一郎

7．本報告書の執筆は、小笠原健一郎が担当している。

8．自然科学関連の分析鑑定と保存処理は、次の方々と機関に依頼した。（敬称略）

石質鑑定……花崗岩研究会

樹種同定……高橋利彦（木工舎ゆい）

鉄製品の保存処理……岩手県立博物館

9．座標原点の測量および空中写真撮影は、次の機関に依頼した。

座標原点の測量……㈱興国技研

地　形　測　量……㈱シン技術コンサルタント

空中写真……東邦航空株式会社

昭和25年頃の遺跡周辺の空中写真……㈶日本地図センター

10．本報告書の作成にあたり、次の方々ならびに機関からご指導とご協力をいただいた。（敬称略）

千厩町教育委員会、中村英俊（岩手県教育委員会）。

11．野外調査にあたっては千厩町と地元の方々に多大なるご協力をいただいた。

12．本遺跡から出土した遺物および調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

本文目次

序
例言
Ⅰ．調査に至る経過 …… 3
Ⅱ．遺跡の位置と環境 …… 3
1．遺跡の位置 …… 3
2．遺跡周辺の地形と地質 …… 5
3．基本層序 …… 6
4．歴史的環境と周辺の遺跡 …… 7
Ⅲ．調査の方法と室内整理 …… 11
1．野外調査の方法 …… 11
2．室内整理の方法 …… 12
Ⅳ．検出された遺構と遺物 …… 15
1．概要 …… 15
2．堀跡 …… 15
3．Ⅰの郭の遺構 …… 15
4．Ⅱの郭の遺構 …… 18
(1)土塁状遺構 …… 20
(2)焼土遺構 …… 21
(3)柱穴群 …… 21
5．Ⅲの郭の遺構 …… 22
(1)掘立柱建物跡 …… 25
(2)土坑 …… 28
(3)溝跡 …… 36
(4)柱穴群 …… 41
Ⅴ．まとめ …… 49
1．縄張りについて …… 49
2．船丸館跡の時期について …… 49
3．遺構について …… 50
4．遺物について …… 50
Ⅵ．自然科学分析 …… 55
1．同樹種定 …… 55
報告書抄録 …… 72
職員一覧 …… 73

図版目次

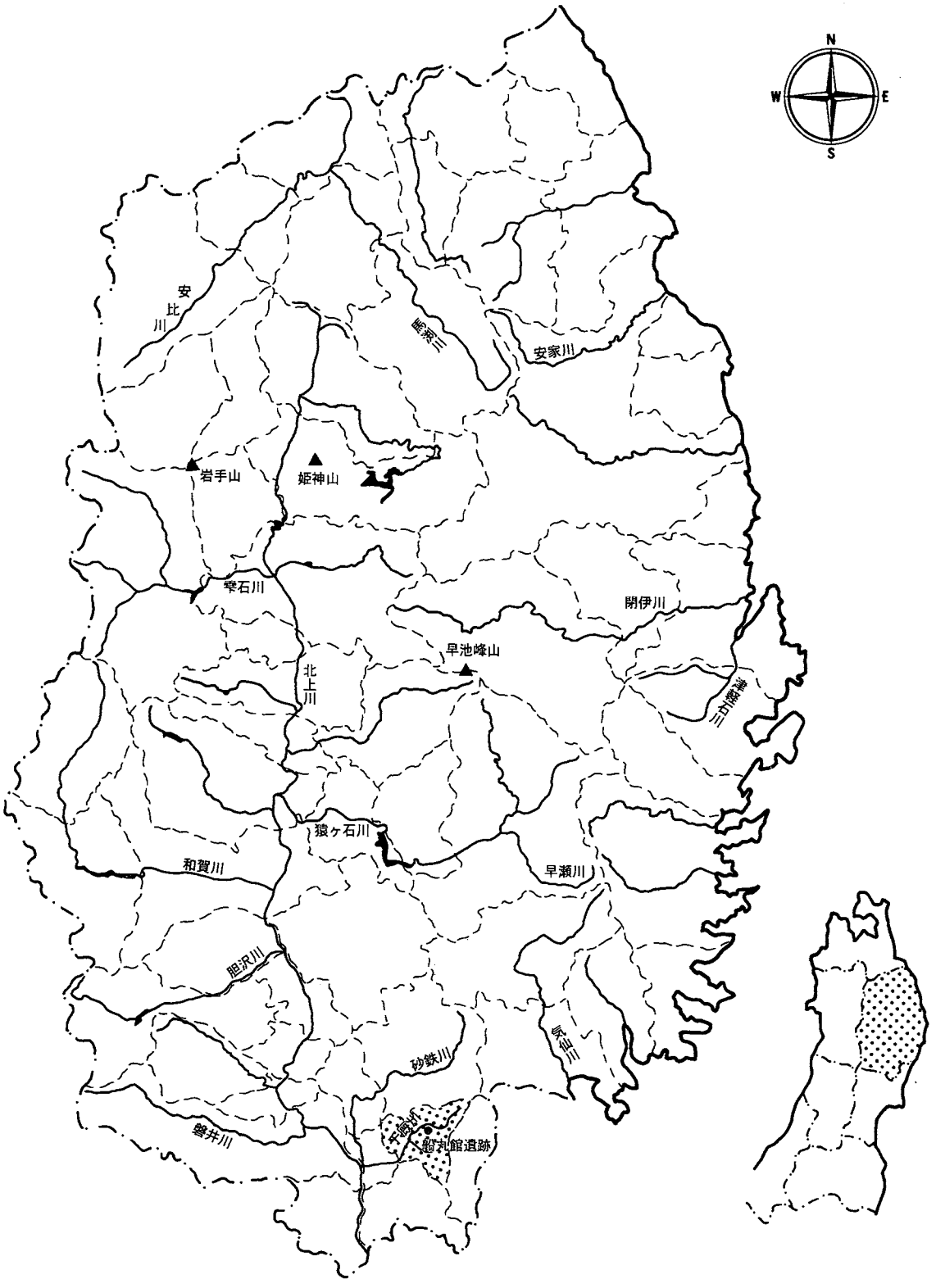
第１図　岩手県図に見る遺跡の位置図 …… 1
第２図　遺跡位置図 …… 2
第３図　遺跡周辺の地形図 …… 4
第４図　遺跡周辺の地形分類図 …… 5
第５図　基本土層柱状図 …… 6
第６図　周辺の遺跡分布図 …… 8
第７図　奥玉千葉氏系譜 …… 10
第８図　グリッド配置図 …… 11
第９図　実測凡例図 …… 14
第10図　１号堀跡 …… 16
第11図　２号堀跡 …… 17
第12図　Ⅱの郭(1) …… 18
第13図　Ⅱの郭(2) …… 19
第14図　１号土塁状遺構 …… 20
第15図　１号焼土遺構 …… 21
第16図　Ⅱの郭柱穴群 …… 21
第17図　Ⅲの郭(1) …… 22
第18図　Ⅲの郭(2) …… 23
第19図　Ⅲの郭(3) …… 24
第20図　１号掘立柱建物跡 …… 26
第21図　２号掘立柱建物跡 …… 27
第22図　１号土坑、２号土坑、３号土坑 …… 29
第23図　４号土坑、５号土坑、６号土坑 …… 31
第24図　７号土坑、８号土坑、９号土坑 …… 33
第25図　10号土坑、11号土坑 …… 35
第26図　１号溝跡、２号溝跡、３号溝跡 …… 37
第27図　４号溝跡、５号溝跡 …… 38
第28図　６号溝跡(1) …… 39
第29図　６号溝跡(2)、７号溝跡 …… 40
第30図　Ⅲの郭柱穴群 …… 41
第31図　遺構配置図 …… 43
第32図　調査区位置図 …… 44
第33図　１・２号堀跡、２号堀跡Ⅰの郭出土遺物 …… 45
第34図　Ⅱの郭出土遺物 …… 46
第35図　Ⅲの郭出土遺物 …… 47
第36図　船丸館跡推定縄張図 …… 52
第37図　船丸館跡現況地形図 …… 53

写真図版目次

写真図版１　空中写真(1) …… 59
写真図版２　空中写真(2) …… 60
写真図版３　空中写真(3) …… 61
写真図版４　基本土層、１・２号堀跡 …… 62
写真図版５　１号土塁状遺構、１号焼土遺構 …… 63
写真図版６　1・2号掘立柱建物跡、1～3号土坑 …… 64
写真図版７　４～７号土坑 …… 65
写真図版８　８～10号土坑、１号溝跡 …… 66
写真図版９　２～６号溝跡 …… 67
写真図版10　７号溝跡、柱穴群 …… 68
写真図版11　1・2号堀跡、Ⅰの郭出土遺物 …… 69
写真図版12　Ⅱの郭出土遺物 …… 70
写真図版13　Ⅲの郭出土遺物 …… 71

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧(1) …… 9
第２表　周辺の遺跡一覧(2) …… 10
第３表　Ⅱの郭柱穴計測表 …… 21
第４表　Ⅲの郭柱穴計測表 …… 42
第５表　陶磁器観察表 …… 48
第６表　銭貨観察表 …… 48
第７表　金属製品観察表 …… 48
第８表　木製品観察表 …… 48
第９表　羽口観察表 …… 48
第10表　石器・石製品観察表 …… 48
第11表　土器観察表 …… 48



第１図　岩手県図に見る遺跡の位置図

奥玉
清田
小梨
大久保
新田
本宮
鶏沢
畑沢
田中
大浜
尺森
荒屋
滝沢
中沢
金山沢
増
日当
松原新田
上羽根折沢
中羽根折沢
下羽根折沢
上関代
後山
境田
本松
北長者
南長者
越田沢
大野沢
宮石沢
上川原
中田沢
物見石
上山
根山
川崎
天梅
宝築
松森
松原
熊集
吉立
七日市
大持
熊田倉
田畑
落合
野々下
朴木
橋根沢
堀沢
島矢森
馬場
畑沢
鶏沢
大久保
宮崎
館前
長橋
白幡
中長者
北沢
寒沢
清水馬場
内野
西沢
岩西
上駒場
下駒場
島喰
宮田
千歳
千歳町
北沢
巨木
中木
上木
神子沢
新山
竹原
東小田
小沼田
小沼田尾
柏木
拝沢
成石
境田
尾川原
水金山沢
中沢
滝沢
猫沢
荒屋
小山
上荒井
盛沢
堀谷
猫沢
梅木
五百木
白山
大杉
大畑
清水
石田
柳森
留館
小簑
卯能場
鶴ヶ長
登戸
宝石山
大森
杉崎
西沢
和野
田中
和山
蟹小沢
七洞
源八
大沢
北長者
南長者
北ヶ沢
花貫
金山沢
金取沢
深萱沢
柳沢田
刈屋野
柏倉
南田
小天平
新地
市道
境
松森
上駒場
島喰
宮田
千歳
千歳町
北沢
巨木
中木
上木
神子沢
新山
竹原
東小田
小沼田
小沼田尾
柏木
拝沢
成石
境田
尾川原
水金山沢
中沢
滝

Ⅰ．調査に至る経過

船丸館跡は「広域営農団地農道整備事業東磐井地区」の工事に伴って発掘調査を行うことになった。当事業の施行に係る埋蔵文化財の取扱については、岩手県千厩地方振興局両磐土地改良事業所から平成９年７月17日付け両土地第304号「埋蔵文化財包蔵地近傍の道路改良工事について」の文書で岩手県教育委員会文化課に照会があり、同年７月18日付け教文第７－131号にて道路計画区間「船丸館遺跡」が存在するとの通知を受けた。このことから千厩地方振興局千厩農村整備事務所より平成11年11月24日付け千農整第690号「広域営農団地農道整備事業東磐井地区に関する埋蔵文化財の試掘調査について」で試掘調査を依頼した。岩手県教育委員会は同年12月１日に試掘し、その結果を同年12月21日付けで教文第952号「広域営農団地農道整備事業東磐井地区に関する埋蔵文化財の確認調査について（回答）」により回答し、船丸館跡の範囲内であることが付記された。

Ⅱ．遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置

船丸館跡の所在する千厩町奥玉には「聖武天皇の神亀三年鶴ヵ峰より玉を掘り、これを大野東人に献上した」という伝承が伝えられている。千厩町は北上山地の南端中央部にあり、一関市と宮城県気仙沼市を結ぶ気仙沼街道のほぼ中央に位置する。遺跡は第２図に示すようにＪＲ大船渡線千厩駅の北東約3.9㎞にあり、室根山から西流し砂鉄川に合流する千厩川左岸の段丘上に立地している。

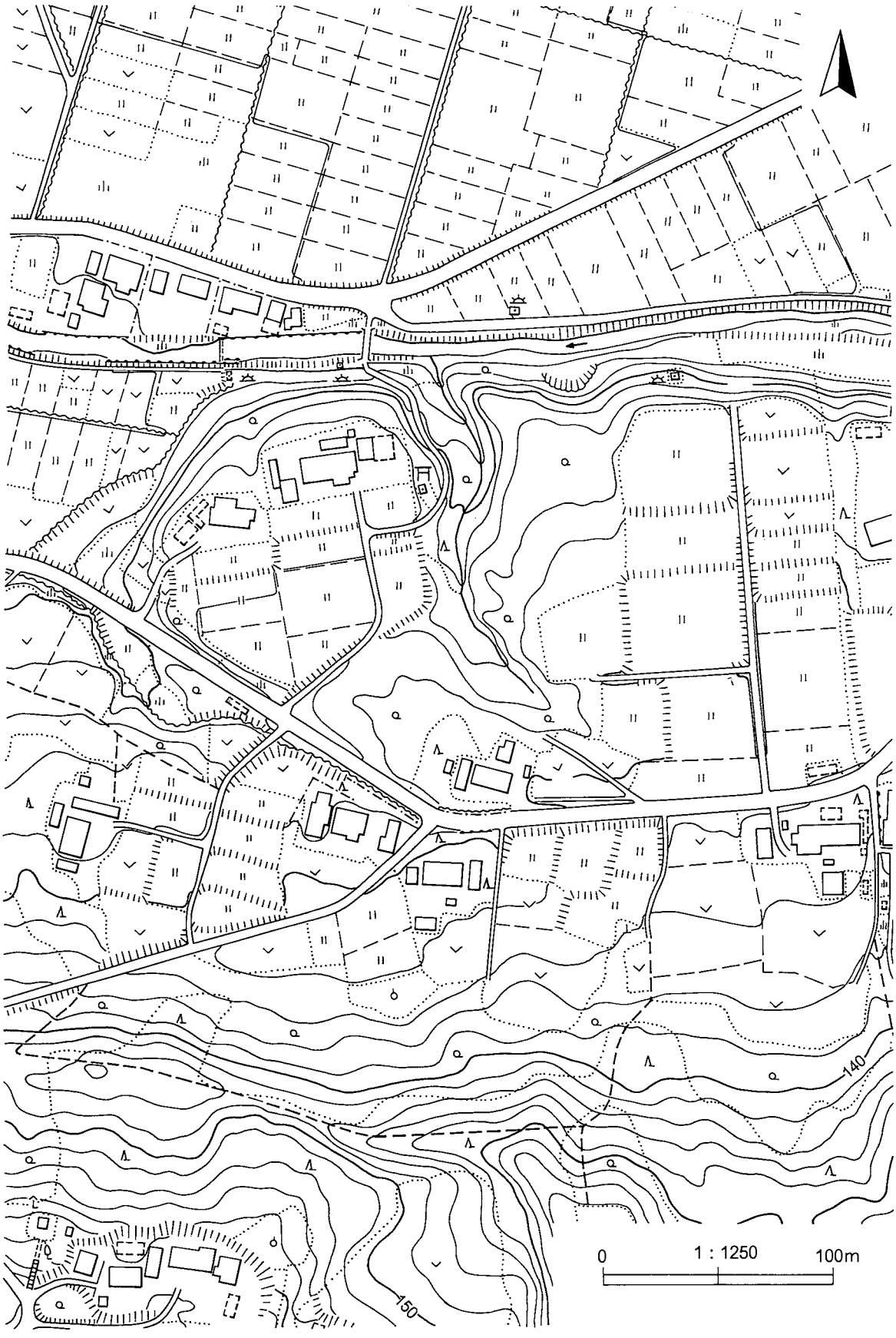
遺跡は、国土地理院発行の２万５千分の地形図「千厩」ＮＪ－54－14－11－3（一関11号－３）の図幅に含まれ、北緯38度57分11秒、東経141度22分05秒付近にあたる。標高は120.20～128.72ｍで、現状は山林である。

遺跡の北側は、館跡の北を流れる千厩川に解析された谷底平野が広がり、一帯は水田地帯である。その北側は北上山地が丘陵状に広がりその稜線は大東町との自然境界線となっている。

古代からのこの地域の開拓は前述の伝承のとおりであり、千厩川を挟んで対峙する立花城もこの穀倉地帯を一望する位置にあり、中世においてもこの地の威勢を窺わされる。

また、調査区の南側、主郭の南側を現在通っている農道は、奥玉から気仙沼へ通じる旧街道でもあり、この地が古来より要衝の地であり、戦略上重要な地域であったことの証でもある。

千厩町の東側は東磐井郡室根村・宮城県気仙沼市、西側が川崎村、南側が藤沢町、北側が大東町の４町２村と隣接している。総面積は89.76㎡、人口１万３千790人（平成13年２月末現在）を有する古来より内陸と沿岸を結ぶ中継地である。



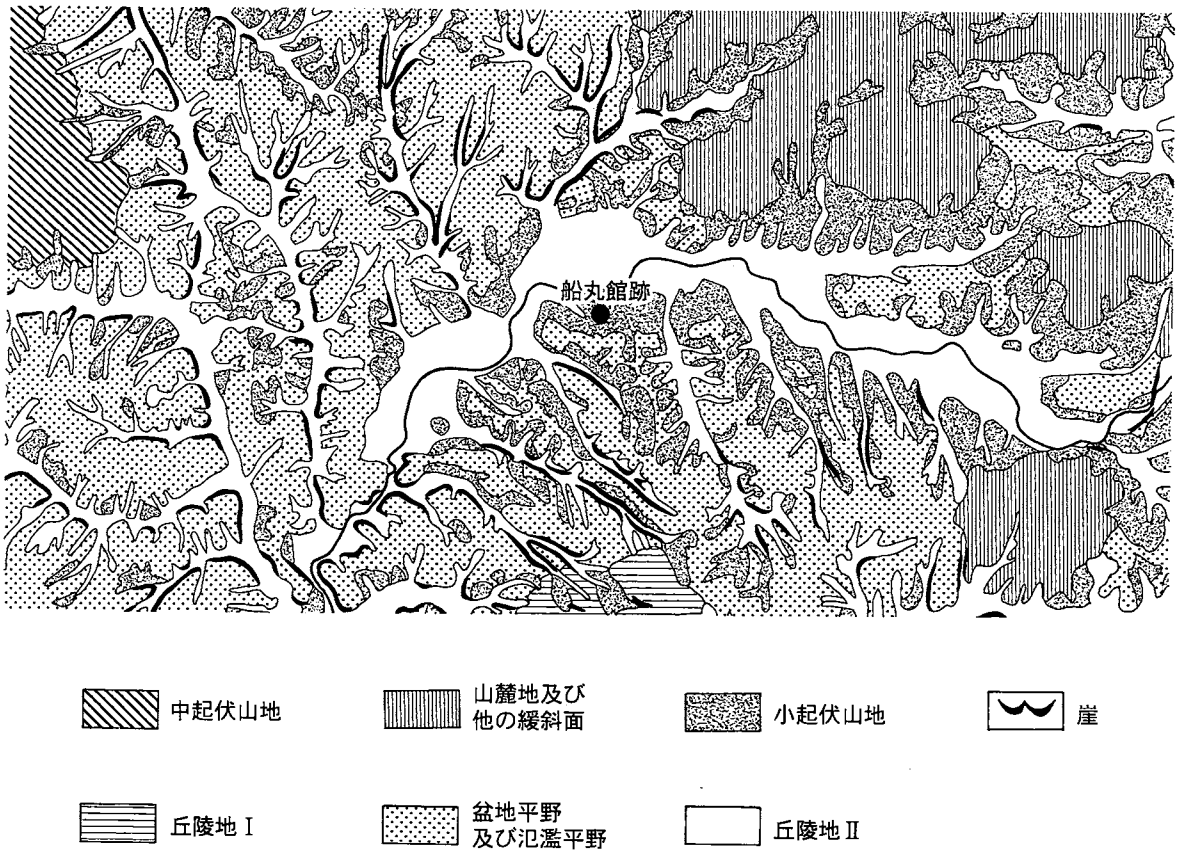
第３図　遺跡周辺の地形図

2．遺跡周辺の地形と地質

千厩町は岩手県の南端東磐井郡のほぼ中央に位置する。北は大東町、西は東山町、川崎村、南は藤沢町、東は室根村に隣接し、一関市と気仙沼市のほぼ中間に当たる北上山地南端に連なる丘陵地帯にある。北上山地は老年期山地がその後の準平原化したもので山地に続く丘陵部に小規模な段丘と沖積地が観察される。東磐井郡一体が一つの大きな盆地を形成している谷底部は小規模丘陵により細分され中原部は平坦ではない。事実「割(わり)山」と称する峠が各集落を隔てており、当地方が近代まで47ヶ村に分かれていた一つの要因とも考えられる。

面積は、89.76㎢、室根山から物見石山・立石山・枯木峠を北辺、枯木峠から大峰山・三島山・黄金山を南西辺、黄金山から砥石山・小松峠・大釜山・三枚山・室根山を南東辺とするほぼ三角形を呈する。また、この南東辺にあたる室根山から黄金山・論山を経て牡鹿半島に至る山々が分水嶺を成す。

遺跡はこの三角形のほぼ中央にあり、室根山から西流する千厩川左岸の段丘上にあたる。周辺は千厩花崗岩体の中央にある砂岩層の北端に位置する。



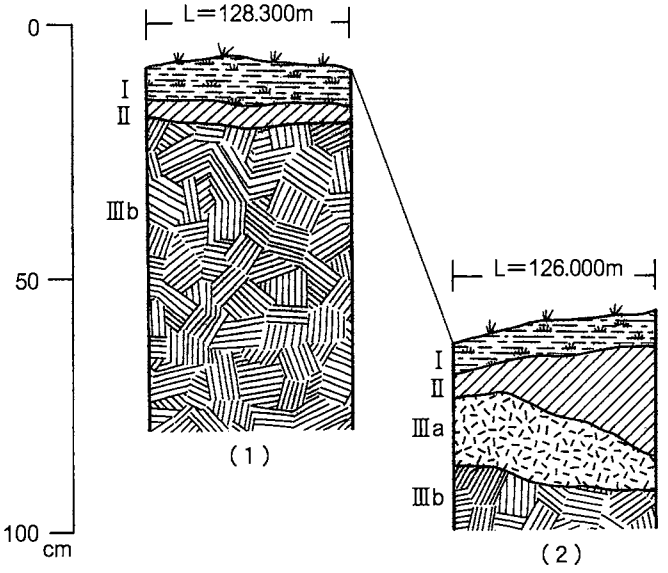
第４図　遺跡周辺の地形分類図

3．基本土層

調査区は長さ約172m、幅23m、高低差約８mを測り、北側は千厩川に解析された段丘崖である。調査区中央には自然地形を利用したと考えられる堀が南東から北西方向に走っている。遺跡の基盤層は花崗岩体に囲まれた砂岩層の北端にあるため花崗岩体の一部が堀底に一部露呈する箇所も見られる。表土層は約25cm前後と極めて薄く地点により若干の違いがあるがほぼ一様である。

Ⅰの郭は近代初期まで屋敷として利用されその後荒地となっていた。また、Ⅱの郭は昭和前半に炭焼きや畑作が行われていたがその後は荒地（山林）化して現在に至っている。

第Ⅱ層が遺構検出面である。また、調査区は主に２ヶ所の平場に立地していることから第５図は調査区のⅡの郭ⅢＢ10bグリッド（１）、Ⅲの郭ⅡＢ9jグリッド(２)における深掘りの土層断面で、これを遺跡の基本土層とした。



第５図　基本土層柱状図

4．歴史的環境と周辺の遺跡

平成11年末の岩手県教育委員会のまとめでは、千厩町内には200ヶ所の遺跡が登録されているが、城館跡は内37ヶ所で約18.5%を占める。第6図には遺跡を中心とする砂鉄川流域も含む範囲に所在する遺跡の分布を示した。

船丸館跡は千厩川を挟んで二日市城とも呼ばれる立花城（第6図18）の南に対峙する段丘上に位置している。周辺には沖積段丘や山体、台地上には午生運館（同55）をはじめとした中世の城館跡が分布するという特徴を示している。遺跡の南約2.8kmには平成11年度から2ヶ年にわたり発掘調査が行われている縄文中期の集落跡である清田台遺跡（同2）がある。

千厩町奥玉は古来奥玉保と呼ばれ、館の主要な時期と考えられる16世紀には葛西氏の勢力下にあった。城館の存続した社会的背景を理解するために中世、特に16世紀を中心に『岩手県史』、『千厩町史』、『奥玉村誌』等からこの地域の歴史を概観しておきたい。

船丸館跡に関する直接的な史料は、八ツ花城として『奥玉村誌』に「この城址は字船丸にあり、何人の居館なりしや詳しからざれども、その館址たりしは明らかなり。前方に館の屋敷と称する小字ありて今に及べり。尚、東北端に天満宮の小なる堂宇あり、往古より和名洞点神宮と尊崇して里人の参拝する所なり。（中略）なおこの城址居館について次の一説もあり橘（立花）館佐藤師久晩年の隠居所又は千葉大膳太夫の隠居館ではと称える識者もあり明確ならず。」と記されているだけである。

永治元年(1134)には藤原清衡の家臣佐藤師久がこの地に城を築き、藤原氏滅亡に功績のあった孫の佐藤師時が文治五年(1189)に二千町歩を賜り立花城に居住したと伝えられている。

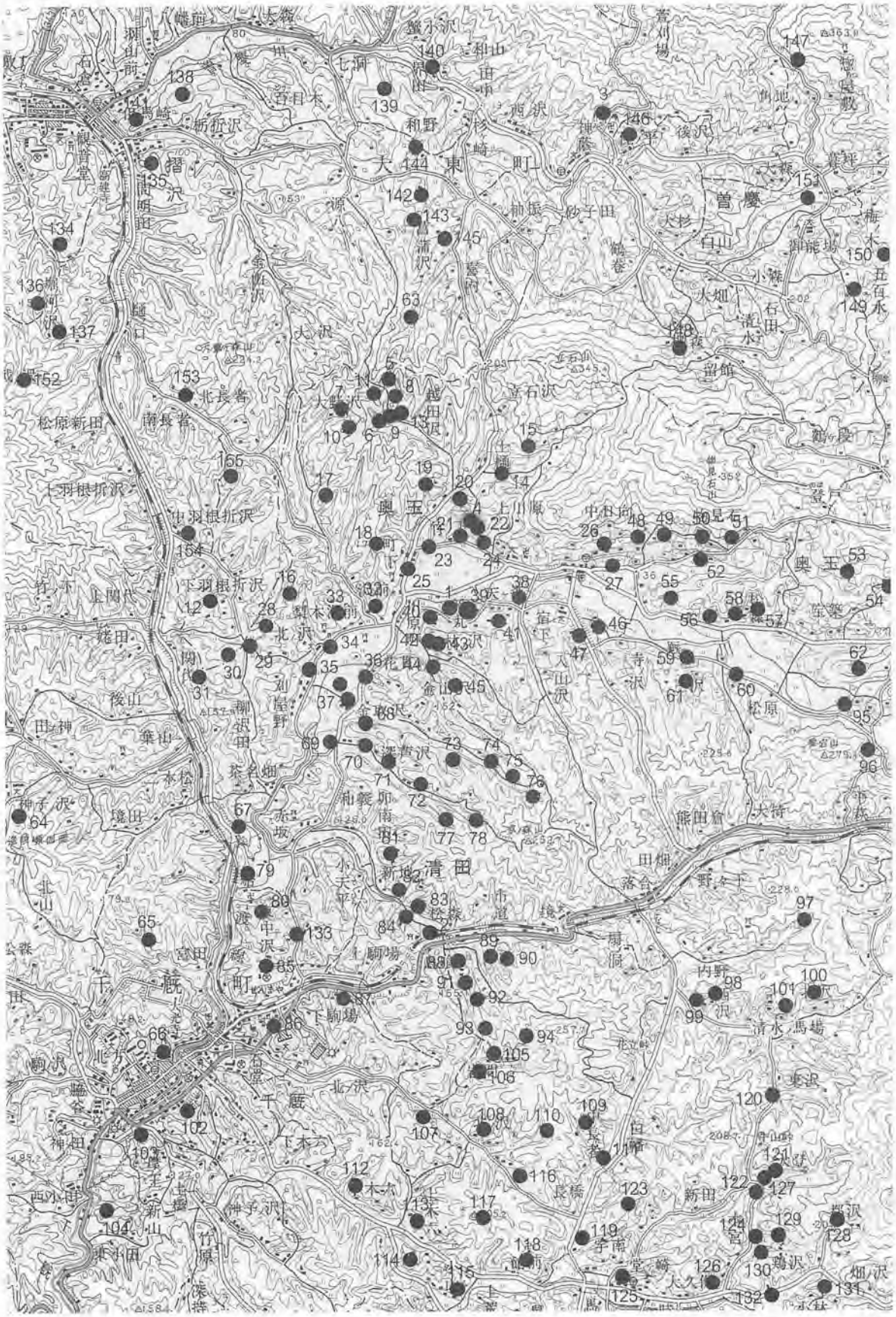
その後元亀三年(1503)には今野満五郎が葛西氏より宛行状を受け、更に前述の千葉大膳太夫輝胤（第7図参照）が永禄二年(1559)に葛西晴信から知行百余貫を賜ったとされている。

天正十八年(1590)の葛西大崎一揆後は葛西家の滅亡とともに土着帰農した家臣の中に輝胤の孫胤時の名がある。このときの居館は奥玉新館である。その後は奥玉も伊達政宗の支配下に入り幕末に至っている。

また、葛西氏滅亡に係わって、館の南側にある館の屋敷という小字名が残る場所には寺院跡があり、ここにあった大東町大原の長泉寺の末寺である西来院が大原の男沢氏（後南部氏に使え遠野の土淵を知行）とともに遠野市小友町に移ったとする伝承も伝えられる。西来院は現在も土淵町の常堅寺の末寺として当地にある。小友町は西来院の移転当時、平清水駿河の知行地で、平清水駿河はこの10年後に領主阿曽沼広長を鱒沢左馬之助と上野広吉とともに追放した中心人物である。

西来院はこの平清水駿河の居館である平清水館の北東側の緩斜面の平場に隣接し、船丸館や橘城にみられるように寺社を伴う中世的な館の様式がみられる。

昭和25年の空中写真には主郭（Ⅰの郭）を巡る土塁が確認されるが、この土塁は昭和31年の開田時に削平され消失している。当時のこの事業に参加した地権者の宍戸左行氏によればこの土塁の塁壁高は約1.8mに達し、削平された土砂はⅠの郭の東側1号堀跡に捨てられ平場の拡幅に用いられたという。この事実については、堀跡の断面調査により確認されている。また、近世から近代にかけてはⅡの郭には屋敷があったことも伝えられている。


大東町
和野
奥玉
清田
下駄場
上駄場
北長者
南長者
上羽根折沢
中羽根折沢
下羽根折沢
松原新田
松原
熊田倉
大畑
清水馬場
新田
長橋
鶏沢
畑沢
曽慶
白山
留館
登戸
上川原
中田原
寺沢
入山沢
金山
花貫
北沢
大野沢
越田沢
立石沢
大沢
和野
杉崎
柿振
砂子田
大杉
水畑
清水
石田
梅木
五百水
御能場
小森
栃折沢
七洞
和山
田中
蛭小沢
大森
観音堂
留舘
上関代
竹ノ木
荒田
後山
田ノ神
葉山
本松
境田
茶名畑
赤坂
和餐
卯南
新地
小天平
市道
橋
中沢
宮田
町
下本云
北沢
神田
西小田
東小田
竹原
深沢
新山
木ノ本
神子沢
北山
公園
石堂
千鹿
駒沢
北ノ沢
長橋
内野
沢
落合
田畑
野々下
屋敷
屋敷
山地
後沢
神蔵
大森
菅刈場
菅目本
栃崎
七洞
蛭小沢
和山
田中
蛭沢
杉崎
柿振
砂子田
大杉
白山
曽慶
御能場
小森
水畑
清水
石田
梅木
五百水
留舘
立石沢
大沢
越田沢
大野沢
北長者
南長者
松原新田
上羽根折沢
中羽根折沢
下羽根折沢
上関代
竹ノ木
荒田
後山
田ノ神
葉山
本松
境田
茶名畑
赤坂
和餐
卯南
新地
小天平
市道
橋
中沢
宮田
町
下駄場
上駄場

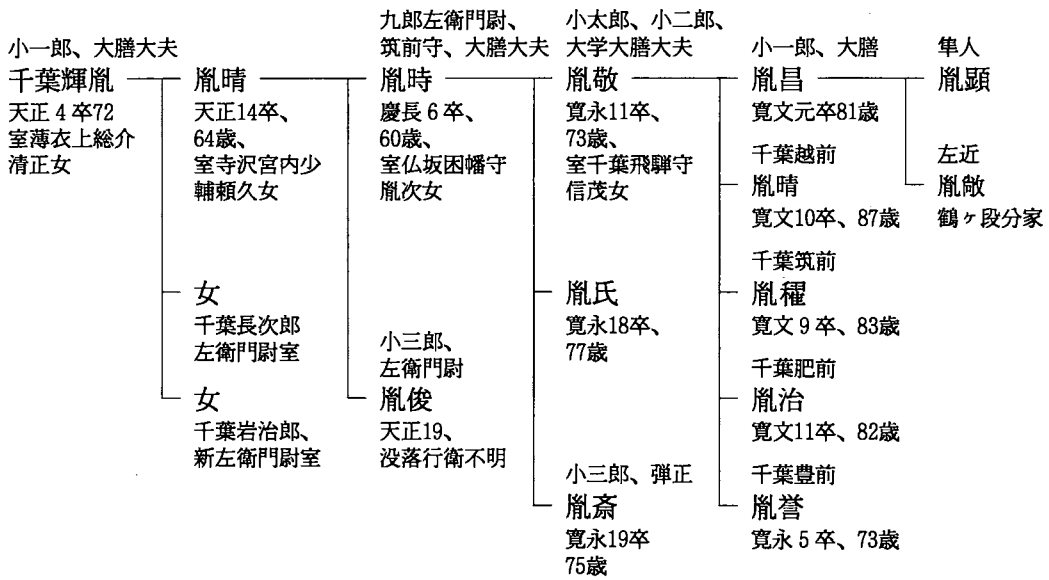
第１表　周辺の遺跡一覧(1)

遺跡No.	遺　跡　名	種別	時代	遺　構・遺　物
1	船丸館(八ッ花館)	城館跡	中～近世	小平場
2	清田台	散布地	縄文	縄文土器(前・中・後・晩期)、石鏃
3	八丁館(飯牛館・数洗沢城)	城館跡	中世	空堀、平場、帯郭
4	土樋	散布地		縄文土器
5	越田沢Ⅰ	散布地		土器、陶器
6	越田沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（晩期）
7		散布地	縄文	縄文土器
8	越田沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
9	越田沢Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器（晩期）
10	越田沢Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器、土師器
11	越田沢Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器、カメ、深鉢
12	千寿塚	祭祀跡	江戸時代	塚
13	越田沢Ⅶ	散布地	縄文	縄文土器（晩期）、カメ
14	立石沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
15	立石沢	散布地	古代	土師器
16	十三仏塚群		近世	
17	大野沢	散布地		石剣
18	二日市城(一六花館・立花城)	城館跡	中世	平場、伝井戸跡、砥石、帯郭、堀
19	越田沢Ⅷ	散布地	縄文	縄文土器、石鏃
20	竹ノ下Ⅰ	散布地	古代	土師器？、鉄滓
21	竹ノ下Ⅱ	散布地	縄文?古代	縄文土器、鉄滓、土師器
22	土樋Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
23	沖中	散布地	縄文	縄文土器
24	土川原	散布地	縄文	縄文土器、石鏃
25	町下	散布地	縄文・古代	フレーク、土師器？
26	中日向Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
27	中日向Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
28	中辺沢	散布地	縄文	
29	尼寺沢館(仮)	城館跡	中世	
30	尼寺沢館	散布地	縄文	
31	袋沢	散布地	縄文	
32	沢前	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)、石槌、石匙、石鏃
33	梨ノ木廃寺跡(仮？)	散布地	縄文	
34	奥玉北沢	散布地	古代	土師器
35	花貫	散布地	平安	須恵器、土師カメ
36	女聖	散布地	縄文	縄文土器
37	花貫Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
38	坂下	散布地	縄文	
39	船丸Ⅱ	散布地	平安？	土師器？
40	船丸Ⅰ	散布地	縄文・平安	縄文土器、カメ、土師器、赤焼、土器
41	長橋	散布地	縄文・平安	縄文土器(中・後・晩期)、炉跡、須恵器
42	林の下	散布地	縄文	縄文土器（前～中期）
43	長勝寺跡？	寺院跡？	平安？	
44	金山Ⅱ	散布地	縄文	
45	金山沢	散布地	縄文	縄文土器
46	宿下	集落跡？	縄文・平安?	縄文土器(前・中期)、石匙、石鏃、石槍
47	宿下Ⅱ	散布地	縄文	石鏃
48	中日向Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、石器
49	物見石Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器、石器
50	物見石Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、石器
51	物見石Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
52	熊ノ沢	散布地	縄文・平安	フレーク、須恵器
53	中野峠	散布地	縄文	縄文土器破片
54	宝築	散布地	縄文	縄文土器破片
55	牛生運館	城館跡	中世	平場、空堀、帯郭、堀
56	長者	散布地	縄文	
57	新城	城館跡？	中世？	
58	長者	散布地	縄文	フレーク
59	三沢	散布地	縄文	石鏃
60	一乗院	寺院跡	近世？	
61	三沢塚群	墳墓	近世？	
62	行人塚	墳墓	？	
63	猫館	散布地	縄文	縄文土器
64	蒲沢	散布地	縄文	縄文土器（中期）
65	宮田	散布地	縄文	縄文土器（早、前、晩期）
66	金山奉行所跡	屋敷跡		平場
67	西中沢塚群	塚群	近世	
68	七五田(エゾヤシキ)	散布地	縄文	縄文土器
69	観音山（伝）	寺院跡	？	？
70	深芦沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
71	深芦沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
72	深芦沢Ⅲ	散布地	縄文	弥生土器
73	金取沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
74	金取沢Ⅰ	集落跡？	縄文	縄文土器（前期）、石鏃
75	金取沢Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器
76	金取沢Ⅱ	集落跡？	縄文・弥生	縄文土器、弥生土器
77	深芦沢Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器
78	深芦沢Ⅴ	集落跡？	縄文	
79	中西沢	散布地	縄文	縄文土器（前期）、石鏃
80	中沢館(館山館)	城館跡	中世	平場、土器、堀切、主郭、土塁
81	赤間館	城館跡	中世	屋敷跡白石氏
82	新地Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
83	新地Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（中期）
84	新地Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
85	東中沢	散布地		古代土師器（？）、
86	上館	城館跡	中世	空堀、土塁、平場
87	折戸館	城館跡	中世	平場、井戸跡、古銭、染付、空堀、主郭、Ⅱの郭、掘立柱建物跡
88	鳥喰Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器？
89	要害館(松倉要害館)	散布地		空堀
90	桃園	散布地	縄文	縄文土器（中期）
91	鳥喰Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、砥石？
92	鳥喰Ⅲ	散布地	縄文	石鏃
93	コウドウボウ塚	墳墓	近世？	
94	岩間Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
95	行人塚	墳墓	？	
96	殿金沢館跡	城館跡	中近世	
97	内野	散布地	縄文	縄文土器
98	西沢Ⅰ	散布地	縄文	
99	塚		？	
100	北沢Ⅰ	散布地	縄文	
101	清水馬場小館	城館	中世	
102	八尾沢塚群	経塚？	？	
103	古ヶ口	散布地	中世・縄文	
104	小田館	城館跡	中世	
105	岩間Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
106	山寺跡	寺院跡	中世？	平場、土塁状遺構
107	岩間一里塚	塚群	近世	
108	鳥羽Ⅱ	散布地	縄文	
109	中長者Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、石鏃
110	鳥羽Ⅰ	散布地	縄文	
111	中長者Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器、石鏃
112	鶴館	城館跡	中世	
113	木六館(黄鹿館)	城館跡	中世	平場、腰郭
114	上木六塚群	塚群	近世？	
115	塚		？	
116	ジョウカイ塚	墳墓	？	
117	女ジョウカイ塚	墳墓？	？	
118	小梨城館(館山)	城館跡	中世	堀、平場、主郭、Ⅱの郭
119	経塚	経塚	？	
120	南沢Ⅰ	散布地	縄文	

第２表　周辺の遺跡一覧(2)

遺跡No.	遺　跡　名	種別	時代	遺　構・遺　物
121	大登館	城館跡	中世	平場、菅原氏
122	梅屋	屋敷跡	近世~近代	
123	宇南	散布地	縄文	縄文土器
124	大登Ⅰ	散布地	縄文	石棒、縄文土器
125	小梨上館	城館跡	中世	土器、平場、西城氏
126	谷地田酒造店	屋敷跡	近代	畑、石垣、井戸
127	一関藩御蔵場	屋敷跡	近世	
128	経塚	経塚	？	
129	大登Ⅱ	散布地	縄文	
130	新堀館	城館跡	中世	平場、物見の跡？
131	畑ノ沢	散布地	縄文	縄文土器(後・晩期)、弥生土器、石鏃、石棒、石斧、石槌
132	鶏沢	散布地	縄文	
133	赤間館	城館跡	中世	屋敷跡白石氏
134	山の神館	城館跡	中世	空堀、主郭
135	新城館	城館跡	中世	平場、堀
136	掃洞	散布地	縄文	壷
137	掃木洞館	城館跡	中世	
138	摺沢萩館	城館跡	中世	堀、平場、帯郭

遺跡No.	遺　跡　名	種別	時代	遺　構・遺　物
139	百目木	散布地	旧石器・縄文	旧石器、石鏃
140	境田館	散布地・城館跡	縄文・中世	縄文土器
141	新館（西館）	城館跡	中世	空濠、平場、帯郭、空堀
142	菖蒲沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
143	菖蒲沢Ⅱ	散布地	古代	土師器
144	和野	散布地	縄文	石鏃
145	猫館	城館跡	中世	土塁
146	中館(古舘・曽慶館)	城館跡	中世	空濠
147	上曽慶	散布地	縄文	縄文土器（晩期）
148	留館(遠見館)	城館跡	中世	
149	五百水Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（前期）
150	五百水Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（前期）
151	九戸山	散布地	縄文	石斧
152	戦沢	散布地	縄文	縄文土器(晩期)、石器、土偶
153	長者	散布地	縄文	縄文土器、石器、磨石
154	摺沢廻館	城館跡	中世	堀
155	羽根折沢館(要害)	城館跡	中世	空堀、平場
156	千寿塚	祭祀跡	江戸時代	塚



（中日向、千葉胤雄氏所蔵）

第７図　奥玉千葉氏家系譜

＜参考・引用文献＞

(1)　中川久夫・他（1963）：北上川中流域の第四系および地形　北上川流域の第四紀地史(2)　地質学雑誌第69巻第811号

(2)　中川久夫・他（1981）：第四系　「北上川流域地質図（二十万分の一）」　長谷川地質調査事務所

(3)　磯　望（1978）：北上山系開発地域土地分類基本調査　（盛岡）　岩手県

(4)　「岩手県史」

(5)　「千厩町史」

(6)　「奥玉村誌」

(7)　「城館ハンドブック」

(8)　「遠野市史」

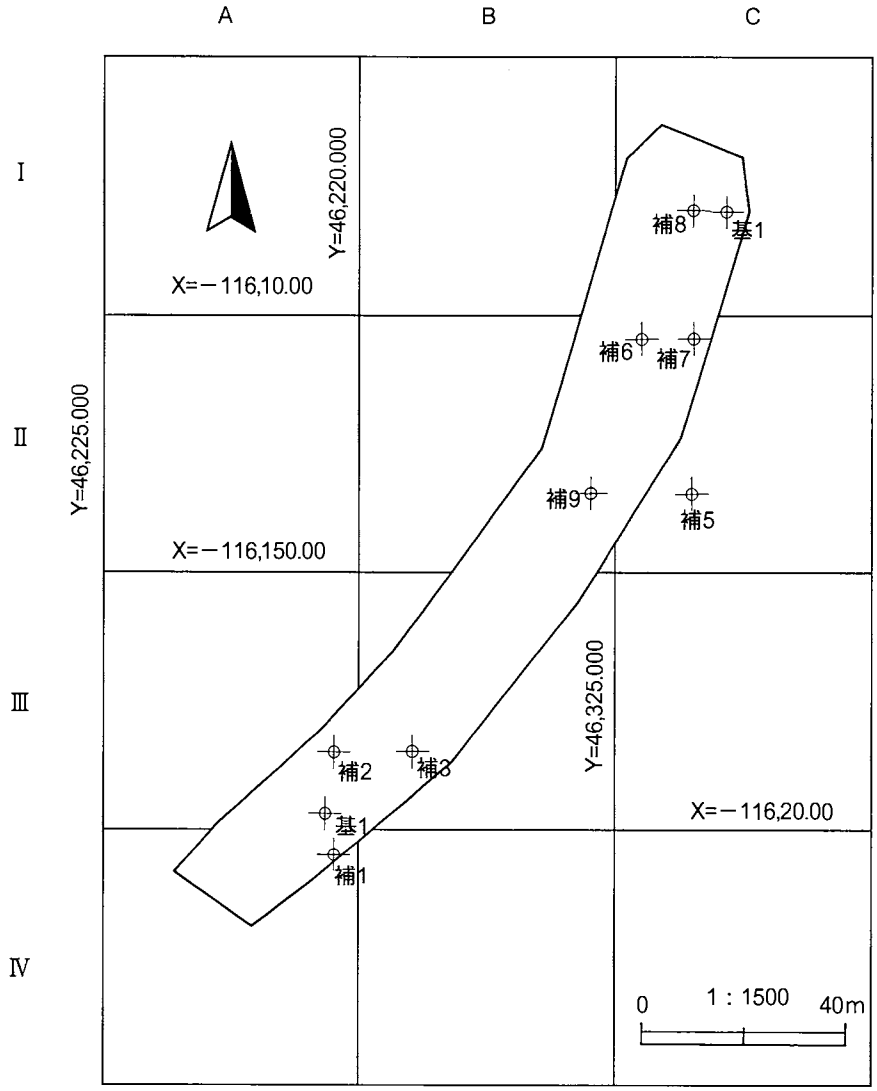
Ⅲ．調査の方法と室内整理

1．野外調査の方法

(1) 調査区のグリッド設定

グリッドの設定にあたっては、平面直角座標第Ｘ系の調査座標を用いた。座標原点はＸ＝－1,160,050.000、Ｙ＝＋246,225.000である。この座標原点から遺跡全体を一辺50ｍの大グリッドに区画し、原点から東方向へはアルファベットの大文字Ａ～Ｙ、南方向へはＩ～Ｖの番号を付し、これを組み合わせて北西隅を基準点に、ＩＢ、ⅣＤというように表示した。小グリッドは大グリッドを10等分して５×５ｍに区画し、東方向へはa～j、南方向へは１～10を付している。調査区の名称は、大区画と小区画の組み合わせでⅡＣ3j・ⅣＤ9bというように呼称している。また便宜的に2.5×2.5ｍの区画をⅡＣ3－4j・ⅣＤ9a－bと呼ぶこととする。

各基準点の成果値と杭高（標高）は次の通りである。



第８図　グリッド配置図

(2) 粗掘と遺構検出・遺構精査と遺物の取り上げ

雑物撤去と刈払い作業から開始し、試掘トレンチ、粗掘り、遺構検出、精査の順に進めた。表土が均一であることから、試掘を実施した後重機（ユンボ）により表土の除去を行った。

検出された遺構は、郭は6～8分法、柱穴及び土坑類については2分法を原則として精査を行い、必要に応じて適宜併用している。記録として必要な図面および写真撮影は、精査の各段階において行っている。

現況地形図の作成は平成12年5月24日のラジコンヘリによる撮影から行い、1／200の平面図を作成している。各々の遺構は従来の簡易的な遺り方測量で行ったが、郭・堀跡・土塁については、光波トランシットによる測量により平面図を作成した。実測図の縮尺は、1／20を基本として平面図と断面図を作成した。なお、郭・堀跡・土塁については1／100の平面図を作成している。

遺構内の出土遺物は、埋土の場合は上部・下部に分けて取り上げ、床面及び床面直上の遺物は、必要に応じて番号を付し、写真撮影・図面作成後に取り上げた。

本遺跡は、ほぼ全面が遺構にとなっているため、木材・土砂搬出用に造られた路面から採取された遺物を遺構外出土遺物とし、設定したグリッドを付して取り上げた。

(3) 写真撮影

野外調査での写真撮影は、6×7㎝判カメラ1台（モノクロ）と35㎜判カメラ2台（モノクロ、カラー・リバーサル）を使用し、遺構・遺物の検出状況や出土状況を必要に応じて撮影している。他にポラロイドカメラ1台をメモ的な用途として使用した。撮影にあたっては、撮影状況を記した「撮影カード」を事前に写し、整理時の混乱を防止した。また、平成12年度調査開始直前と調査終了間近にそれぞれラジコンヘリと小型飛行機による空中写真（4×5in：モノクロ、6×6㎝：カラー）の撮影を実施している。

(4) 広報活動

埋蔵文化財に対する啓蒙活動の一環として、見学希望者に対しては随時対応した。

2．室内整理の方法

(1) 作業手順

室内整理は現状で残った遺物の水洗・注記から開始し、各遺構ごとの仕分け、遺物の接合復元、遺物の実測、拓本、遺構・遺物のトレース、遺物の写真撮影、遺構・遺物図版、写真図版の順に作業を進めた。これらの作業と平行して遺物の計測、原稿の執筆、各種の鑑定・分析を行い報告書に掲載している。

(2) 遺構

遺構図面は、点検後必要に応じて第2原図を作成した。現況地形図は写真測量より作成し、縮尺1／200として委託業者と粗図段階で数度打ち合わせを行い、点検指示を与えトレースまで行った。また、単独の遺構として必要と思われるものについては、これと光波トランシット測量による1／100平面図と照合させながら第2原図を随時作成した。

また、郭・堀跡の面積が大きいため平面図は、遺構配置図をもってあてている。ただし、各断面図にはその位置を示すために平面・断面模式図（1／1500）を掲載している。

遺構図版は以下の縮尺を原則としたが一部変更もあり、それぞれスケールあるいは縮尺率を付している。掘立柱建物跡1／80、柱穴群1／40～60、焼土遺構1／40、土坑1／40、各部断面1／40等である。断面図中の石はS、撹乱はcで図示している。なお、土層がほぼ一様な郭等の断面図には適宜柱状図を使用している。

方位は座標軸からの角度で、平面図における北印も座標北（基準点1における真北方向角は、−0° 20'08.27″

西偏する）を示している。曲輪の面積はその輪郭線をデジタル式のプラニメーター（エリアカーブメーター）によって3回計測し、この平均値を記載した。

また、遺構の表現は凡例（第12図）に示すとおりである。

(3) 遺物

遺物は洗浄後全出土遺物を点検し、口縁部・底部の反転可能なものを実測すること
実測や拓本の必要なものを選択した後登録して注記・接合を行った。全体の遺物量が少ないことや小破片のものが多いことから、実測・拓本の必要のないものは写真掲載のみにとどめている。
実測した遺物の選択基準としては、

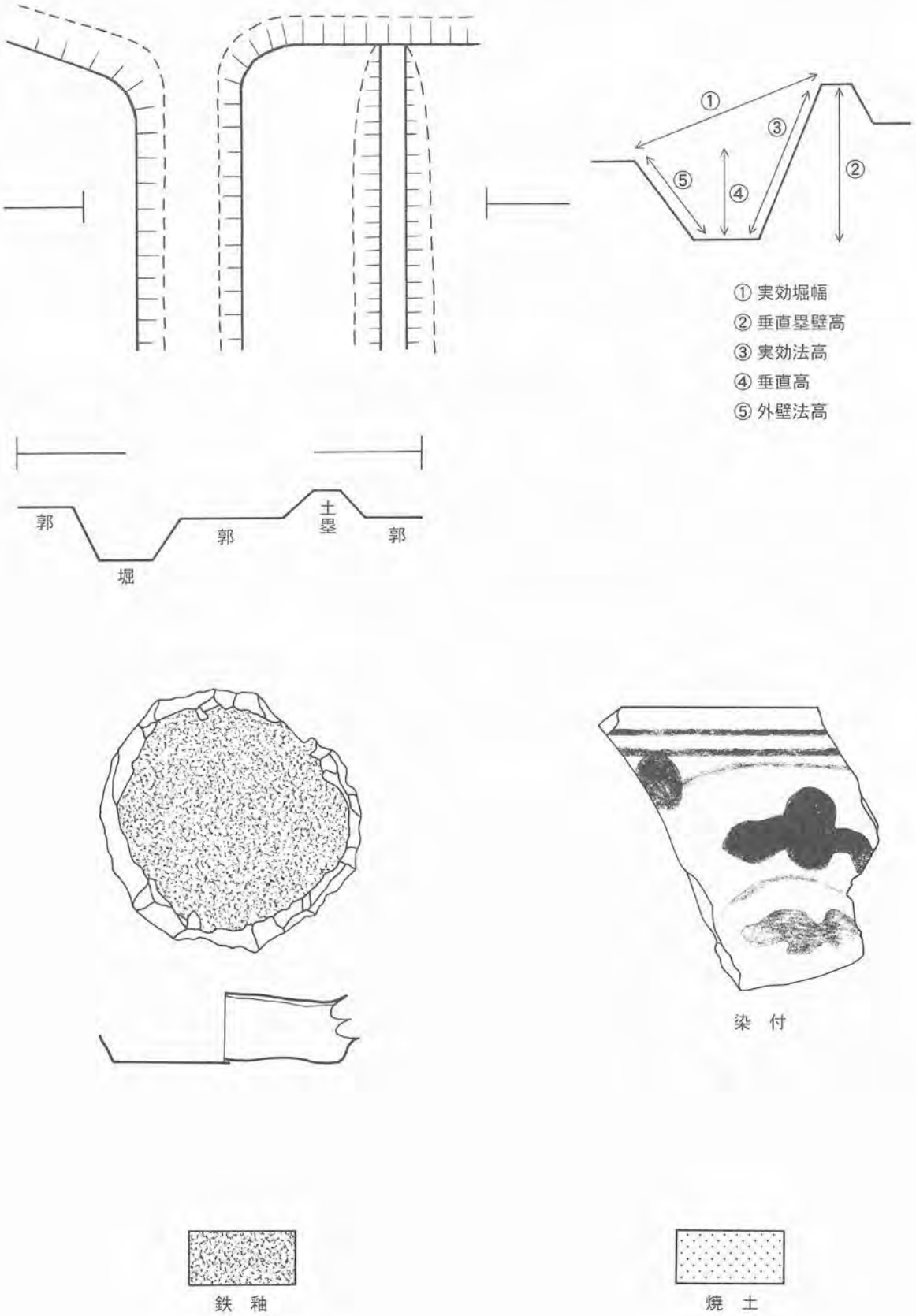
報告書に掲載した遺物の選択基準は、陶磁器については口縁部や底部の反転が可能なものを原則として実測した。土器には完形品や復元が可能なものがなかったため適宜、拓影と断面実測を行った。石製品、鉄製品は出土した全てを記載した。

掲載遺物の図版の縮尺率は、次の通りである。陶磁器・石製品・鉄製品が1／2、土器・土器拓影が1／2、銭貨が1／1、木製品1／6を原則としているが、遺物の大小に応じては適宜縮尺を変え、図版ごとにスケールを付してある。

遺物の調整技法等の表現は凡例に示す通りである。

凡　例

1．本報告書に収載した遺構実測図に付した方位は、国家座標第X系による座標北を示す。
2．表中の法量の推定値は(　)、残存値は＜　＞で表示した。
3．挿図中に使用したスクリーン・トーンは以下のとおりである。
4．堀跡・塁壁の計測位置と呼称は以下のとおりとした。
5．基本土層断面図にはローマ数字を、遺構内の土層は算用数字を用いた。



第９図　実測凡例図

Ⅳ．検出された遺構と遺物

1．概要

発掘調査により検出された遺構と遺物から、本遺跡は縄文時代から中・近世に至るまでの遺跡であることが明らかとなった。縄文時代の遺構は検出されず、主体をしめる遺構は中世城館に関連する遺構である。

郭は３ヶ所が検出され、Ⅰの郭は館の主郭と考えられ、空中写真（写真図版３）ではこれを囲む土塁と空堀が明確に確認できる。しかしこの土塁は開田事業(Ｓ31)により消失しているため、調査では平場（約47.3㎡）の確認のみに留まった。主郭の様子は調査区外の北西端に虎口と想定される一部がみられるだけである。この主郭を２条の堀が隔ててⅡの郭とⅢの郭が東側と北東側に位置する。以下では堀と郭ごとに検出された遺構・遺物について述べたい。

2．堀跡

堀跡は２条を登録した。

１号堀跡

遺構（第10図　写真図版４）

＜位置＞　調査区の標高124.9m付近、ⅢＡ10e～ⅢＢ3dグリッドに位置する。

＜規模・形態・時期＞　Ⅰの郭（主郭）とⅡの郭の間に普請された空堀である。ⅢＢ3dグリッド付近で２号堀跡につながる。検出された長さは30m、最大堀幅6.7m、深さ2.4mを測る。普請時の土砂は主郭を巡っていた土塁の構築に用いられたと考えられ、ⅠＡ10cグリッド付近から土塁とともに北西方向に主郭の南西辺を廻っていたと考えられるが、道路建設により大半が消失している。中世（15～16世紀）と考えられる。

遺物（第33図　写真図版11）

木樋（22）や土器片が埋土下層や法面から出土している。

２号堀跡

遺構（第11図　写真図版４）

＜位置＞　調査区の標高122.2m付近、ⅡＢ7g～ⅢＢ4dグリッドに位置する。調査区外ⅠＢ2eグリッド付近で千厩川につながっている。

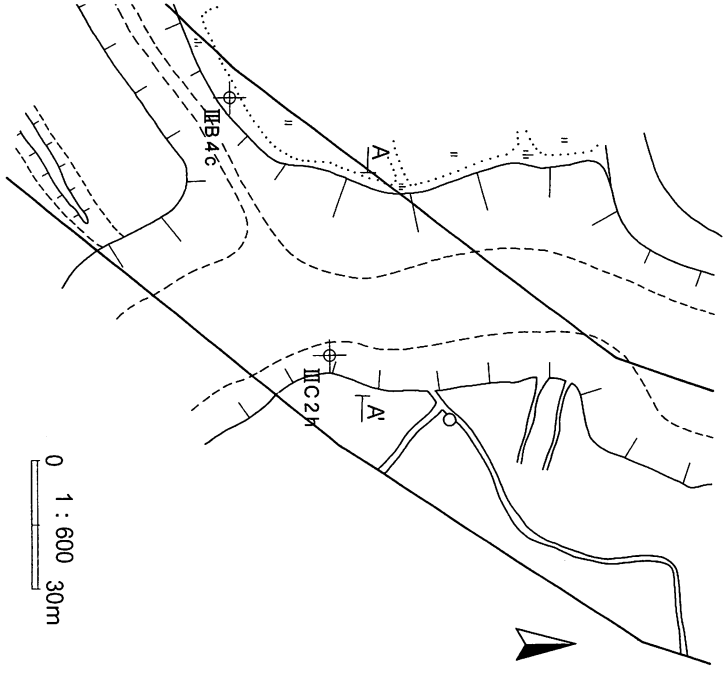
＜規模・形態・時期＞　Ⅰの郭とⅢの郭、Ⅱの郭とⅢの郭の間におかれた自然地形を利用した堀跡である。ⅢＢ3dグリッド付近で１号堀跡に続く。僅かに湧水があるためⅢＢ4dグリッドより北側の堀跡中央部は湿地の様相を呈し、これより南東方向は空堀を成す。調査区内の長さは約32.5mを測るが堀の全長は約160m、深さ5.3mを測る。中世（15～16世紀）と考えられる。

遺物（第33図　写真図版11）

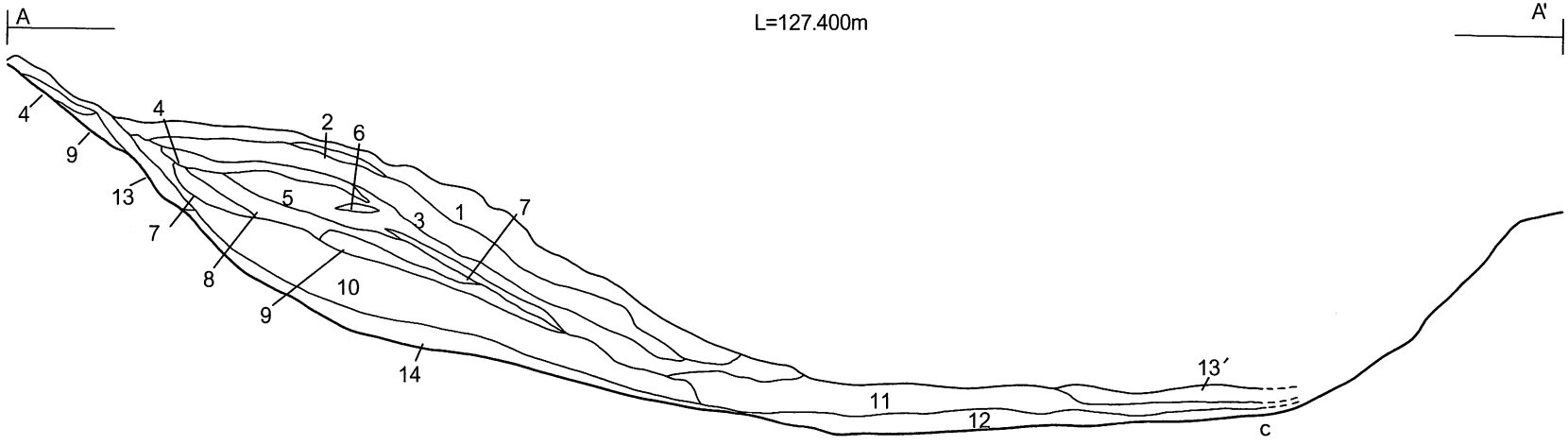
堀跡の埋土中から銭貨（18・19）、硯（25）、磁器片（12・14）が出土している。

3．Ⅰの郭の遺構

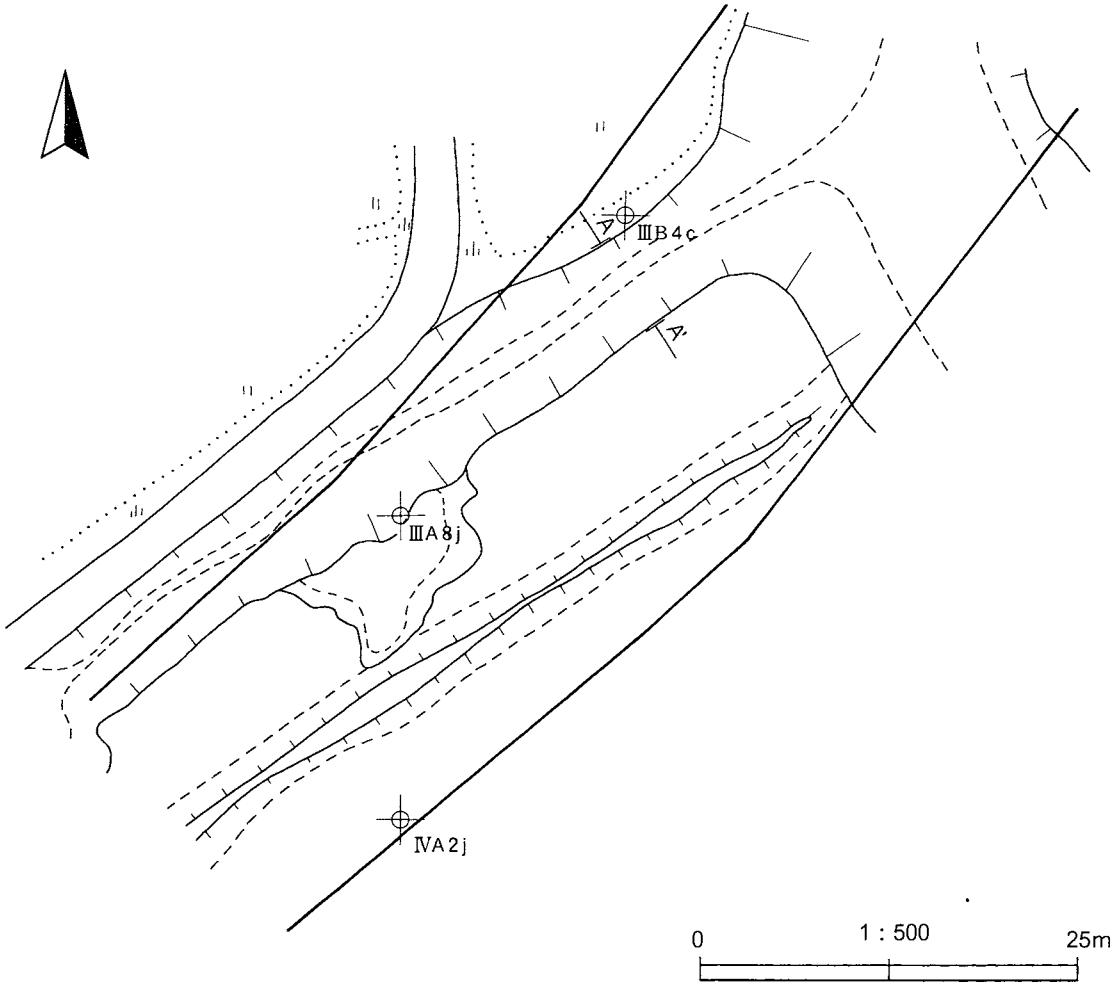
Ⅰの郭はⅢＢ4a～ⅢＢ1dグリッド付近に位置し、主郭の南東辺に１号堀跡、北東辺に２号堀跡が構築されている。土塁（前述）の痕跡は調査区内ではその切り崩された残土のみを確認した。主郭と考えられる。

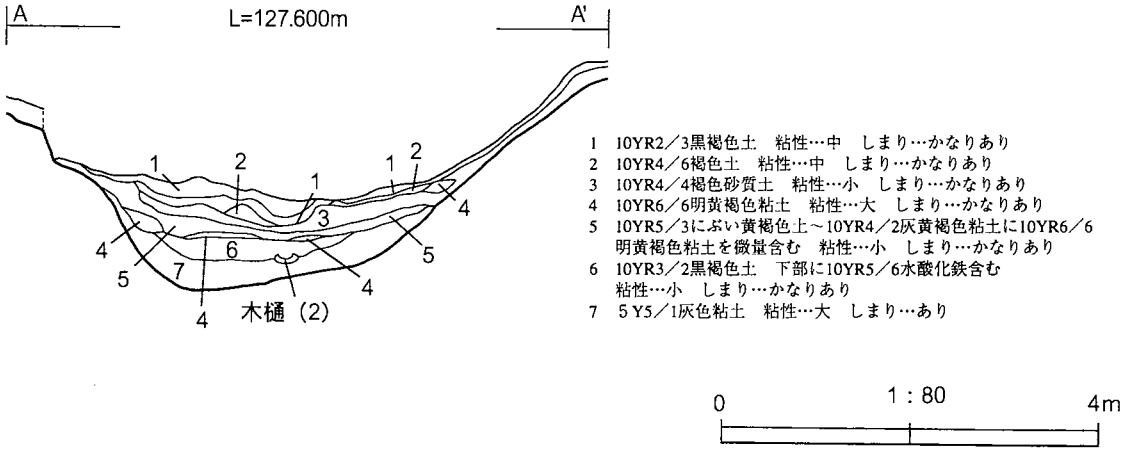


1 10YR3／3暗褐色土　粘性…小　しまり…かなりあり
2 10YR5／8黄褐色粘土主体に10YR4／4褐色土をブロック状に混入
粘性…小　しまり…かなりあり
3 10YR5／8黄褐色粘土、5Y7／3浅黄色粘土、10YR4／4褐色粘土の混合土
粘性…中　しまり…かなりあり
4 10YR4／4褐色粘土質土主体に10YR5／8黄褐色粘土、10YR2／3黒褐色土を
ブロック状に混入　粘性…小　しまり…かなりあり
5 10YR4／4褐色粘土質土、10YR5／8黄褐色粘土、5Y7／3浅黄色粘土の混合土
粘性…中　しまり…かなりあり
6 10YR3／4暗褐色土主体に10YR5／8黄褐色粘土混入
粘性…小　しまり…かなりあり
7 10YR3／4褐色土主体に10YR5／8黄褐色粘土、5Y7／3浅黄褐色粘土をブロック状に混入
粘性…中　しまり…かなりあり
8 10YR5／8黄褐色粘土主体に5Y7／3浅黄褐色粘土、10YR3／4暗褐色土をブロック状に混入
粘性…中　しまり…かなりあり
9 5Y7／3浅黄色粘土主体に10YR5／8黄褐色粘土混入　粘性…中　しまり…かなりあり
10 5BG7／3　7／1明青灰粘土(グライ化層)と10YR3／4暗褐色土の混合土、炭化物混入
粘性…大　しまり…かなりあり
11 10YR4／3にぶい黄褐色砂主体に10YR5／8黄褐色粘土、10YR4／1灰色粘土混入
粘性…なし　しまり…かなりあり
12 10YR3／2オリーブ黒色砂質土　粘性…小　しまり…かなりあり
13 10YR3／4暗褐色土　粘性…小　しまり…かなりあり
13 10YR3／4暗褐色土　粘性…小　しまり…ややあり
14 7.5Y3／1オリーブ黒色粘土(グライ化層…旧表土) 粘性…大　しまり…あり



第10図　1号堀跡


A
ⅢB4c
A'
ⅢA8j
ⅣA2j
0
1：500
25m


A
L=127.600m
A'
1
2
1
1
2
3
4
4
5
6
5
7
4
4
木樋（2）
1 10YR2／3黒褐色土　粘性…中　しまり…かなりあり
2 10YR4／6褐色土　粘性…中　しまり…かなりあり
3 10YR4／4褐色砂質土　粘性…小　しまり…かなりあり
4 10YR6／6明黄褐色粘土　粘性…大　しまり…かなりあり
5 10YR5／3にぶい黄褐色土～10YR4／2灰黄褐色粘土に10YR6／6
明黄褐色粘土を微量含む　粘性…小　しまり…かなりあり
6 10YR3／2黒褐色土　下部に10YR5／6水酸化鉄含む
粘性…小　しまり…かなりあり
7 5Y5／1灰色粘土　粘性…大　しまり…あり
0
1：80
4m

第11図　2号堀跡

4．Ⅱの郭の遺構

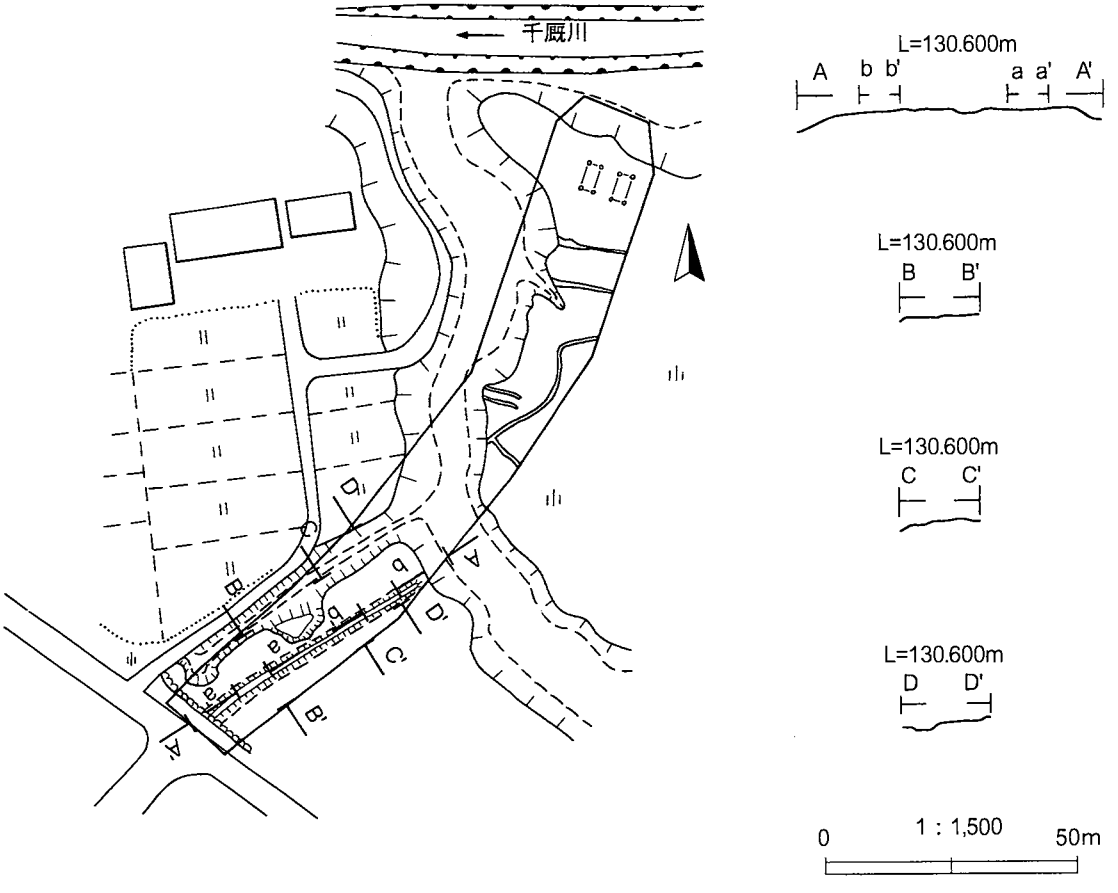
Ⅱの郭はⅣA1b～ⅢB5eグリッドにあり、土塁状遺構、焼土遺構、柱穴状小土坑を検出した。

郭西側の一部や中央部に近代と考えられる撹乱箇所が数カ所あり、南側は農道建設により大きく削平されている。

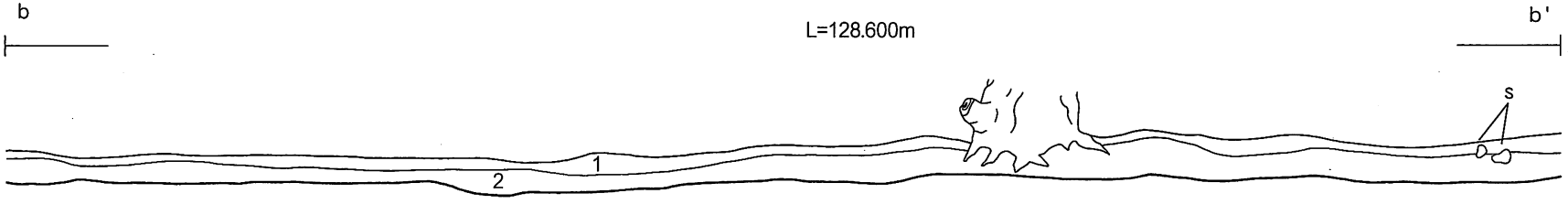
郭の検出面は堅く締まっており、土塁状遺構の西側には整地層も確認されているが、建物の痕跡は検出されなかった。これについては、調査区の東側にその可能性が残る。

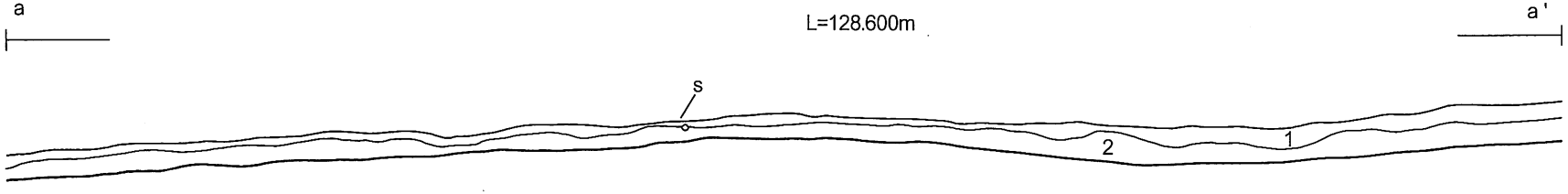
遺物（第34図　写真図版12）

唐津産陶器（5）、肥前磁器（6・8・9・12～14・17）、16世紀前半の瀬戸・美濃系天目茶碗（16）、鍋片（21）、煙管（22）、羽口（25）や土器片が出土している。



第12図　Ⅱの郭（1）





1　10YR2／3黒褐色土、10YR4／3にぶい黄褐色土混入　粘性…小　しまり…なし
2　10YR4／6褐色土　粘性…小　しまり…かなりあり

0　1：40　2m

第13図　Ⅱの郭（2）

(1) 土塁状遺構

土塁状遺構は１基を登録した。

１号土塁状遺構

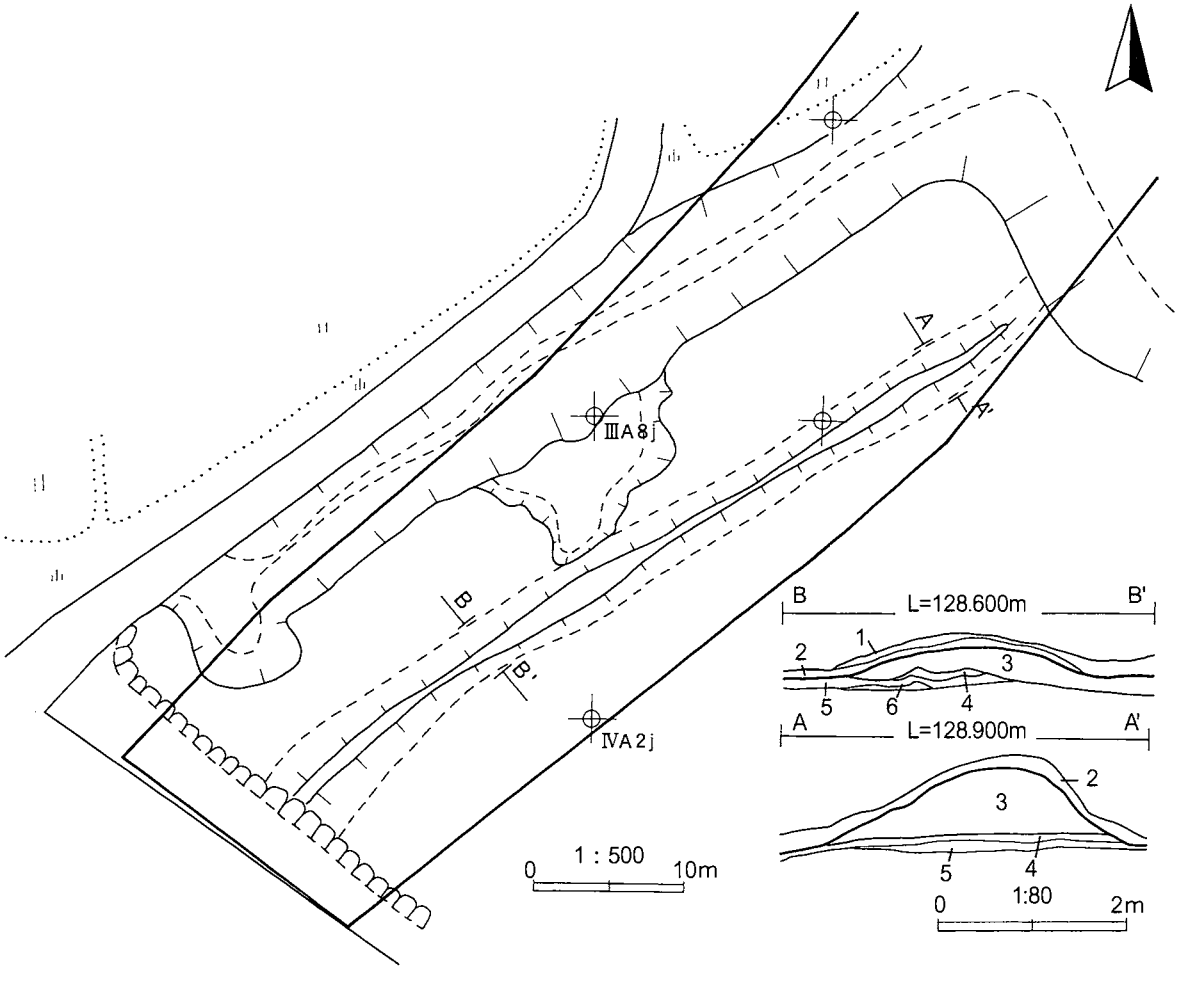
遺構（第14図　写真図版５）

＜位置＞　調査区の標高1224.4m付近、ⅣA3e～ⅢB6eグリッドに位置する。

＜規模・形態＞　検出された規模は、長さ60m、幅2.7～5.4m、垂直塁壁高60～90cmを測る。Ⅱの郭を南南西から北北東へ一直線に構築されている。塁壁高から戦略的なものではなく地境等の区画に利用された遺構と考えられる。

遺物　出土遺物はない。

時期　中世（16世紀）～近世と考えられる。



1　10YR2／3黒褐色土下部に10YR4／3にぶい黄褐色土混入
　粘性…小　しまり…なし
2　10YR4／4褐色土　粘性…小　しまり…かなりあり
3　10YR4／6褐色土、10YR3／3暗褐色土、
　10YR5／4にぶい黄褐色粘土質土の混合土
　粘性…小　しまり…かなりあり
4　10YR3／3暗褐色土
5　10YR5／4にぶい黄褐色粘土質土
　粘性…中　しまり…あり
6　10YR5／8黄褐色粘土
　粘性…中　しまり…かなりあり

第14図　土塁状遺構

(2) 焼土遺構

焼土遺構は１基を登録した。

１号焼土遺構

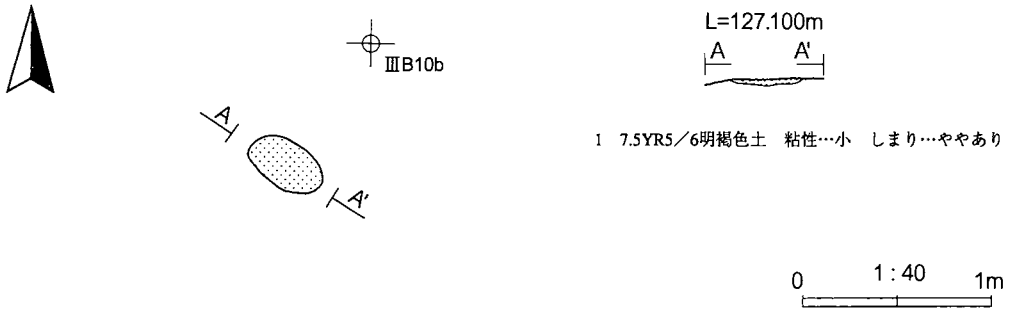
遺構（第15図　写真図版５）

＜位置＞　調査区の標高127.9m付近、ⅢＢ10aグリッドに位置する。

＜規模・形態＞　検出された規模は、28×44㎝、楕円形を呈する。焼土の厚さは３㎝を測り、上部には炭化物を含有する。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。



第15図　１号焼土遺構

(3) 柱穴群

柱穴群は１基を登録した。柱穴状の小土坑を一括して柱穴群とした。

柱穴群

遺構（第16図）

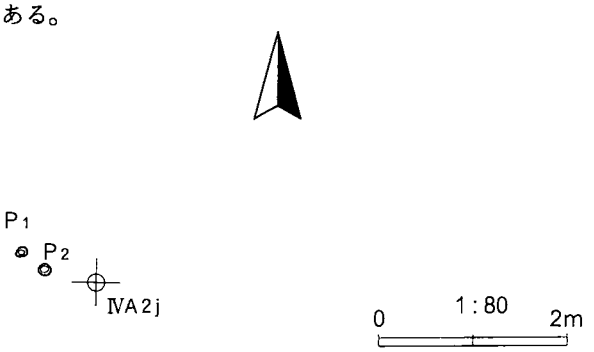
＜位置＞　ⅣＡ1iグリッドに位置する。

＜埋土＞　暗褐色～褐色土を主体とする。

遺物・時期　出土遺物はない。時期不明である。

第３表　Ⅱの郭柱穴計測表　単位：㎝

P No.	径	深	備　考
P92	24×18	8.2	
P93	30×26	7.6	



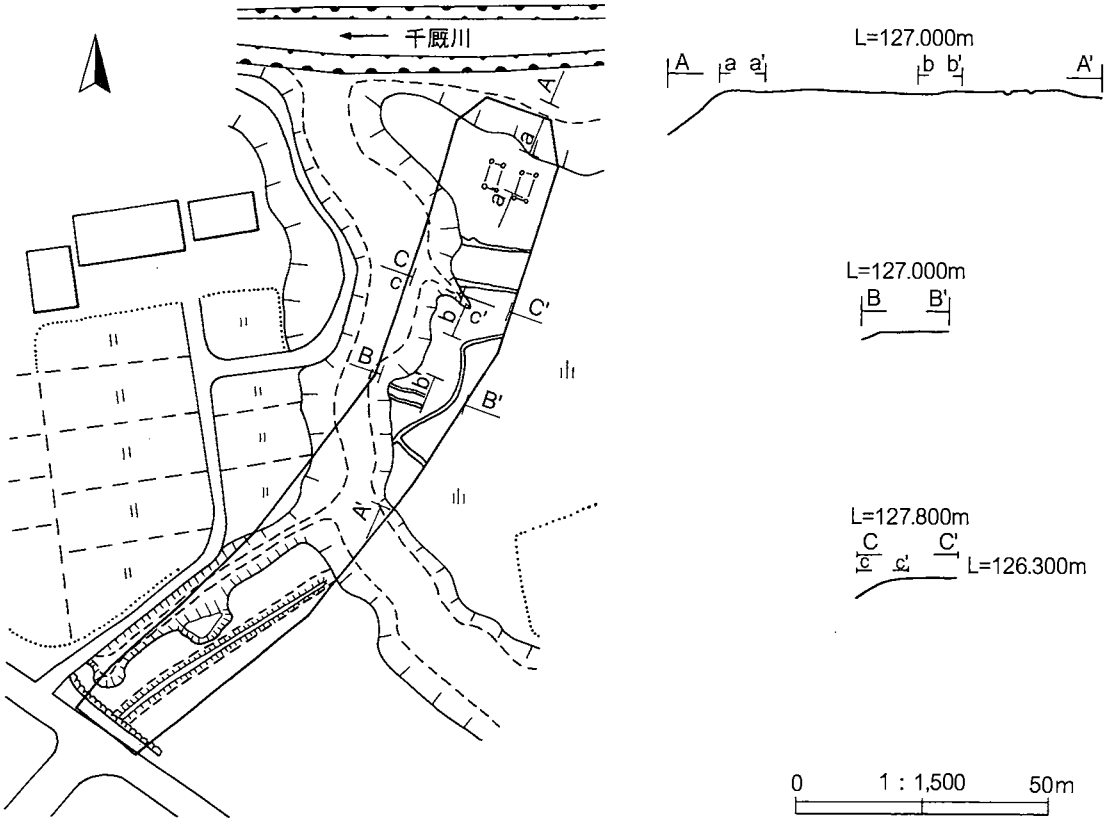
第16図　Ⅱの郭柱穴群

5．Ⅲの郭の遺構

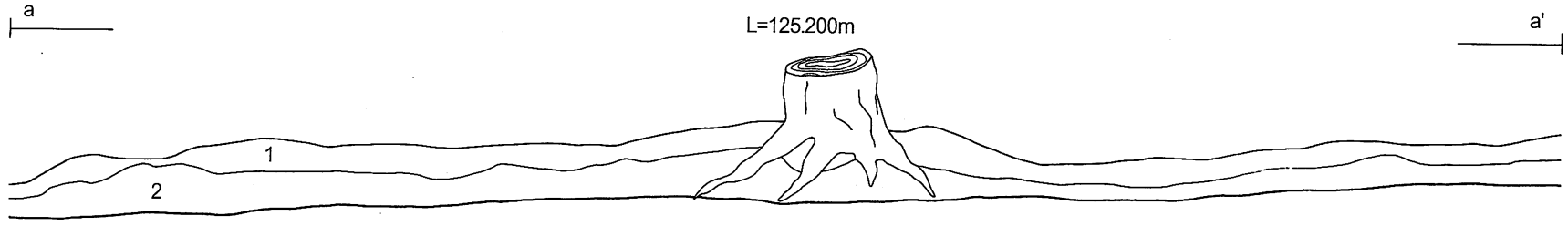
Ⅲの郭は西から南側を2号堀跡に囲まれ千厩川に面する段丘の先端に位置する。掘立柱建物跡、土坑、溝跡、柱穴群を検出した。

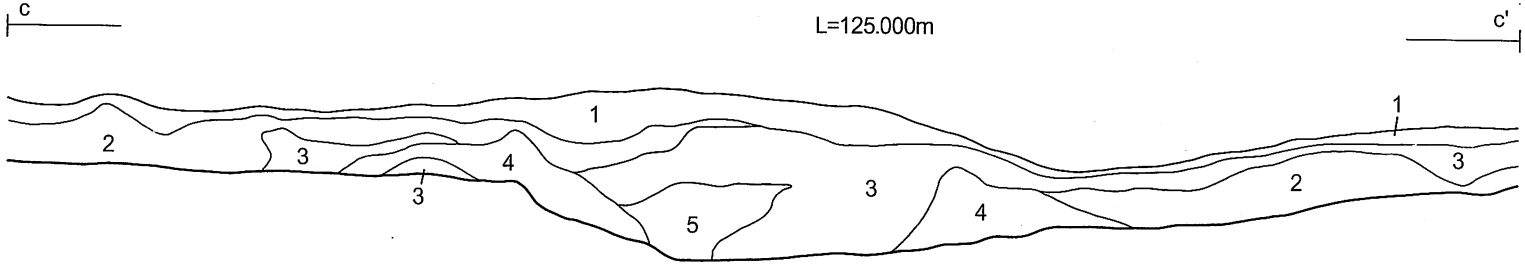
遺物（第35図　写真図版13）

郭の検出面から中国産磁器（1）、肥前産磁器（2・3）、12世紀と考えられる常滑産甕片（4）、砥石(26)、土器片等が出土している。



第17図　Ⅲの郭（1）

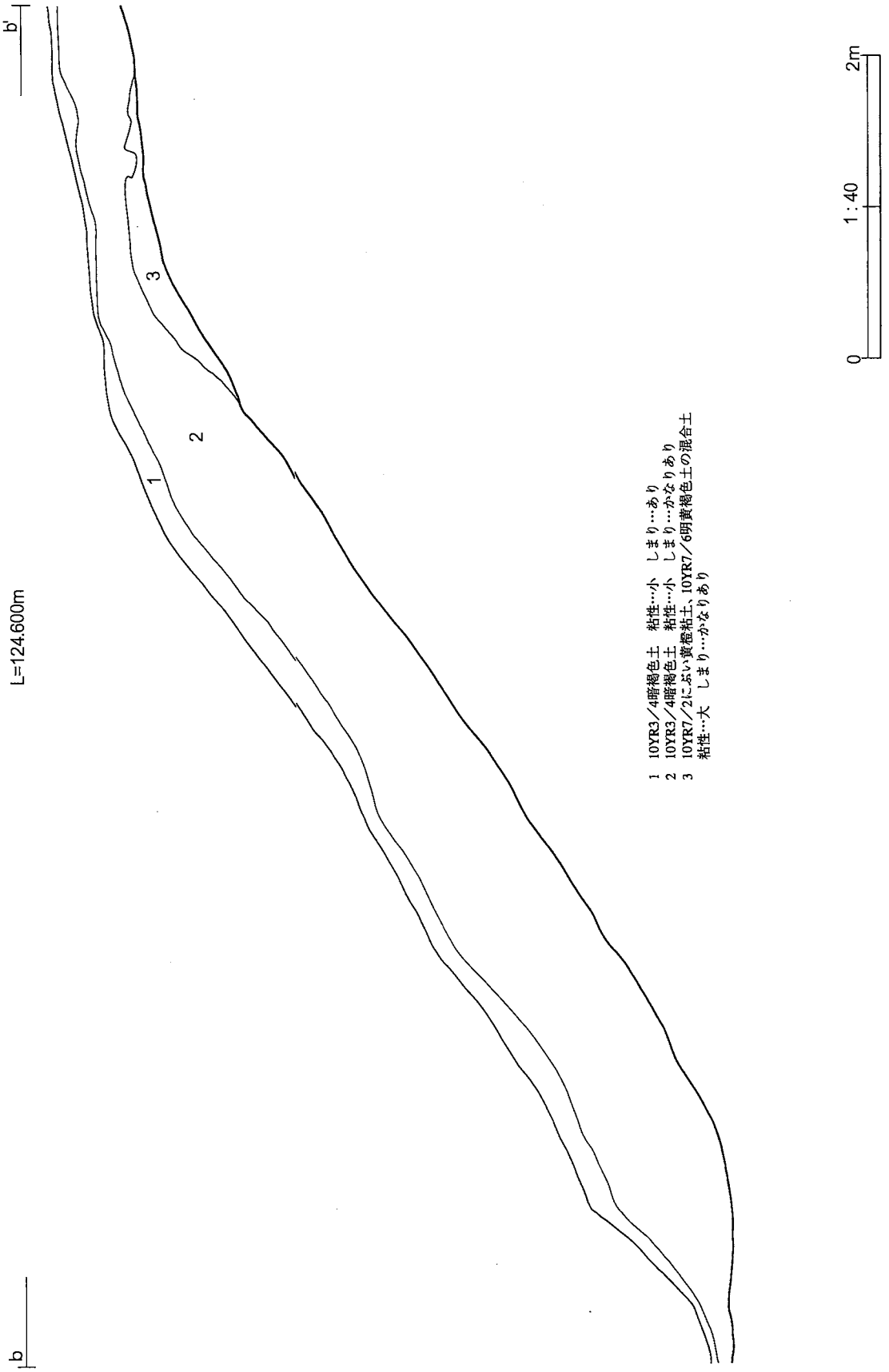




1　10YR3／4暗褐色土　粘性…小　しまり…あり
2　10YR5／3にぶい黄褐色土、7.5YR6／8を1％混入　粘性…小　しまり…かなりあり
3　10YR3／4暗褐色土　粘性…中　しまり…あり
4　5Y6／4オリーブ黄砂質土、10YR3／4暗褐色土、10YR6／8明黄褐色土混入
　粘性…中　しまり…かなりあり
5　10YR2／3黒褐色土　粘性…中　しまり…あり

0　1：40　2m

第18図　Ⅲの郭（2）


b'
b
L=124.600m
1
2
3
1 10YR3／4暗褐色土 粘性…小 しまり…あり
2 10YR3／4暗褐色土 粘性…小 しまり…かなりあり
3 10YR7／2にぶい黄橙粘土、10YR7／6明黄褐色土の混合土
粘性…大 しまり…かなりあり
0
1:40
2m

第19図　Ⅲの郭（3）

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は2棟を登録した。

1号掘立柱建物跡

遺構（第20図　写真図版6）

＜位置＞　調査区ＩＣ6c～ＩＣ8bグリッド、標高124.2m、段丘の北端部、2号掘立柱建物跡の西側に位置する。

＜規模・構造・方向＞　規模は、北(P1－P2)—3.1m（1間)、西(P2－P3)—6.5m（1間)、南(P3－P4)—3.1m（1間)、東(P4－P1)—6.6m(1間）の方形を呈する。東辺も2間と推定されるがP3—P4間から柱穴は検出されなかった。建物の軸方向はN—16°—Eである。

＜堀方・埋土＞　柱穴の堀方は円形を呈し、深さは5～40cmを測る。埋土は、暗褐色土に褐色土がブロック状に含まれており、柱痕も検出された。

遺物

＜出土状況＞　出土遺物はない。

時期　2号掘立柱建物跡と同じ17世紀と考えられる。

2号掘立柱建物跡

遺構（第21図　写真図版6）

＜位置＞　調査区ＩＣ7d～ＩＣ8dグリッド、標高142.2m、段丘の北端部、1号掘立柱建物跡の東に位置する。

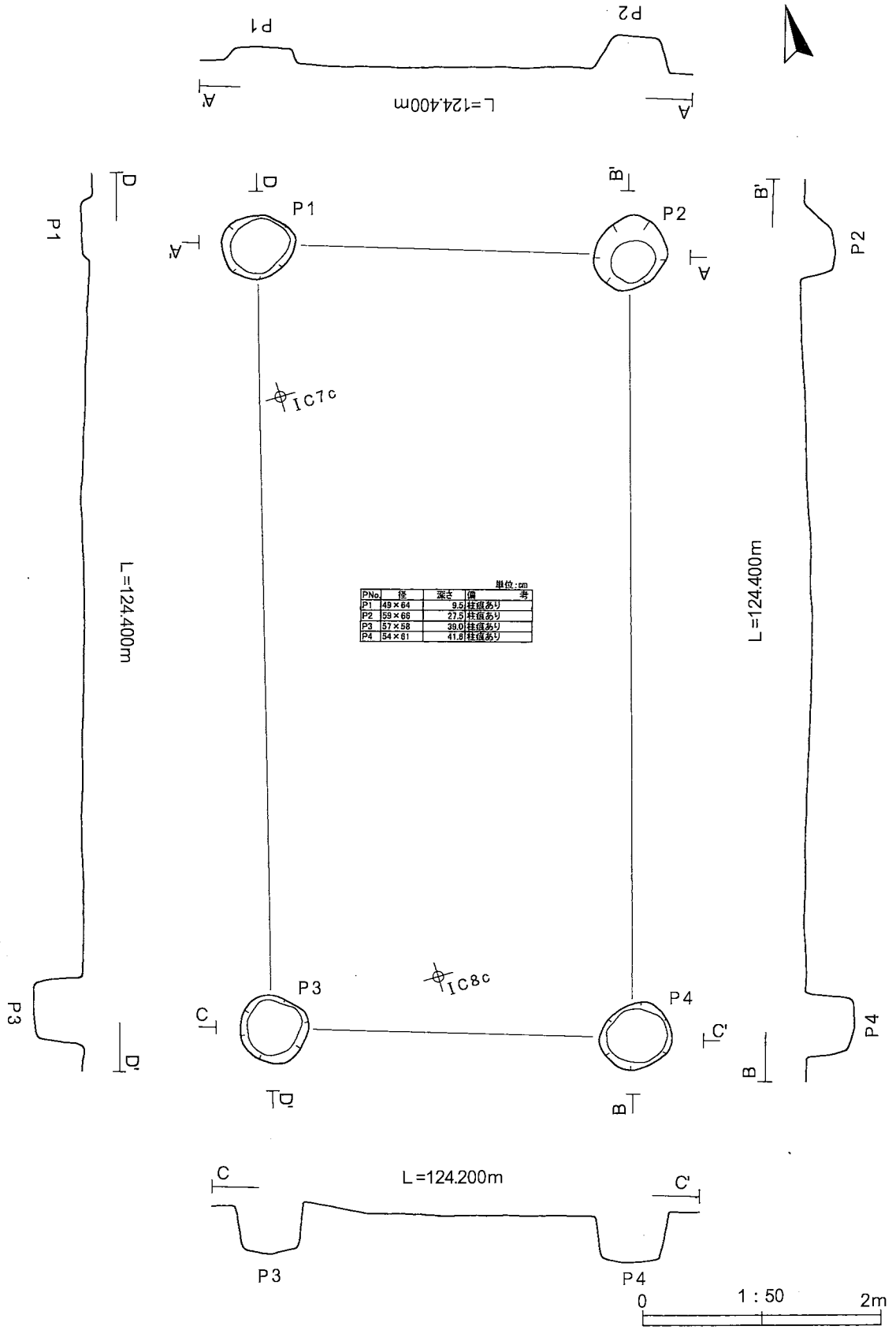
＜規模・構造・方向＞　規模は、北(P1—P2)—3.3m（1間)、西(P2—P3)—6.2m（1間)、南(P3—P4)—3.1m（1間)、東(P4—P1)—6.3m（1間）の方形を呈する。東西の両辺は2間と推定されるがP2—P3間とP11－P4から対応する柱穴は検出されなかった。建物の軸方向はN—15°—Eである。

＜堀方・埋土＞柱穴の堀方は円形を呈し、深さは10～40cmを測る。埋土は、暗褐色土に褐色土がブロック状に含まれており、柱痕も検出された。

遺物

＜出土状況＞　柱穴P4の埋土中から肥前産磁器片（3）が出土している。

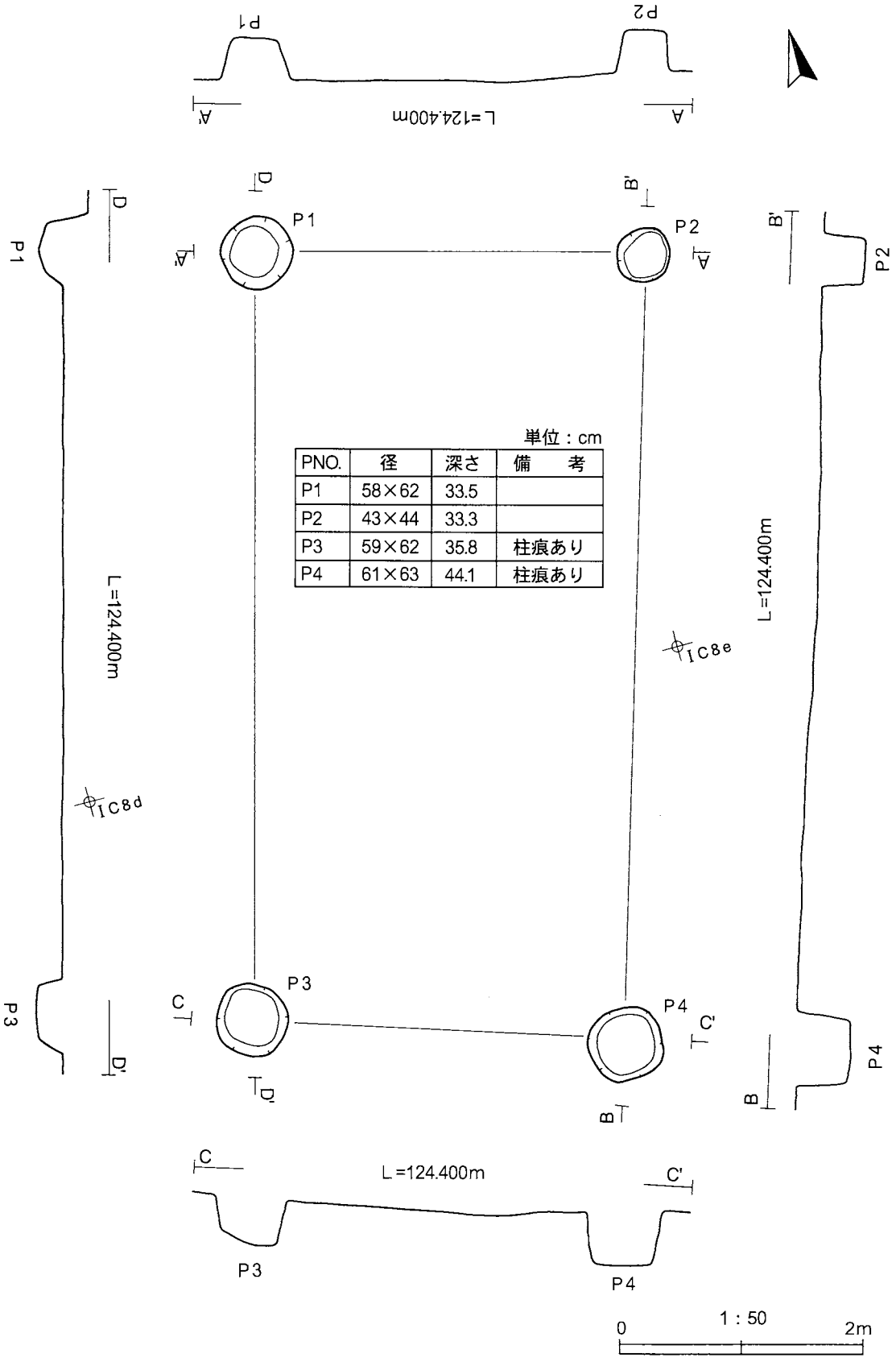
時期　17世紀と考えられる。



単位：cm

PNo.	径	深さ	備考
P1	49×64	9.5	柱痕あり
P2	59×66	27.5	柱痕あり
P3	57×58	39.0	柱痕あり
P4	54×61	41.6	柱痕あり

第20図　1号堀立柱建物跡



単位：cm

PNO.	径	深さ	備　考
P1	58×62	33.5	
P2	43×44	33.3	
P3	59×62	35.8	柱痕あり
P4	61×63	44.1	柱痕あり

第21図　２号堀立柱建物跡

(2) 土坑

土坑は11基を登録した。

1号土坑

遺構（第22図　写真図版6）

＜位置＞　調査区ⅡC3aグリッド、標高124.1mに位置する。

＜規模・形態＞　規模は、開口部143×170cm、深さ38cmを測る。不整な楕円形を呈する。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。

2号土坑

遺構（第22図　写真図版6）

＜位置＞　調査区ⅡC2c～ⅡC2dグリッド、標高124.3mに位置する。

＜規模・形態＞　開口部102×102cm、深さ15cmを測り、円形を呈する。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。

3号土坑

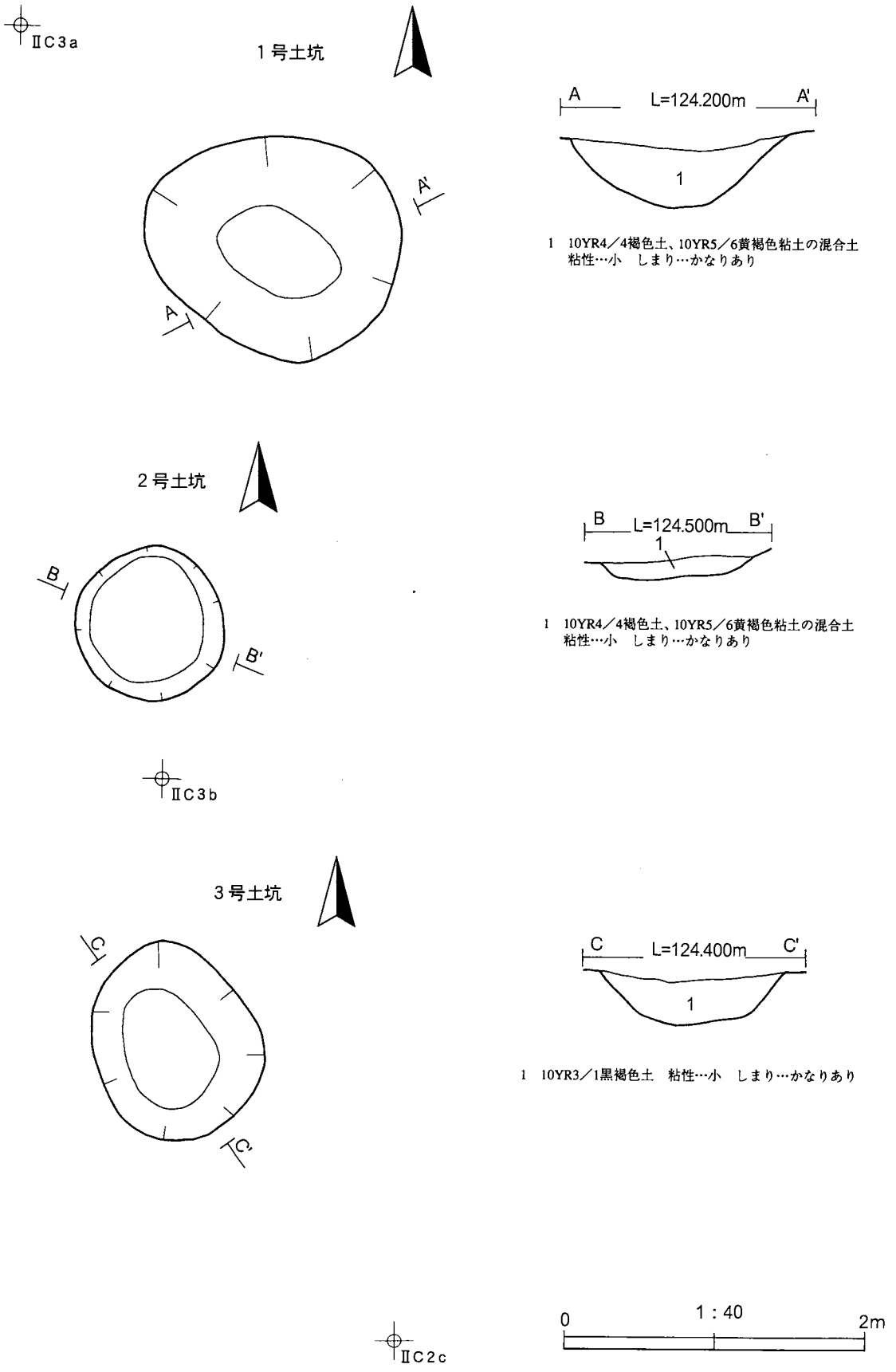
遺構（第22図　写真図版6）

＜位置＞　調査区ⅡC1bグリッド、標高124.3mに位置する。

＜規模・形態＞　規模は、開口部108×134cm、深さ31cmを測る。不整な楕円形を呈する。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。



第22図　1号土坑、2号土坑、3号土坑

4号土坑

遺構（第23図　写真図版７）

＜位置＞　調査区ＩＣ10bグリッド、標高124.0mに位置する。

＜規模・形態＞　規模は、開口部93×131cm、深さ10cmを測り、不整な楕円形を呈する。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。

5号土坑

遺構（第23図　写真図版７）

＜位置＞　調査区ⅢＤ9gグリッド、標高124.2mに位置する。

＜規模・形態＞　規模は、開口部91×104cm、深さ21cmを測り、不整な楕円形を呈する。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。

6号土坑

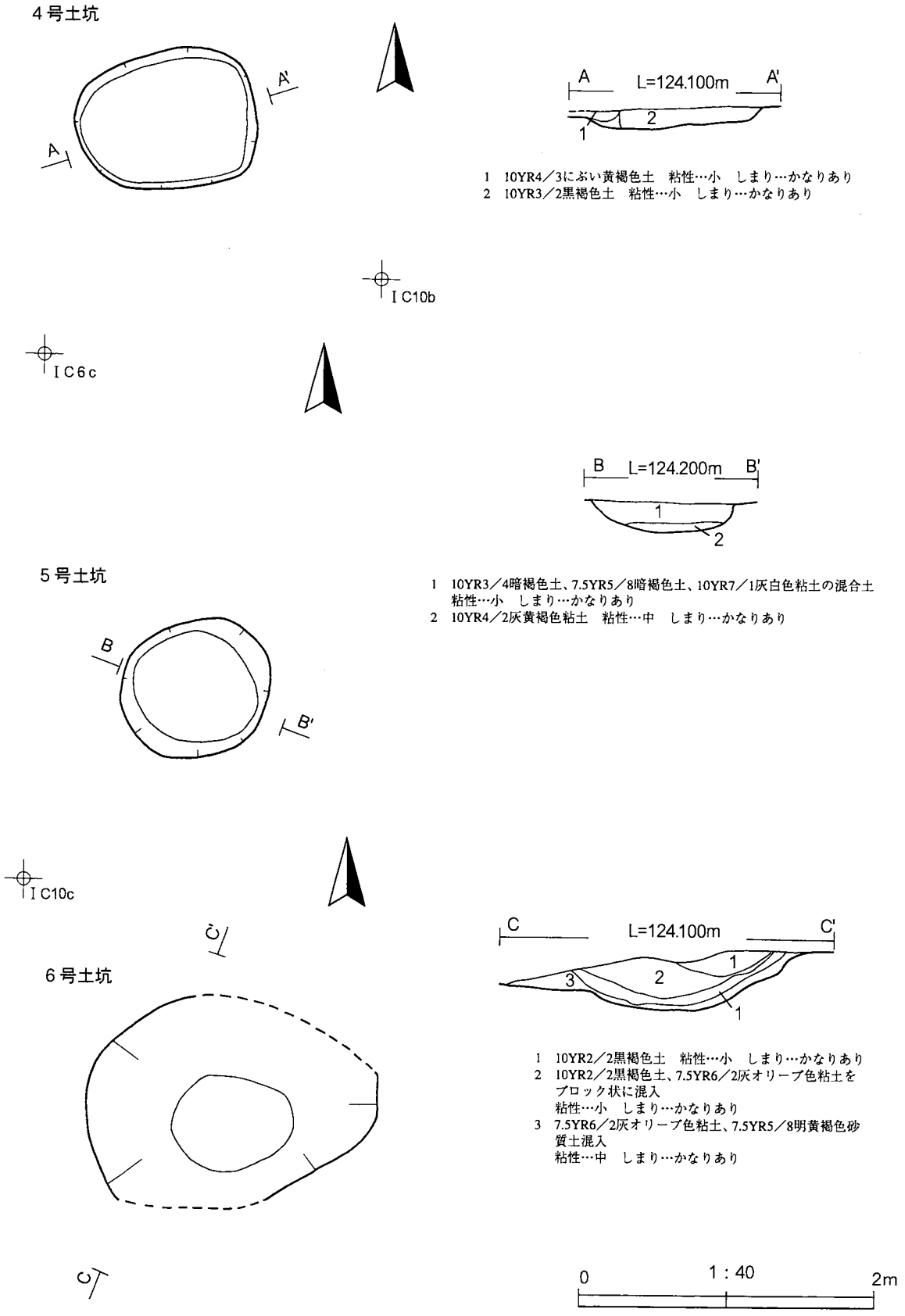
遺構（第23図　写真図版７）

＜位置＞　調査区ⅡＣ1cグリッド、標高124.0mに位置する。

＜規模・形態＞　規模は、開口部146×198cm、深さ35cmを測る。円形を呈する。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。



第23図　４号土坑、５号土坑、６号土坑

7号土坑

遺構（第24図　写真図版7）

＜位置＞　調査区ⅡC1cグリッド、標高124.2mに位置する。

＜規模・形態＞　規模は、開口部72×90cm、深さ10cmを測り、楕円形を呈する。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。

8号土坑

遺構（第24図　写真図版8）

＜位置＞　調査区ⅡC1dグリッド、標高124.5mに位置する。

＜規模・形態＞　規模は、開口部118×138cm、深さ42cmを測る。楕円形を呈する。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。

9号土坑

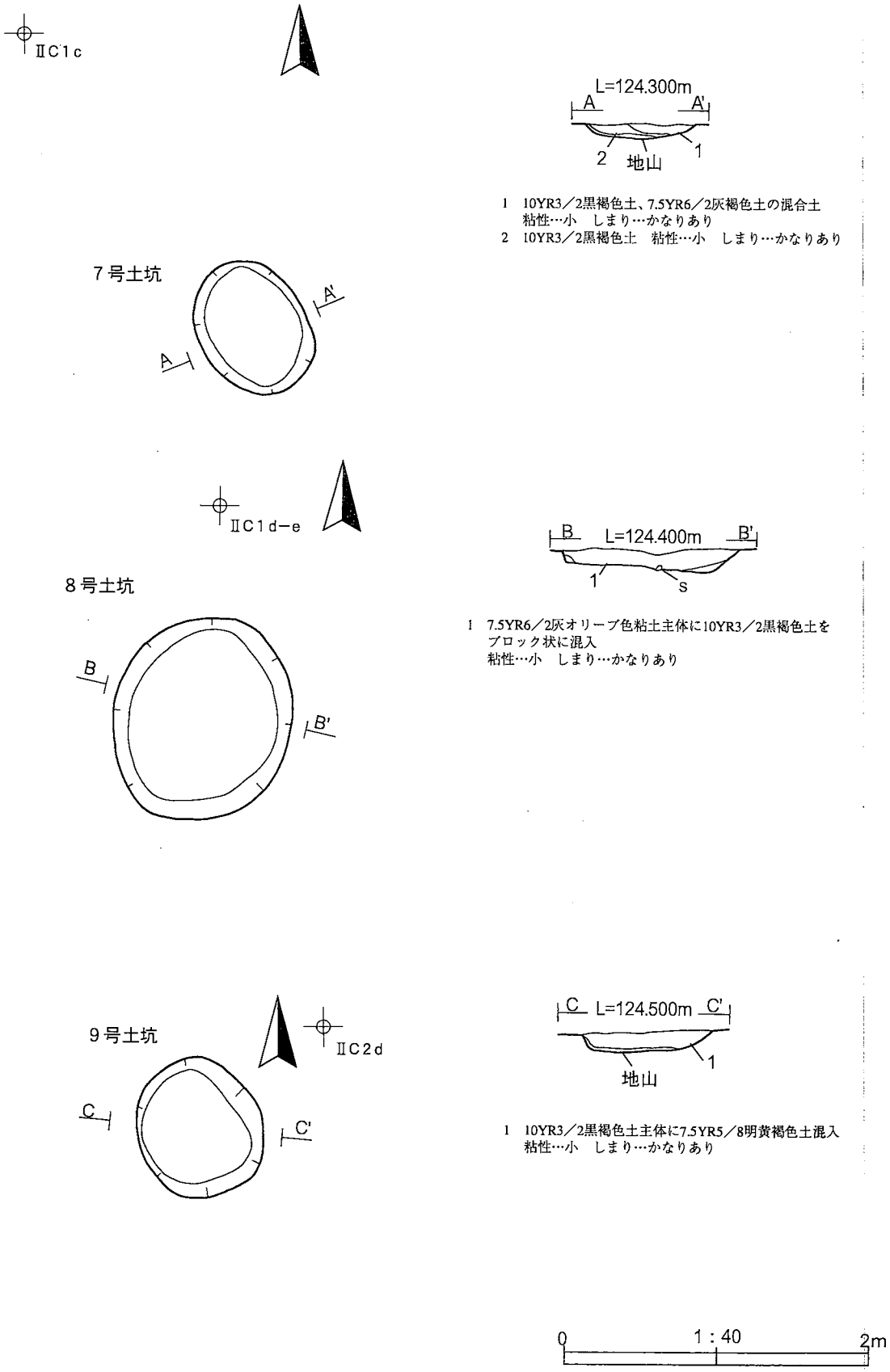
遺構（第24図　写真図版8）

＜位置＞　調査区ⅡC2cグリッド、標高124.6mに位置する。

＜規模・形態＞　規模は、開口部92×96cm、深さ17cmを測り、不整な円形を呈する。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。



第24図　7号土坑、8号土坑、9号土坑

10号土坑

遺構（第25図　写真図版８）

＜位置＞　調査区ＩＣ7d～ＩＣ7eグリッド、標高124.2mに位置する。

＜規模・形態＞　規模は、開口部126×148cm、深さ28cmを測り、不整な円形を呈する。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。

11号土坑

遺構（第25図　写真図版９）

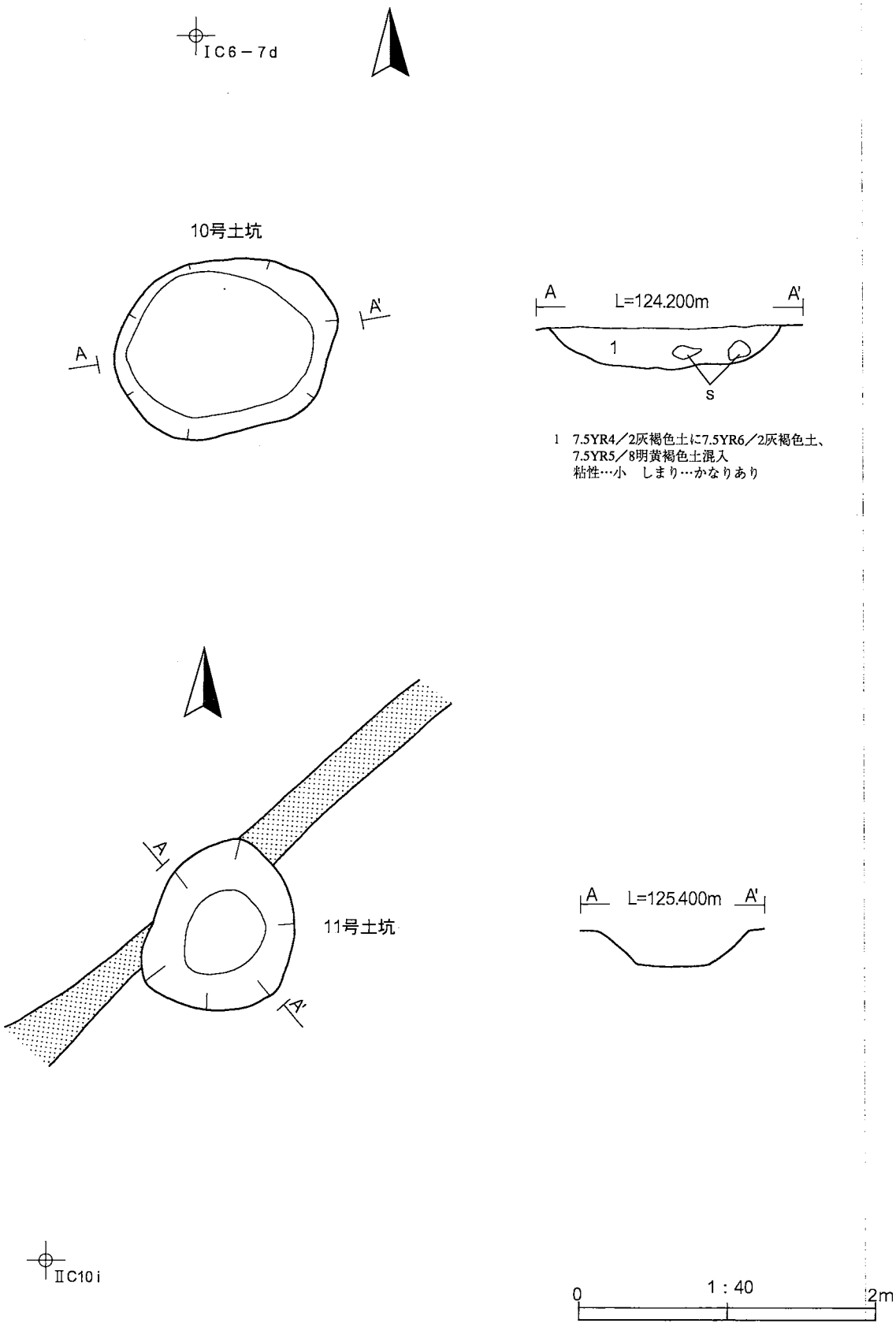
＜位置・重複＞　調査区ⅡＢ9iグリッド、標高125.3mに位置する。６号溝跡と重複する。

＜規模・形態＞　規模は、開口部102×106cm、深さ31.4cmを測り、不整な円形を呈する。

＜埋土＞　埋土は、灰褐色土に明黄灰色を含み粘性は小さくかなりしまっている。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。



第25図　10号土坑、11号土坑

(3) 溝跡

溝跡は７条を登録した。全て排水用のものと考えられるが、詳細は不明である。

１号溝跡

遺構（第26図　写真図版８）

＜位置＞　調査区ＩＣ10a～ＩＣ10dグリッド、標高124.2mに位置する。

＜規模・形態＞　規模は、長さ14.3m、幅34～148cm、深さ20.3～39.5cmを測る。ほぼ東西方向に延びＩＣ10aグリッドで２号堀跡につながる。排水用の溝と考えられるが詳細は不明である。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。

２号溝跡

遺構（第26図　写真図版９）

＜位置＞　調査区ⅡＣ2a～ⅡＣ2dグリッド、標高124.5mに位置する。３号溝跡と平行する。

＜規模・形態＞　規模は、長さ10.8m、幅19～34cm、深さ１～10cmを測る。ほぼ東西方向に延び、ⅡＣ2aグリッドで２号堀跡につながる。排水用の溝と考えられるが詳細は不明である。

遺物　土器片（32）が出土している。

時期　時期不明である。

３号溝跡

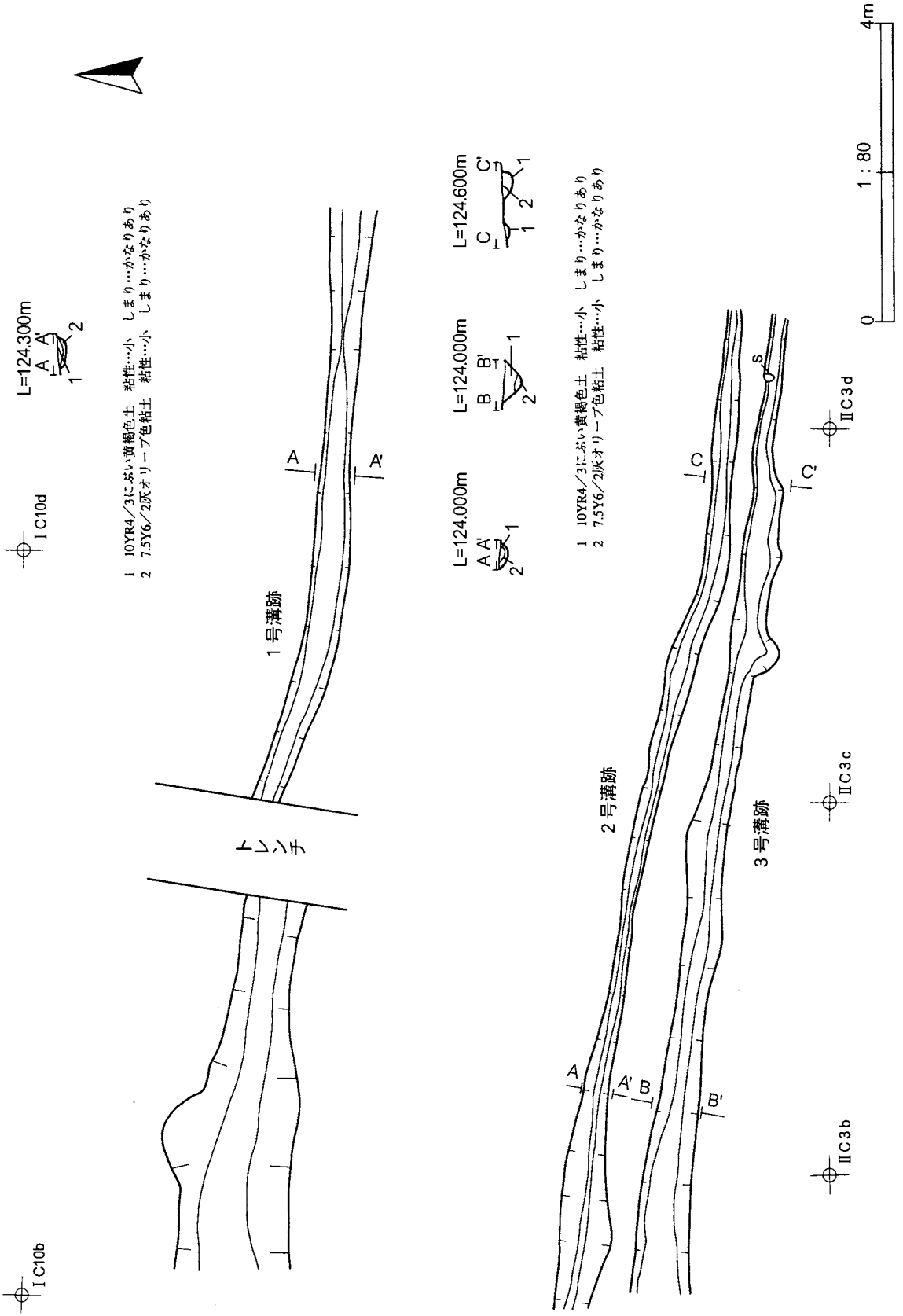
遺構（第26図　写真図版９）

＜位置＞　調査区ⅡＣ2a～ⅡＣ2dグリッド、標高124.5mに位置する。２号溝跡に平行する。

＜規模・形態＞　規模は、長さ10.8m、幅19～56cm、深さ８～19cmを測る。ほぼ東西方向に延び、ⅡＣ2aグリッドで２号堀跡につながる。排水用の溝と考えられるが、詳細は不明である。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。



第26図　１号溝跡、２号溝跡、３号溝跡

4号溝跡

遺構（第27図　写真図版9）

＜位置＞　調査区ⅡB7h～ⅡB7jグリッド、標高123.8mに位置する。5号溝跡に平行する。

＜規模・形態＞　規模は、長さ11.1m、幅28～42cm、深さ4～12cmを測る。ほぼ東西に延びるが、ⅡB8jグリッドで消失している。5号溝跡とともにⅡB7hグリッドで2号堀跡につながる。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。

5号溝跡

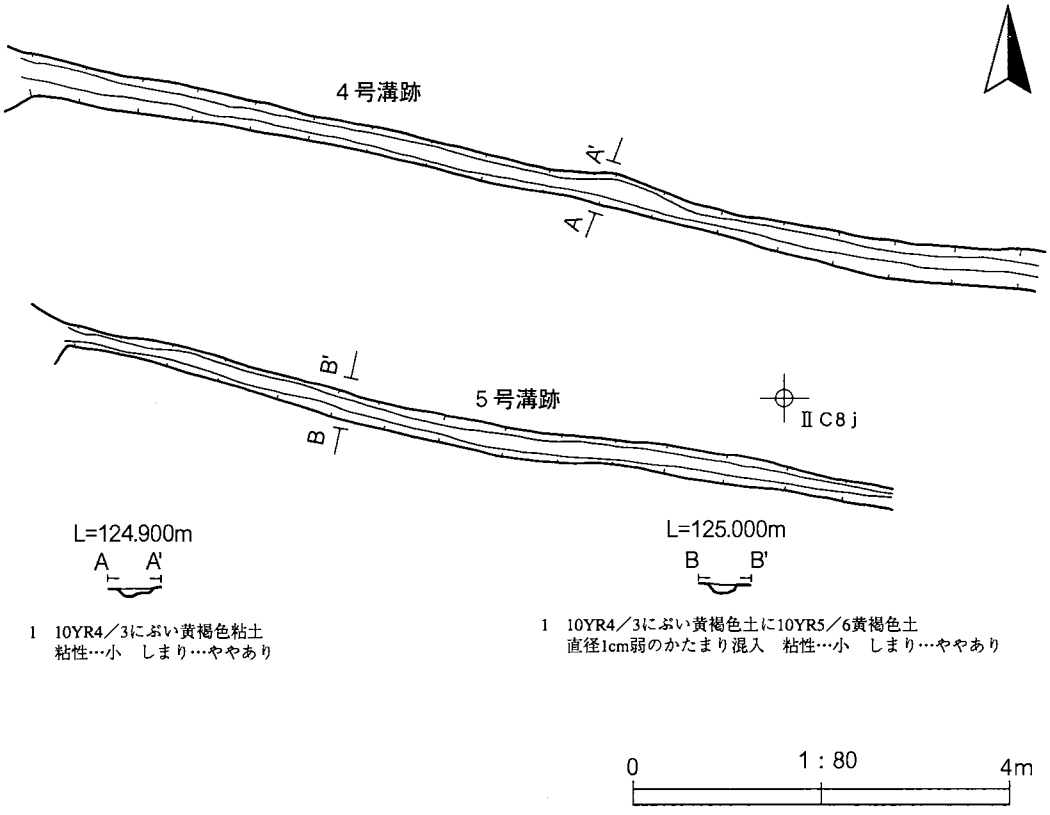
遺構（第27図　写真図版9）

＜位置＞　調査区ⅡB7h～ⅡB8jグリッド、標高123.8mに位置する。4号溝跡に平行する。

＜規模・形態＞　検出された長さは9m、幅18～32cm、深さ6～11cmを測る。ほぼ東西方向に延びるが、ⅡB8jグリッドで4号溝跡とともに消失している。排水用と考えられるが、詳細は不明である。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。



第27図　4号溝跡、5号溝跡

6号溝跡

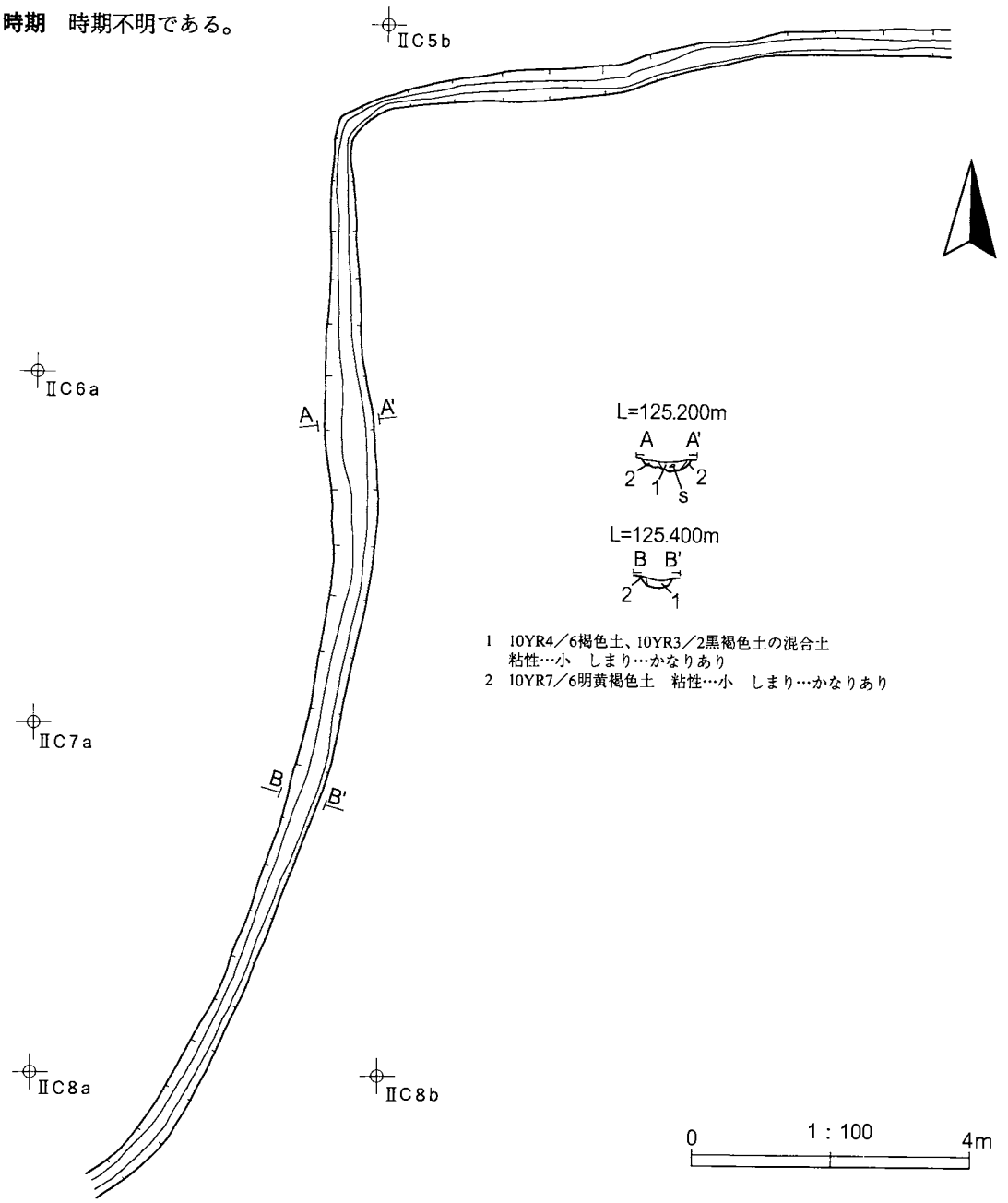
遺構（第28・29図　写真図版9）

＜位置＞　調査区ⅡB9h～ⅡC5cグリッド、標高123.9～125.1mに位置する。

＜規模・形態＞　規模は、長さ37.7m、幅20～60cm、深さ8.2～11.8cmを測る。Ⅱの郭にある微高地の下場に沿って構築され、ⅡB9hグリッド付近で2号堀跡につながる。また、ⅡB9hグリッドで7号溝跡が合流する。排水用と考えられるが詳細は不明である。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。



第28図　6号溝跡（1）

7号溝跡

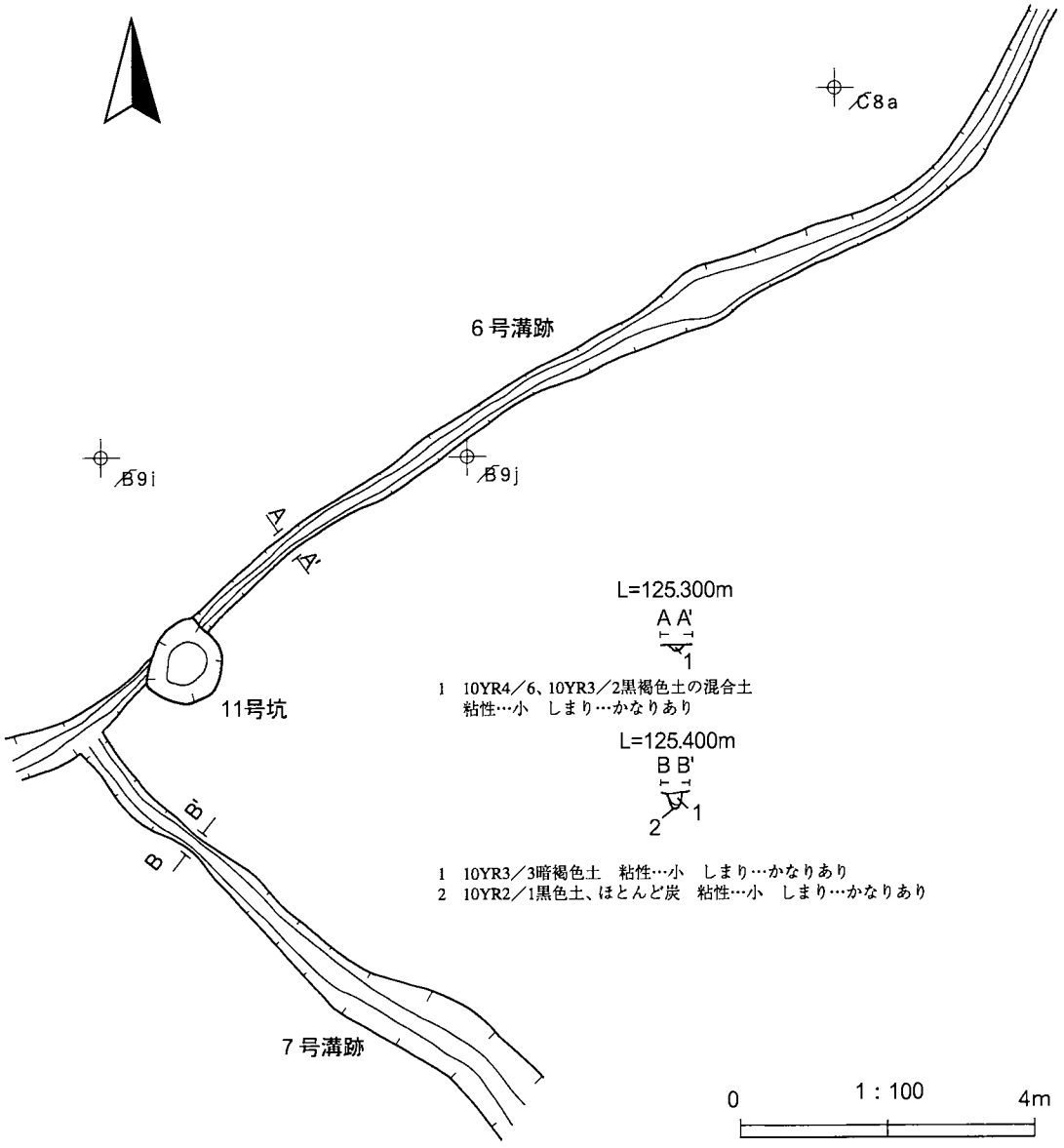
遺構（第29図　写真図版10）

＜位置＞調査区ⅡB9h～ⅡB10iグリッド、標高125.4mに位置する。

＜規模・形態＞　規模は、長さは7.9m、幅28～93cm、深さ24.4～27.3cmを測る。ⅡB9hグリッド付近で6号溝跡につながる。検出当初も水が流れており、排水用のものと考えられる。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期不明である。



第29図　6号溝跡（2）・7号溝跡

(4) 柱穴群

規則的な配置を成さない柱穴状の小土坑88基を柱穴群として登録した。

柱穴群

遺構（第30図　写真図版10）

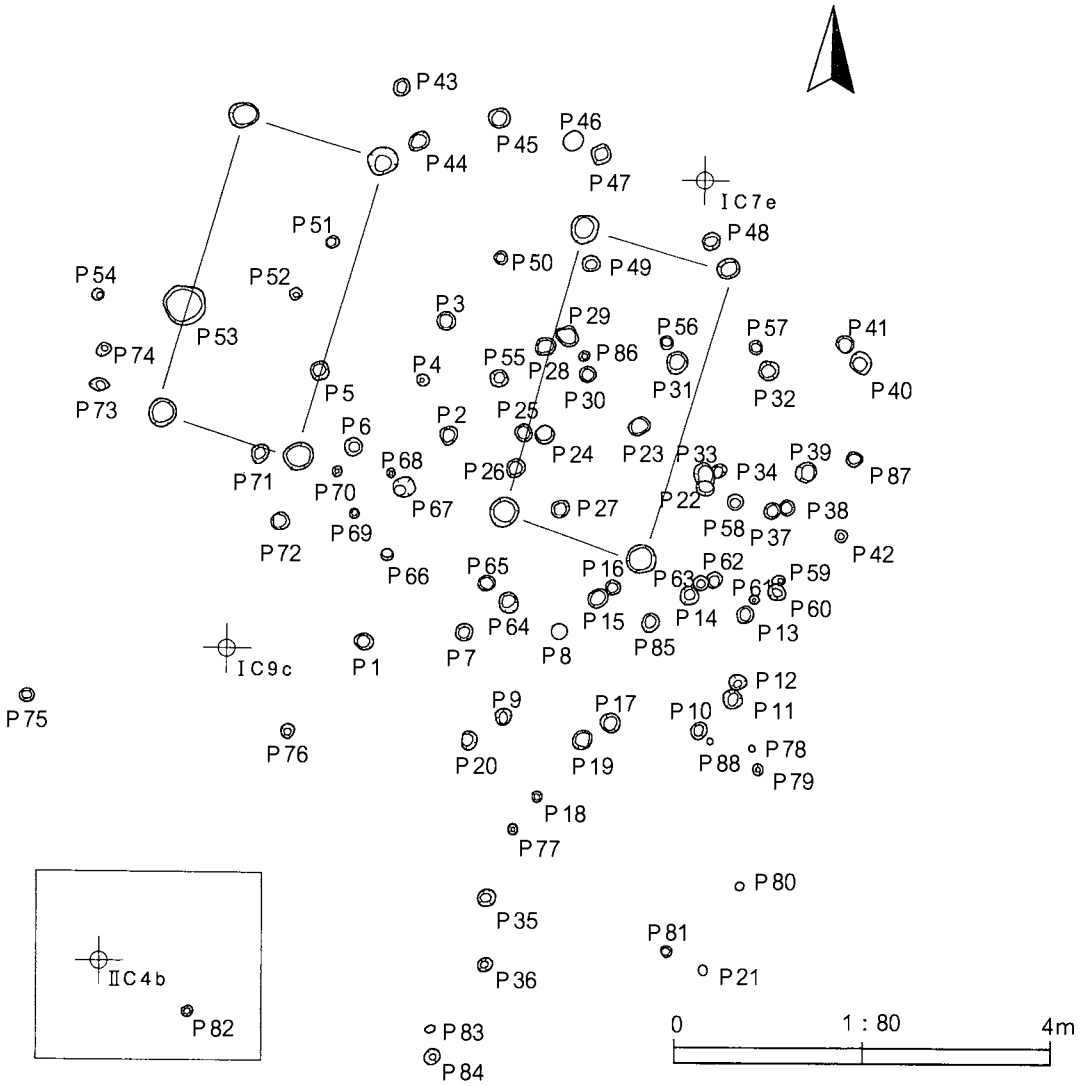
＜位置＞　調査区ＩＣグリッド、標高124.0mに位置する。１、２号掘立柱建物跡の周辺で検出された。

＜形態＞　規則的な配置をなすものはなく、柱穴列や建物跡を推定することはできなかった。

＜埋土＞　暗褐色土を主体とするが、これに褐色土がブロック状に含まれるものもあった。多くは、周辺で検出された掘立柱建物跡柱穴の埋土と類似している。

遺物　出土遺物はない。

時期　詳細は不明である。柱痕が確認された柱穴は、掘立柱建物跡と同時期の可能性も考えられる。



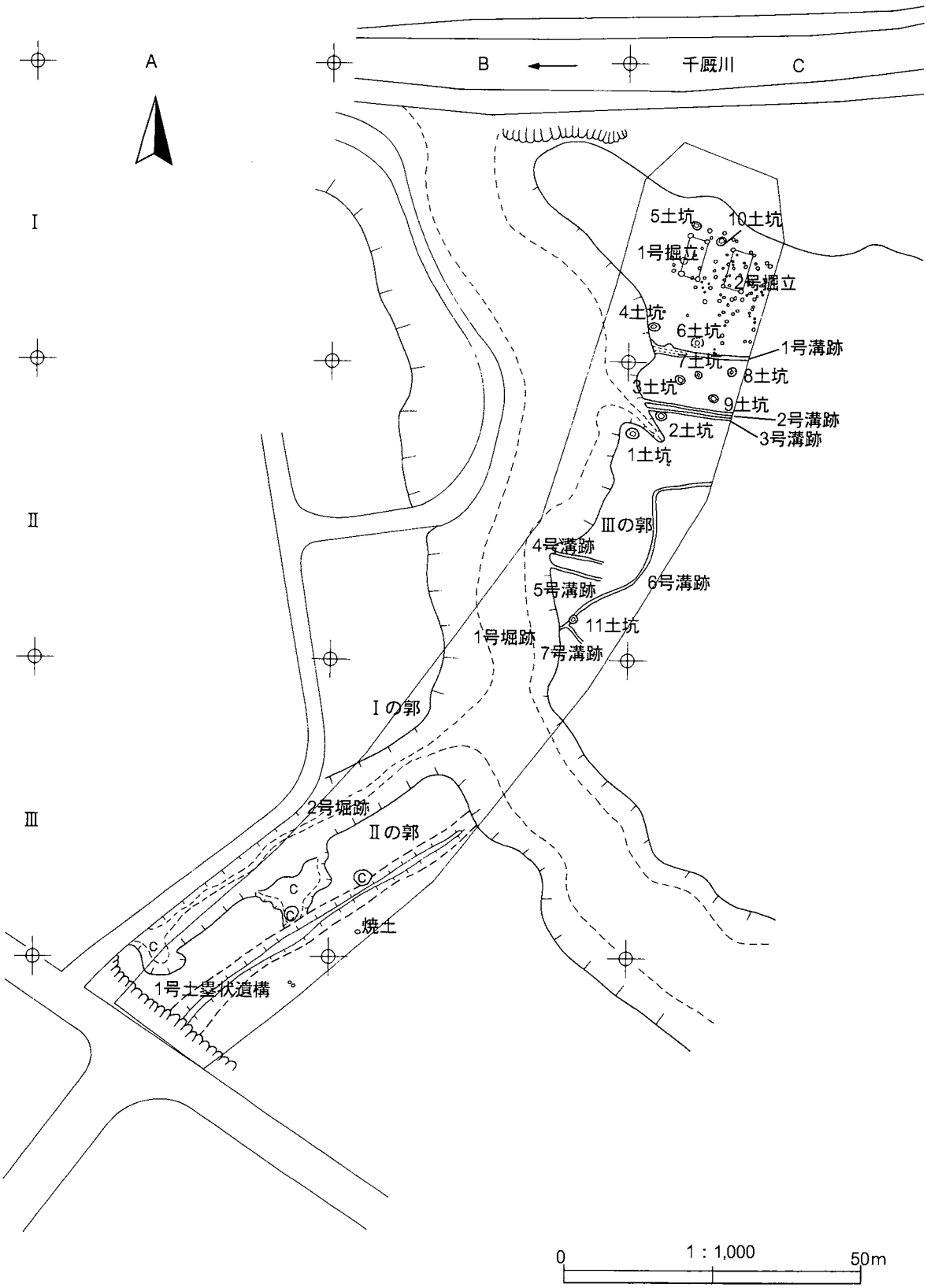
第30図　Ⅲの郭柱穴群

第４表　Ⅲの郭柱穴計測表　　単位：cm

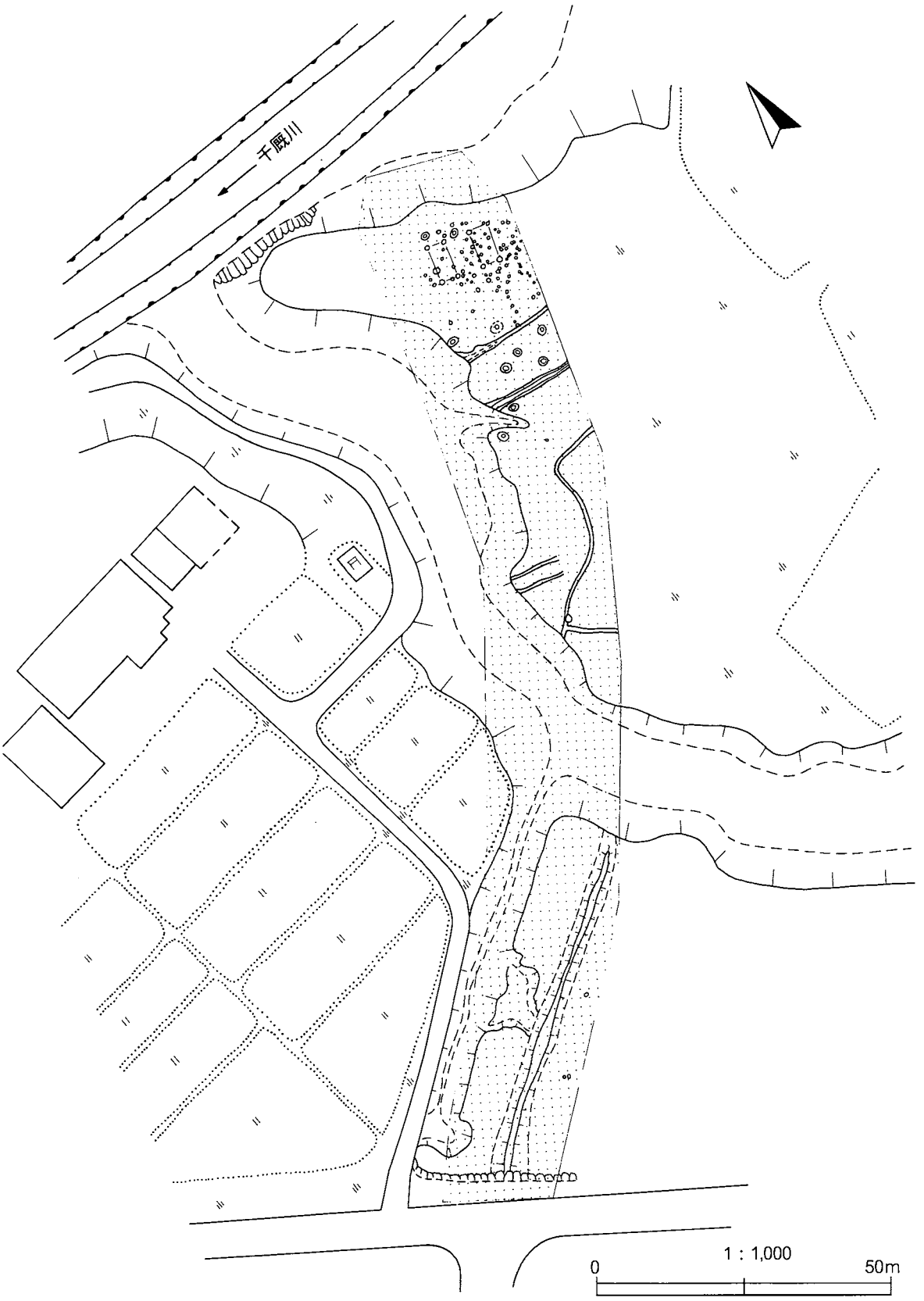
P No.	径	深さ	備　　考
1	38×41	13.7	柱痕あり
2	33×37	18.6	柱痕あり
3	37×37	5.0	柱痕あり
4	25×29	11.5	柱痕あり
5	38×42	6.5	柱痕あり
6	36×39	30.5	柱痕あり
7	36×39	9.7	柱痕あり
8	32×34	21.9	
9	32×39	10.9	柱痕あり
10	33×36	5.2	
11	43×44	13.7	
12	36×(31)	17.4	
13	32×35	17.0	柱痕あり
14	36×37	14.3	柱痕あり
15	39×49	12.4	柱痕あり
16	26×29	11.3	
17	40×43	13.4	柱痕あり
18	21×21	11.8	
19	36×38	12.6	柱痕あり
20	31×37	18.6	柱痕あり
21	19×20	4.8	
22	25×36	9.8	柱痕あり
23	30×34	17.5	
24	36×36	2.2	
25	31×33	8.0	
26	35×37	10.9	柱痕あり
27	32×38	8.8	柱痕あり
28	32×38	4.5	
29	38×49	2.2	
30	31×33	36.1	柱痕あり
31	38×49	21.0	
32	38×39	21.5	
33	(39)×41	16.5	柱痕あり
34	24×25	6.2	
35	33×34	15.2	
36	26×27	14.7	
37	35×36	13.7	柱痕あり
38	28×31	11.7	
39	41×46	7.4	柱痕あり
40	43×46	40.4	柱痕あり
41	32×39	23.9	
42	26×27	12.7	
43	36×36	14.0	
44	47×45	3.5	

単位：cm

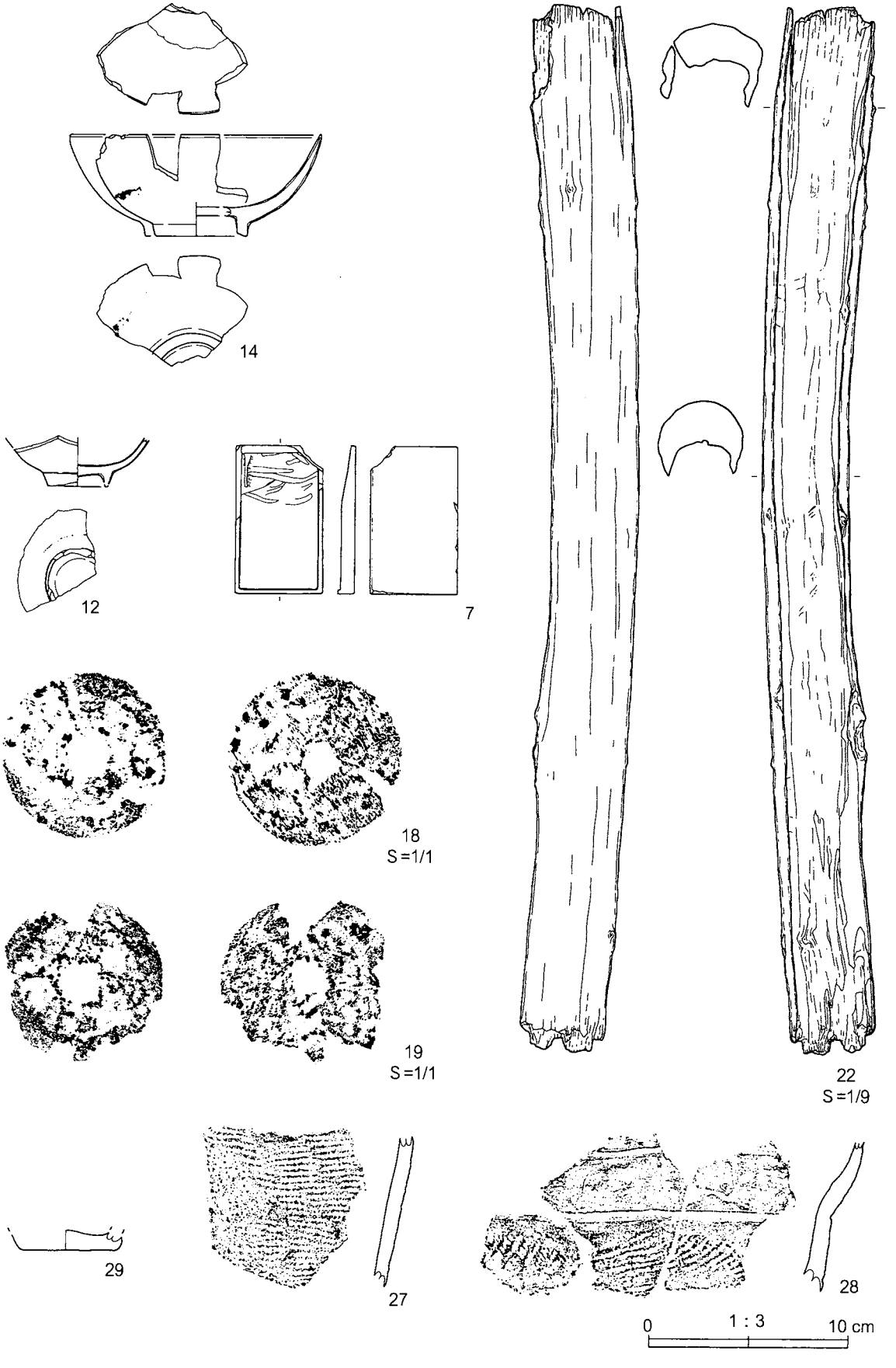
P No.	径	深さ	備　　考
45	40×43	8.4	
46	38×41	4.8	
47	43×44	12.0	
48	33×41	24.5	
49	24×34	15.5	
50	22×28	—	
51	24×25	—	
52	25×27	13.1	
53	87×89	8.5	
54	24×35	34.3	
55	36×38	20.9	
56	24×26	6.5	
57	30×31	18.9	
58	31×36	5.4	
59	21×26	12.2	
60	30×39	16.0	
61	17×18	15.2	
62	33×34	5.3	
63	26×28	11.0	
64	39×44	18.9	
65	30×36	14.6	
66	26×28	9.5	
67	44×46	29.5	
68	18×18	4.5	
69	18×20	8.8	
70	16×20	5.1	
71	39×42	15.2	
72	34×39	10.8	
73	26×45	12.8	
74	26×32	35.1	
75	27×33	3.3	
76	25×28	14.0	
77	18×19	9.3	
78	13×15	12.6	
79	21×22	19.1	
80	17×18	13.7	
81	26×26	15.5	
82	23×24	11.7	
83	14×19	15.8	
84	32×35	8.5	
85	40×32	10.9	
86	22×20	7.7	
87	30×28	6.5	
88	36×34	5.2	


A
B
千厩川
C
I
II
III
5土坑
10土坑
1号掘立
2号掘立
4土坑
6土坑
1号溝跡
7土坑
8土坑
3土坑
9土坑
2号溝跡
2土坑
3号溝跡
1土坑
IIIの郭
4号溝跡
5号溝跡
6号溝跡
11土坑
1号堀跡
7号溝跡
Iの郭
2号堀跡
IIの郭
焼土
1号土壇状遺構
0
1：1,000
50m

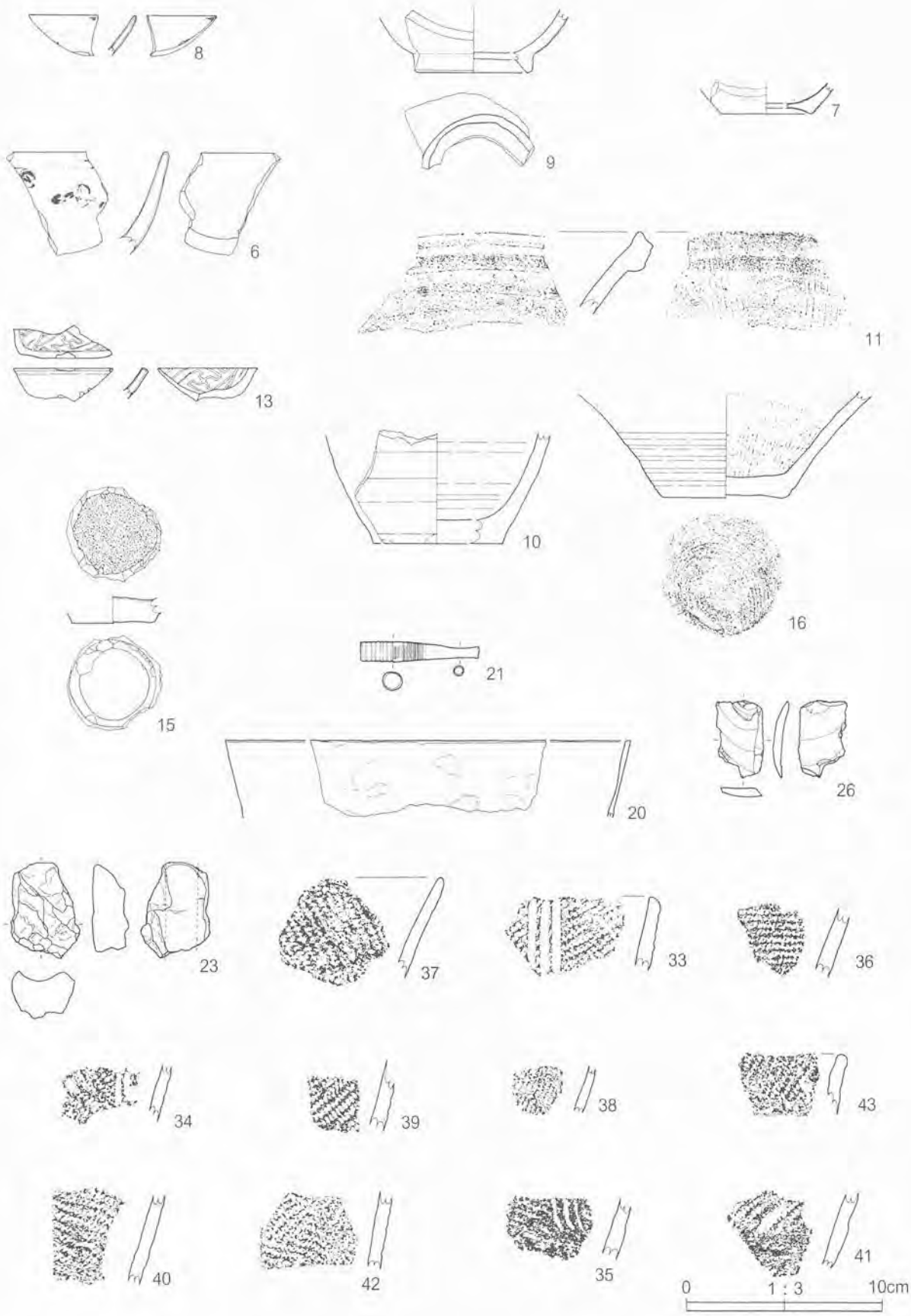
第31図　遺構配置図



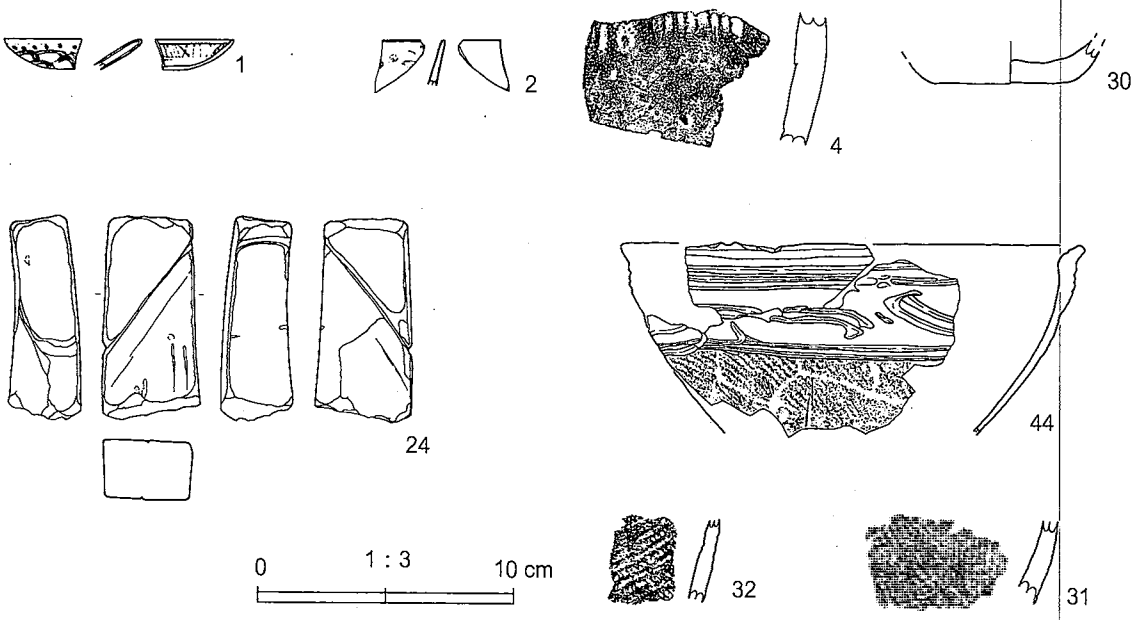
第32図　調査区位置図



第33図　1・2号堀跡、Ⅰの郭出土遺物



第34図　Ⅱの郭出土遺物



第35図　Ⅲの郭出土遺物

第５表　陶磁器観察表

遺物No.	出土地点	グリッド	器種	釉　調	胎　土	産　地	部　位	年　代	備　　考
1	Ⅲの郭	ⅠC 6d	Ⅲ	灰白色	灰白色	中国産	口縁部	16C前半	
2	Ⅲの郭	ⅠC 6b	Ⅲ	明緑灰色	灰白色	肥前産	口縁	1690～1780	
3	2号掘立	ⅠC 8d	Ⅲ	明緑灰色	灰白色	肥前産	体部	1690～1780	P4埋土中
4	Ⅲの郭	ⅠC10c	甕	灰オリーブ色	黄灰色	常滑産	体部	12～13C	外面平行条線文
5	Ⅱの郭	ⅣA 1h	碗	黄褐色	にぶい赤褐色	唐津産	体部	1690～1780	刷毛目
6	Ⅱの郭	ⅣA 1h	碗	オリーブ灰色	黒褐色	肥前産	口縁～体部	17C	
7	Ⅱの郭	ⅢB 6d	鉢		灰白色	不明	底部	19C	
8	Ⅱの郭	ⅢB 7b	Ⅲ	オリーブ灰色	にぶい黄橙色	肥前産	口縁部	1690～1780	
9	Ⅱの郭	ⅢA10h	瓶	明緑灰色	灰白色	肥前産	底部	1610～1630	内面無施釉、畳付砂敷
10	Ⅱの郭	ⅢA10h	鉢	極暗赤褐	黒褐色	不明	口縁～体部	19C	内外面サビ釉
11	Ⅱの郭	ⅢB10d	擂鉢	黒褐色	灰褐色	不明	口縁～体部	19C	外面サビ釉
12	2号堀跡	ⅢB 1e	碗	灰白色	灰白色	肥前産	底部	19C	
13	Ⅱの郭	ⅢB 8c	角Ⅲ	明緑灰色	灰白色	肥前産？	口縁部	19C	内面押し型
14	2号堀跡	ⅢB 5h	碗	明緑灰色	灰白色	肥前産	底～口縁部	1780～1860	見込蛇目釉剥ぎ、内外面貫入
15	Ⅱの郭	ⅢB 8d	天目茶碗	－	灰白色	瀬戸美濃産	高台部	16C前半	内面鉄釉
16	Ⅱの郭	ⅢB 9a	擂鉢	暗褐色	にぶい黄橙色	不明	底～体部	19C	内外面鉄釉
17	Ⅱの郭	ⅢA10f	Ⅲ？	灰白色	灰白色	肥前産	体部	19C	

第６表　銭貨観察表

遺物No.	出土地点	グリッド	銭名	初鋳中年代	備　考
18	1号堀跡	ⅢC2d	―	―	
19	1号堀跡	ⅢC2d	―	―	

第７表　金属製品観察表

遺物No.	出土地点	グリッド	器種	素　材	備　考
20	Ⅱの郭	ⅢB9a	鍋？	鉄	
21	Ⅱの郭	ⅥA1i	煙管	銅	

第８表　木製品観察表

遺物No.	出土地点	グリッド	器種	材　質	備　考
22	2号堀跡	ⅢB4b	樋	クリ	

第９表　羽口観察表

遺物No.	出土地点	グリッド	備　　考
23	Ⅱの郭	ⅢA10h	

第10表　石器・石製品観察表

遺物No.	出土地点	グリッド	器種	石質	備　考
24	Ⅲの郭	ⅡC 2c	砥石	凝灰岩	奥羽山脈
25	Ⅱの郭	ⅢB 5e	硯	安山岩	奥羽山脈
26	Ⅱの郭	ⅢB 8a	剥片	頁岩	奥羽山脈

第11表　土器観察表

遺物No.	出土地点	グリッド	器種	部　位	備　　考
27	1号堀跡	ⅢA 8h	深鉢	胴部	縄文(LR)
28	1号堀跡	ⅢA 8h	深鉢	胴部	胴上：沈線文、胴下：縄文(LR)
29	1号堀跡	ⅢA 8h	鉢	底部	胎土：金雲母含む
30	Ⅲの郭	ⅠC10c	深鉢	底部	胎土：金雲母含む
31	Ⅲの郭	ⅡC 4c	深鉢	胴部	縄文(LR)
32	2号溝跡	ⅡC 2c	深鉢	胴部	縄文(RL)
33	Ⅱの郭	ⅢB 6d	深鉢	胴部	沈線文（縦）＋縄文(RL)　　8と同一個体？
34	Ⅱの郭	ⅢB 6d	深鉢	胴部	沈線文（縦）＋縄文(RL)　　7と同一個体？
35	Ⅱの郭	ⅢB 6d	深鉢	胴部	沈線文？
36	Ⅱの郭	ⅢB 6d	深鉢	胴部	縄文(LR)
37	Ⅱの郭	ⅢB 6d	深鉢	胴部	縄文(LR)
38	Ⅱの郭	ⅢB 6d	深鉢	胴部	縄文(LR)
39	Ⅱの郭	ⅢB 7c	深鉢	胴部	縄文(RL)
40	Ⅱの郭	ⅢB 7c	深鉢	胴部	縄文(LR)
41	Ⅱの郭	ⅢB 7c	深鉢	胴部	縄文(LR)
42	Ⅱの郭	ⅢB 8a	深鉢	胴部	縄文(LR)
43	Ⅱの郭	ⅢB 8a	深鉢	口縁部	縄文(LR)
44	Ⅲの郭	ⅡC 2c	鉢	口縁～胴部	口縁：沈線＋縄文(LR)、胴：縄文(LR)：大洞C2式

V．まとめ

本調査では調査区が館跡の一部を縦断するものであることや出土遺物が少ないことから中世を中心とした遺物から館跡の性格について言及し、これをまとめとしたい。

1．縄張りについて

船丸館跡は、検出された遺物や空中写真（写真図版３）からＩの郭を主郭とする平郭式的な館跡であることが明らかとなった。１号堀跡や２号堀跡に関連する土橋や橋脚跡等は検出されなかった。

また、その中心時期は検出された瀬戸・美濃系天目茶碗（15）や中国産磁器から16世紀と考えられる。陶磁器類で肥前産磁器が最も多く検出されていることから、館跡一帯が近世に入っても居館等に何らかの形で利用されていたものと考えられ、これは地元の伝承とも一致している。

館の縄張りは、現在では開田や道路建設で土塁や空堀等の殆どが消失しているため推定の域をでないが、館の南側を東に走る自然地形の谷により遮断し、平地と比高差を持った段丘上に館を構え北側を流れる千厩川を天然の水堀としているものと考えられる。

千厩川に沿う段丘崖の比高差は８～10mを測り、郭からは領地と考えられる平野部を一望することができる。平野部と各郭からの比高差はほぼ10m以内に留まることや、対峙する立花城の同比高差が50mを越えていることなどからも館は伝承の通り居館として機能していたと考えられる。

虎口は主郭の北西に現在でも堀状の通路があることからここが大手口と考えられる。また、主郭北東端に天満宮の社がありここに至る通路で土塁が切れていたということから搦手は２号堀に続くこの社への通路と推定される。

縄張は主郭の四方を土塁と堀で囲み、この主郭の南東側にⅡの郭を、北東の千厩川沿いにⅢの郭を配置する構造になっている。遺跡の南側と東側は撹乱により殆ど原型を留めておらず、第36図には推定される遺跡の範囲と主郭周辺の土塁を推定復元した縄張図を示した。

遺跡の南西側には消失した空堀を挟んで遠野市に移転したとされる西来院跡があり、城郭の周辺に寺社を配置する戦国末期から近世初頭の惣構的な縄張の萌芽的要素も見受けられる。

また、館の範囲は遺跡の南側を東西に走る農道と千厩川に挟まれた段丘と推定されるため、Ⅲの郭東側にある上位の平場が館の施設である可能性は大きい。

さらにⅢの郭の一角は現在でも薬師堂という屋号が伝えられており、主郭（Ｉの郭）に現存する天満宮が現存していることや、主郭の南側には「館の屋敷」の字名などが伝えられていることなどが館の性格を規定する要因になると考えられる。

2．船丸館跡の時期について

館主や館の創建時期を特定しうる史料は得られなかったが、12世紀と考えられる常滑産の甕片が出土していることから館の創建時期は中世初期（12～13世紀）まで遡る可能性も考えられる。

この常滑産陶器を含め16世紀までの遺物は、瀬戸・美濃系天目茶碗１片と中国産磁器片１点のみである。出土した遺物の多くは世の国産磁器片であることから、船丸館跡一体が近世まで利用されたことが明らかとなった。しかしながら船丸館跡の主郭部分は未調査であるため詳細な検討は主郭の調査に期待したい。

3．遺構について

ここでは中世と考えられる館に係わる主な遺構に考察を加えまとめとした。

(1) 堀跡

堀跡は2条を検出した。1号堀跡は、昭和25年の空中写真から明らかに主郭と考えられるⅠの郭を南側と東側に土塁と共に普請された空堀である。この土塁は昭和31年の開田時に削平され残土は2号堀跡に盛土されていた。高さは、推定で1.8m。2号堀跡は、調査期間中も僅かに水が流れ自然地形をそのまま利用した堀跡と考えられる。2号堀の法面は人為的な普請の跡が窺える。

(2) 土塁状遺構

前項の土塁に比して塁壁高は最大85cmと著しく低い。このため土塁状の遺構として登録した。館の防御とは別の目的のために構築されたものと考えられる。Ⅱの郭には近世まで屋敷があったことが伝えられており、これはこの郭から検出された遺物の時期とも合致しており、近世に構築された可能性が高い。

(3) 掘立柱建物跡

Ⅱの郭から2棟を検出した。規模はいずれも1間（3m）×1間（6m）である。ほぼ並行して検出されたが軸線が僅かにずれており独立した建物跡として登録した。調査では建物の性格を特定する遺物は周辺から検出されていない。時期は遺物から17世紀と考えられるが、詳細は不明である。

(4) 柱穴群

柱穴は、88基を検出したが、この内対応する8基をそれぞれ掘立柱建物跡として登録した。今回の調査ではこれら以外の建物跡を想定することはできなかったが、柱穴群の中には柱痕の確認される柱穴もあり建物跡の可能性が残る。

4．遺物について

今回の調査では遺構外（重機道と撹乱ヶ所）からの出土はなく、ここでは各郭からの出土遺物について簡略に触れまとめとする。

船丸館跡から出土した遺物は、陶磁器類18点、石製品3点、銭貨2点、その他の金属製品2点、木製品1点、羽口片1点と土器片が20点出土した。土器片のほとんどは地紋が磨滅しており正確な個体数の把握は困難であった。

(1) 陶磁器（第33・34・35図　写真図版11・12・13）

主に肥前産の磁器を主体に中世の遺物として常滑産甕片(4)、16世紀前半の瀬戸・美濃系天目茶碗底部片(16)、中国産磁器片(1)、近世の遺物として唐津産陶器片（5）や肥前産磁器片が出土している。

近世の遺物はⅡの郭で主に出土しており、江戸時代に屋敷があったとする伝承と合致する。また、中世の陶磁器はⅡ、Ⅲの両郭からも出土しており、16世紀段階まではⅡの郭、Ⅲの郭ともに機能していたと考えられる。

(2) 銭貨（第33図　写真図版11）

銭貨（鉄銭）は、2号堀の南西側法面埋土上部から出土した。この盛土は、主郭の南東部にあった土塁の埋土である。館の創建時期を決定しうる資料であったが、いずれも腐食が激しく銭名は不明である。

(3) 金属製品（第34図　写真図版13）

鍋片(20)と煙管(21)の2点が出土した。これらもⅡの郭から出土しており、煙管は、国産磁器と同期のものと考えられる。

(4) 石製品・石器（第33・34・35図　写真図版11・12・13）

中世から近世のものとして砥石(24)と硯(25)の2点が出土した。また、剥片(26)がⅡの郭から出土している。

(5) 木製品（第33図　写真図版11）

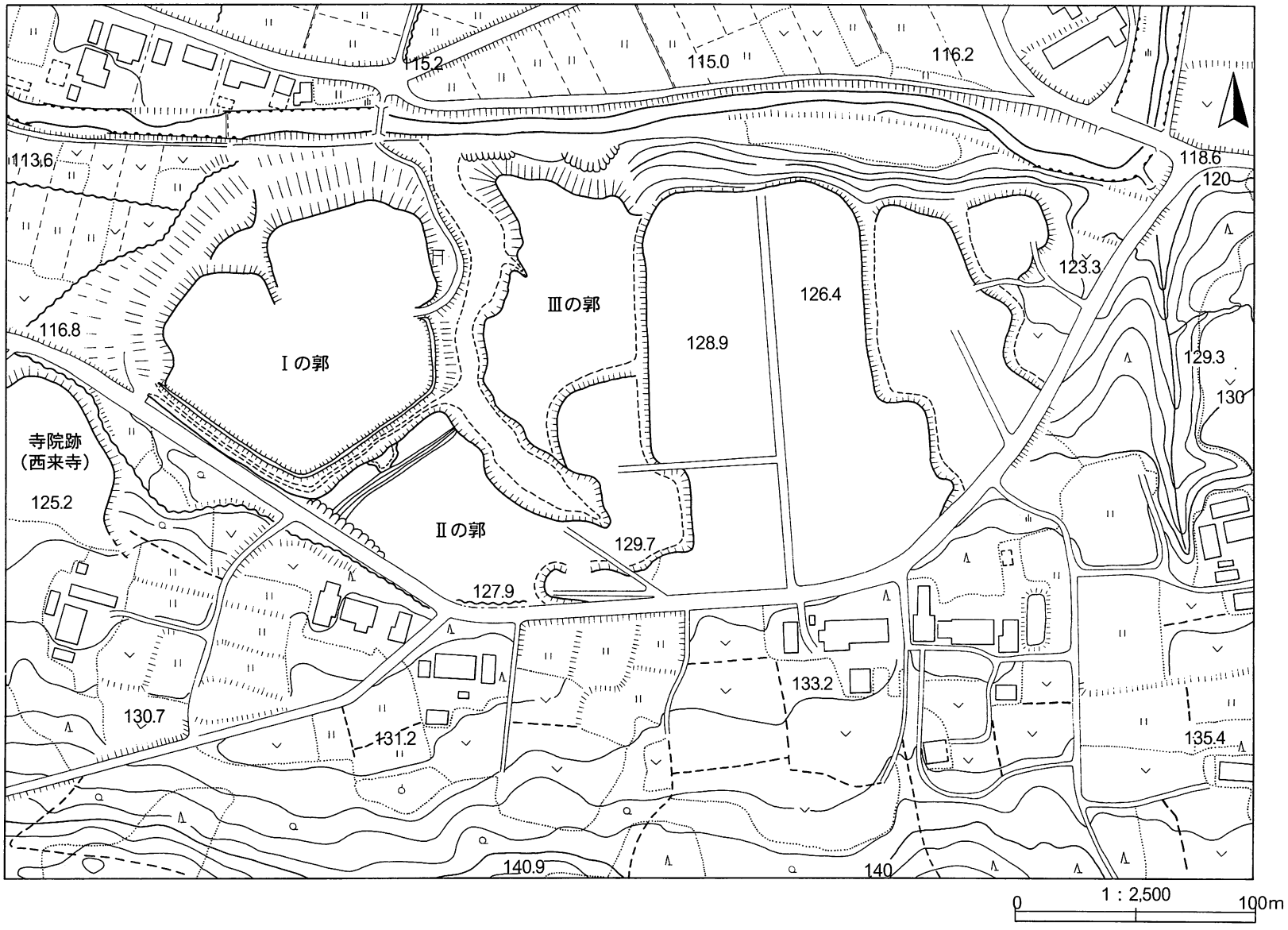
1号堀跡から木樋(22)が1点出土した。検出状況からⅡの郭で使われたものと推定され、時期は近世と考えられる。

(6) 羽口（第34図　写真図版13）

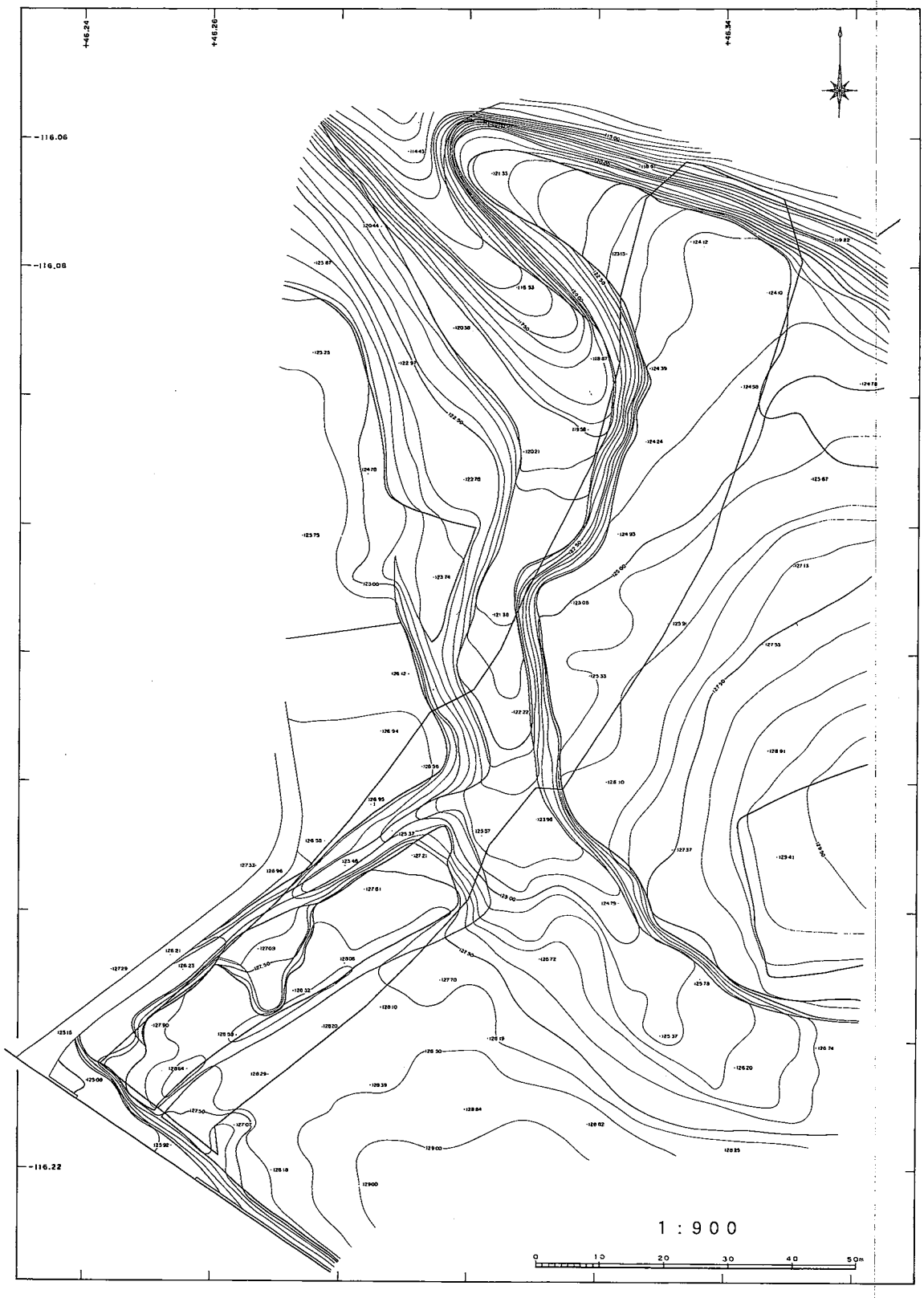
羽口片はⅡの郭から1点が出土した。Ⅰの郭を主郭とするⅡの郭の機能を表す資料と考えられ、Ⅱの郭に工房があった可能性が高い。

(7) 縄文土器（第33・34・35図　写真図版11・12・13）

Ⅱの郭ⅢB8h～ⅢB5dグリッド、Ⅲの郭ⅡC4cグリッド付近から集中して縄文晩期（大洞C2）土器片(35)が出土した。殆どは磨滅した小破片である。これらの区域にはこの時代の遺構があったものと推定されるがこれらは館の普請時に失われたものと考えられる。



第36図　丸船館跡推定縄張図



第37図　船丸館跡現況地形図

＜参考・引用文献＞

(1) 相原康二・小田野哲憲・熊谷常正（1982）：「岩手の土器」岩手県立博物館

(2) 村田修三（1987）：「図説中世城郭辞典一、二」　新人物未来社

(3) 本堂寿一（1980）：「日本城郭大系２」－青森・岩手・秋田－ 新人物未来社

(4) 西ヶ谷恭弘（1994）：「戦国の城　」－上・下・総説編－　学習研究社

(5) 「貿易陶磁研究」No.１－N0.5　貿易陶磁研究会　六一書房

(6) 数野雅彦・佐々木満他（1998）：史跡　武田氏館跡Ⅲ　甲府市文化財調査報告書７　甲府市教育委員会

(7) 数野雅彦・佐々木満他（1999）：史跡　武田氏館跡Ⅳ　甲府市文化財調査報告書８　甲府市教育委員会

(8) 瀬川 司男 他（1980）：東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書　第53集　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(9) 高橋與右衛門他（1988）：笹間館跡発掘調査報告書　文振報第124集　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(10) 斉 藤 博 司 他（1994）：猪川館跡発掘調査報告書　文振報第203集　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(11) 杉沢昭太郎（1997）：白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書　文振報第248集　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(12) 小山内　透 他（1998）：松本館跡発掘調査報告書　文振報第256集　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(13) 酒井宗孝（1997）：田代遺跡発掘調査報告書　文振報第262集　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(14) 村上拓・熊谷佳恵（2000）：芦名沢Ⅱ遺跡掘調査報告書　文振報第322集　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(15) 小笠原　健一郎（2000）：篠館跡発掘調査報告書　文振報第353集　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

Ⅵ. 自然科学分析

船丸館跡出土樹種同定

高　橋　利　彦（木工舎「ゆい」）

1．資　料

資料は１点で、戦国時代末期（16世紀）とされる館の空堀の埋土下層から検出された樋である。資料の所属年代は、共伴する遺物から江戸時代（17世紀）まで降る可能性もあるとされている。

遺跡は千厩川左岸（南側）の河岸段丘上（標高125m）に位置している。

2．方　法

資料は乾燥状態にあったため、切り出した小材片を湯煎し、吸水・軟化させてからプレパラートを作製した。剃刀の刃を用い、資料の木口（横断面）・正目（放射断面）・板目（接線断面）３面の徒手切片を作製し、これをガムクロラールで封入したプレパラートを、生物顕微鏡で観察・同定した。併せて顕微鏡写真図版を作成した（図版１）。作製したプレパラートは木工舎「ゆい」に保管されている。

3．結　果

資料はクリに同定された。資料の主な解剖学的特徴や一般的な性質はつぎのようなものである。なお、一般的な性質などについては「木の事典　第４巻」（平井　1980）も参考にした。

・クリ（Castanea　crenata）ブナ科

環孔材で孔圏部は多列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では楕円形～円形、小道管は単独および２－３個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、管壁はともに薄い。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単（－2）列、１－15細胞高。柔組織は、周囲状、短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、耐久性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、榾木などに用いられる。

4．考　察

クリは、上記のように耐久性に優れた材質をもつことから選択されたものであろう。厚みのある木材とはいえ、一方には（常に）水が流れ、他方は空中に、あるいは土に接触しているという、木材の保存にとっては過酷ともいえる条件下にありながら検出時まで保存されたのもこの材質があってのことといえよう。

樋の出土はかなり希なようで、筆者の知る範囲では、類例の報告は東京都紀尾井町遺跡出土の江戸時代とされる木樋（５点）がツガ属・スギ・ヒノキ属の針葉樹製とされている例（パリノ・サーヴェイ（株）1988）などに限られ、県内はもちろん東北地方でも報告がない[注]（伊東ほか1987、伊東1990）ようである。

注）青森県弘前市弘前城跡から江戸時代の板組樋が、宮城県多賀城市山王遺跡から江戸時代（19世紀）の樋の出土が報告されているようであるが、ともに樹種同定は行われていない（山田1993による）。

＜引用文献＞

平井信二（1980）：「木の事典　第４巻」　かなえ書房

伊東孝夫・山口和穂・林昭三・布谷知夫・島地謙（1987）

：『日本の遺跡から出土した木材の樹種同定とその用途』木材研究・資料,第23号,42－210

伊東孝夫（1990）：『日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ』木材研究・資料,第26号,91－189

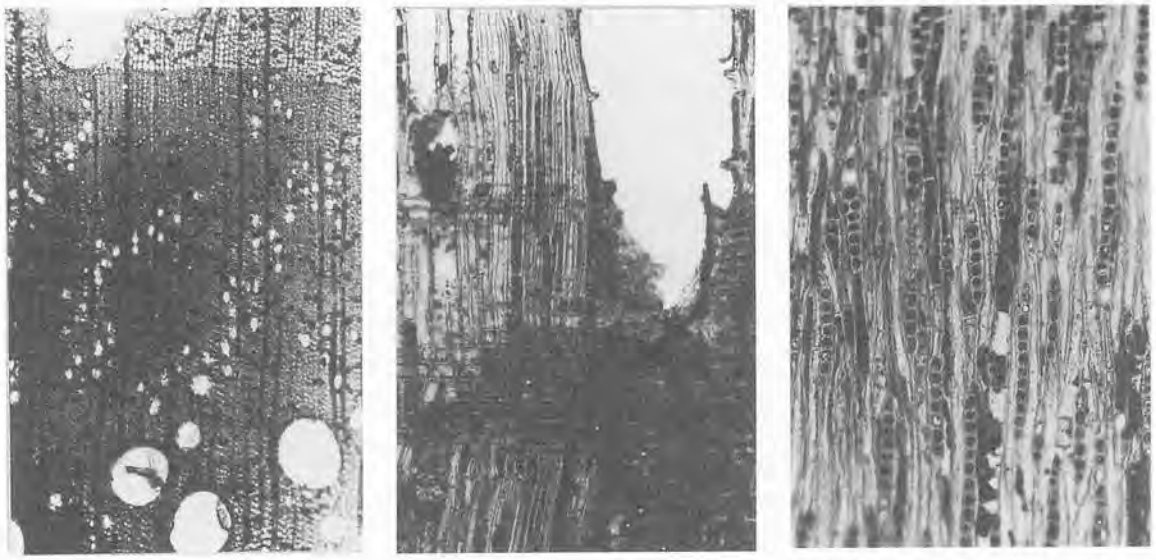
パリノ・サーヴェイ株式会社（1988）：木製品の樹種同定,「東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告書　本文編」

千代田区紀尾井町遺跡調査会，524－534

山田昌久（1993）：『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成―用材からみた人間・植物関係史』

植生史研究，特別第１号，１－242

図版１

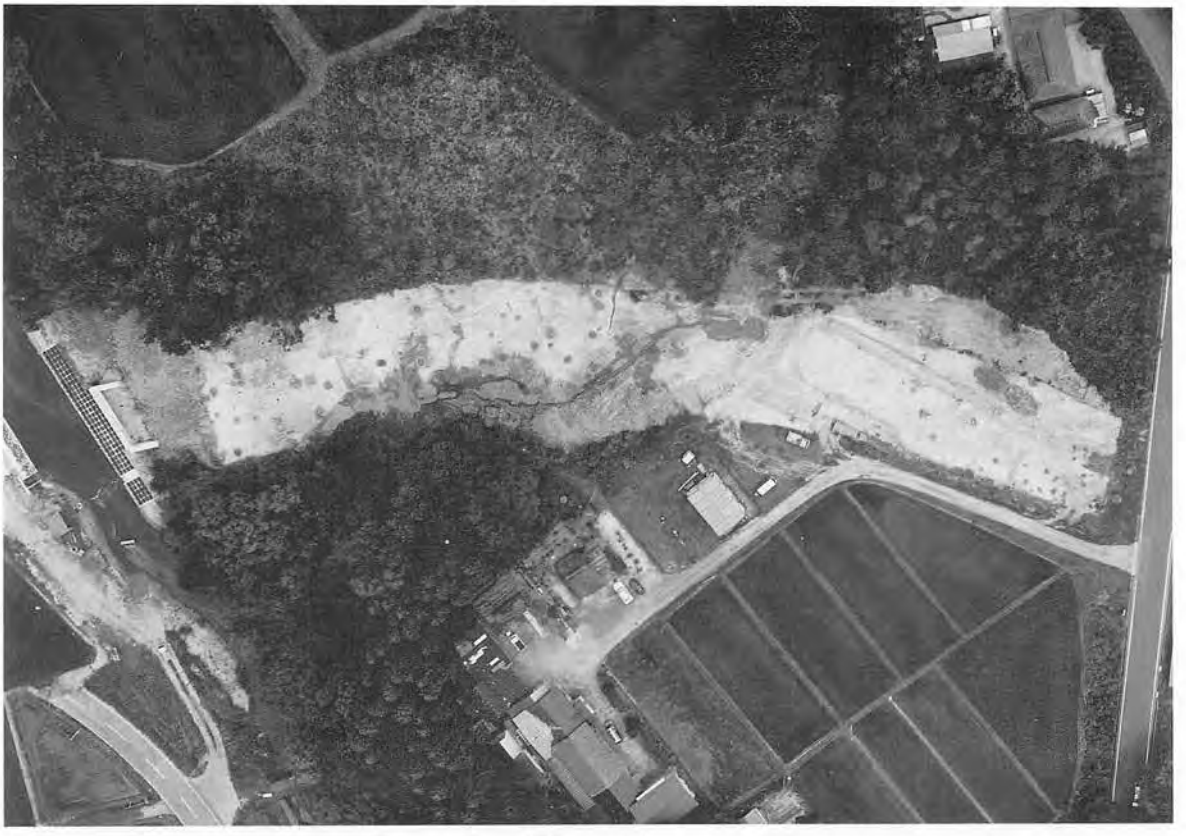


木口　×40　　柾目　×100　　板目　×100

樹木の肥大正当方向は木口では図版下から上へ、正目では左から右

写 真 図 版

写真図版１　空中写真（１）遺跡遠景



（真　　上）

（南から）

写真図版２　空中写真（２）

写真図版３　空中写真（３）　昭和25年頃の遺跡周辺

基本層序（1）

基本層序（2）

1号堀跡　平面

断　　面

2号堀跡　平面

断　　面

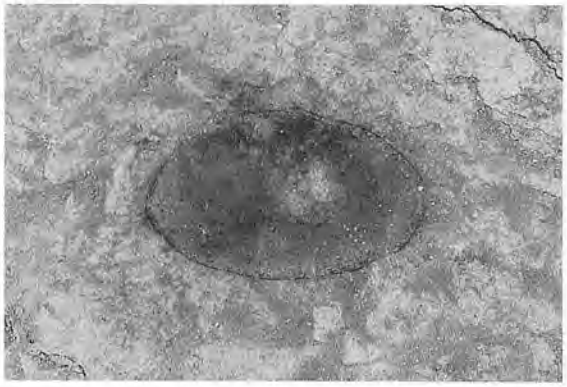
Ⅰの郭　断　　面

写真図版4　基本土層、1・2号堀跡

1号土塁状遺構　平面

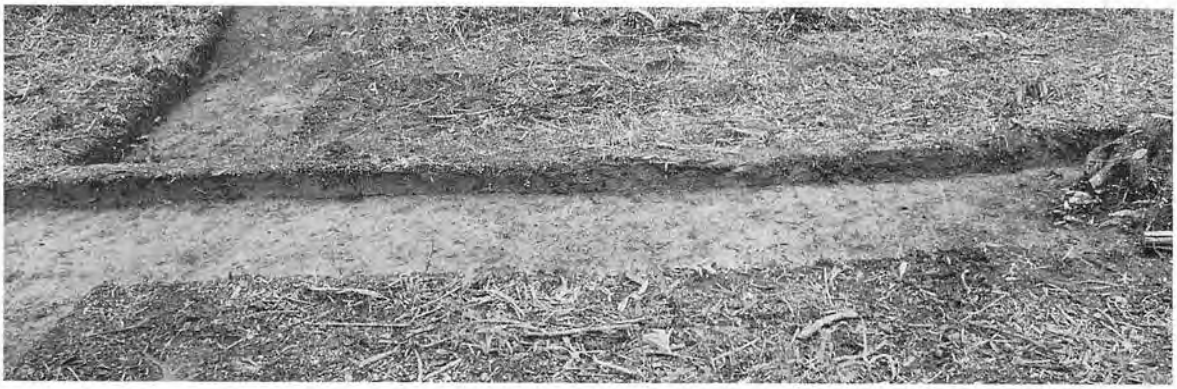
断　　面（1）

断　　面（2）



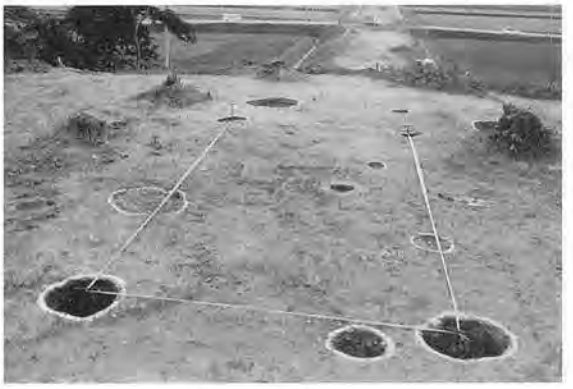
1号焼土遺構　平面

断　　面



Ⅱの郭　断　　面

写真図版５　１号土塁状遺構、１号焼土遺構

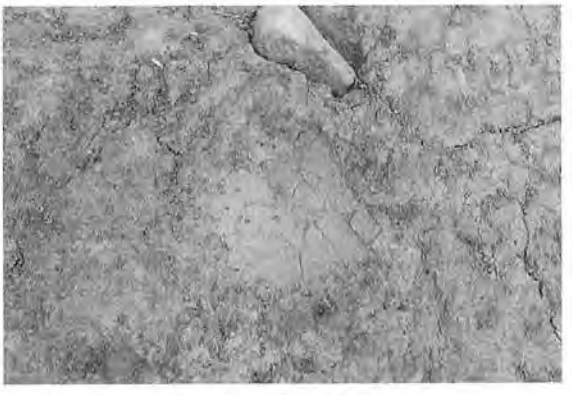


1号掘立柱建物跡　平面

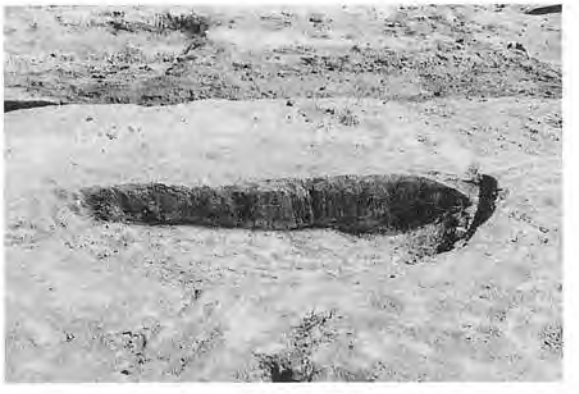
2号掘立柱建物跡　平面

1号土坑　平面

断　　面



2号土坑　平面



断　　面

遺物出土状況（22）

3号土坑　断面

写真図版6　1・2号掘立柱建物跡、1～3号土坑

4号土坑　平面

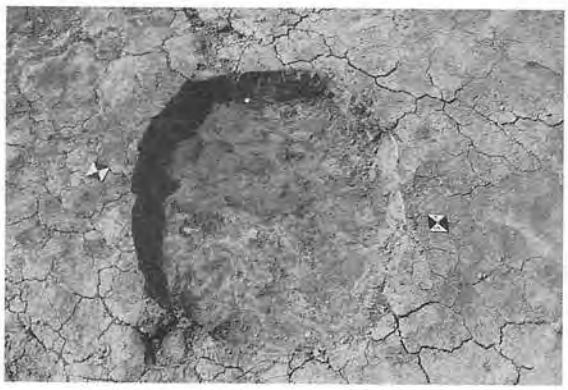
断　　面

5号土坑　平面

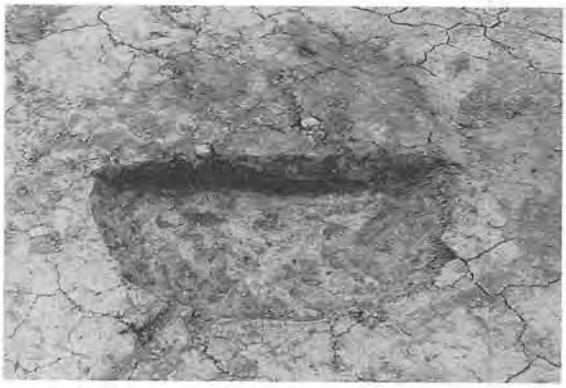
断　　面

6号土坑　平面

断　　面



7号土坑　平面



断　　面

写真図版7　4～7号土坑

8号土坑　平面

断　　面

9号土坑　平面

断　　面

10号土坑　平面

断　　面

1号溝跡　平面

断　　面

写真図版8　8～10号土坑、1号溝跡

2号溝跡、3号溝跡　平面

断　　面

4号溝跡、5号溝跡　平面

4号溝跡　断面

6号溝跡、11号土坑　平面

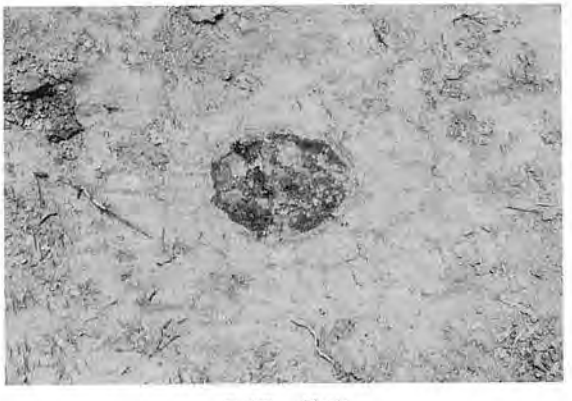
5号溝跡　断面

6号溝跡　断面

写真図版9　2～6号溝跡

7号溝跡　平面

断　　面



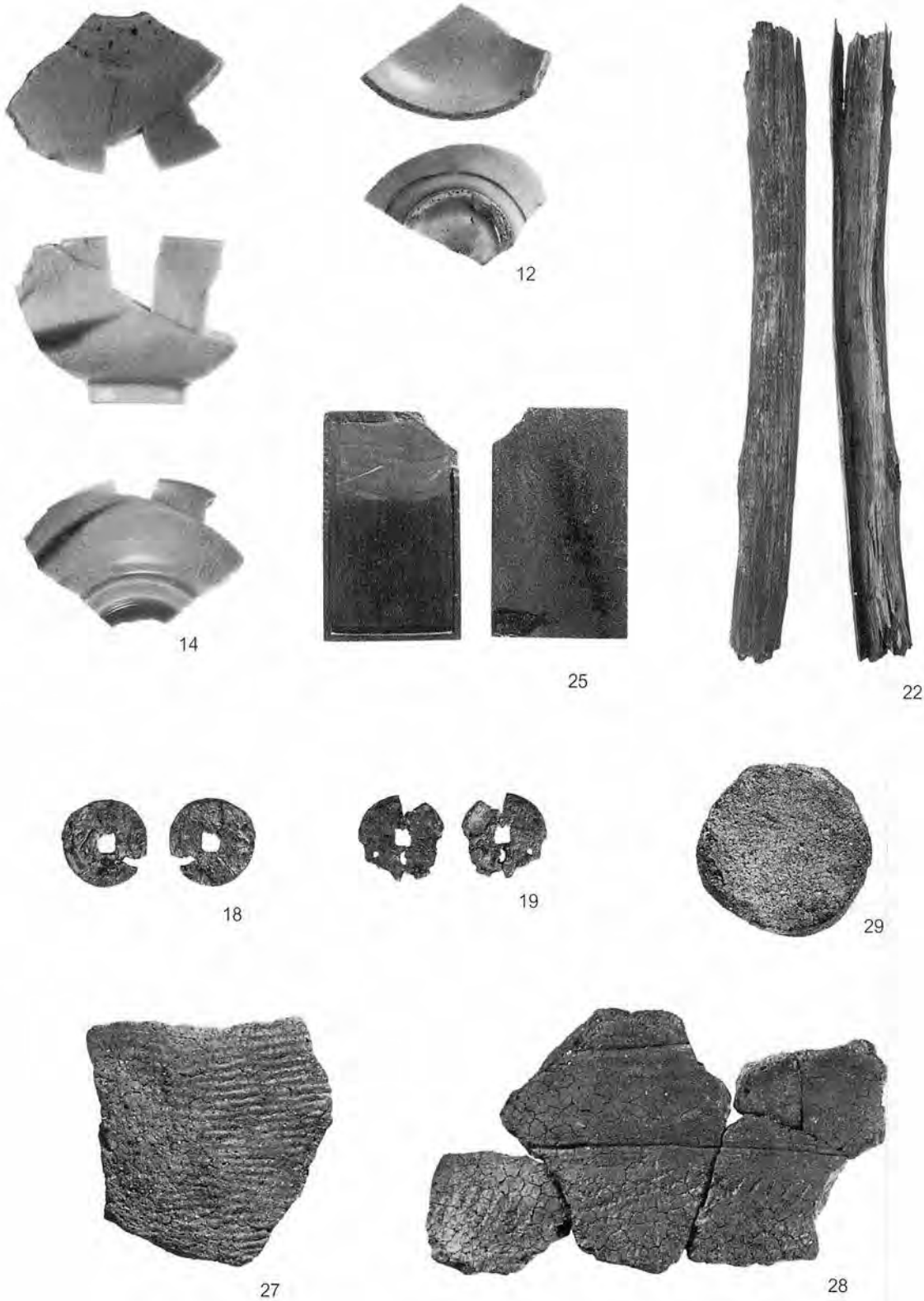
P17　検出

Ⅲの郭　柱穴群

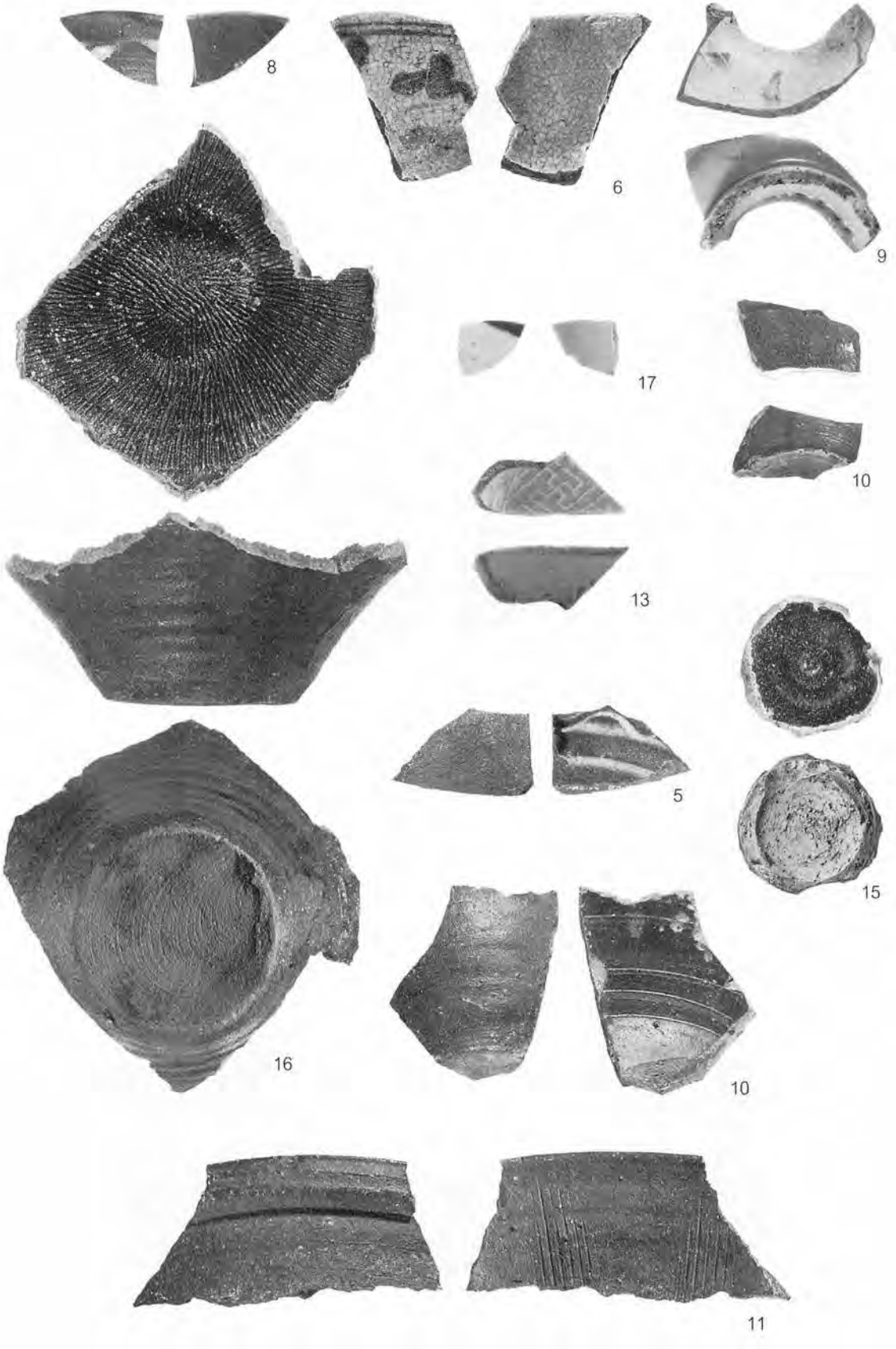
P6　断面

P15・P16　平面

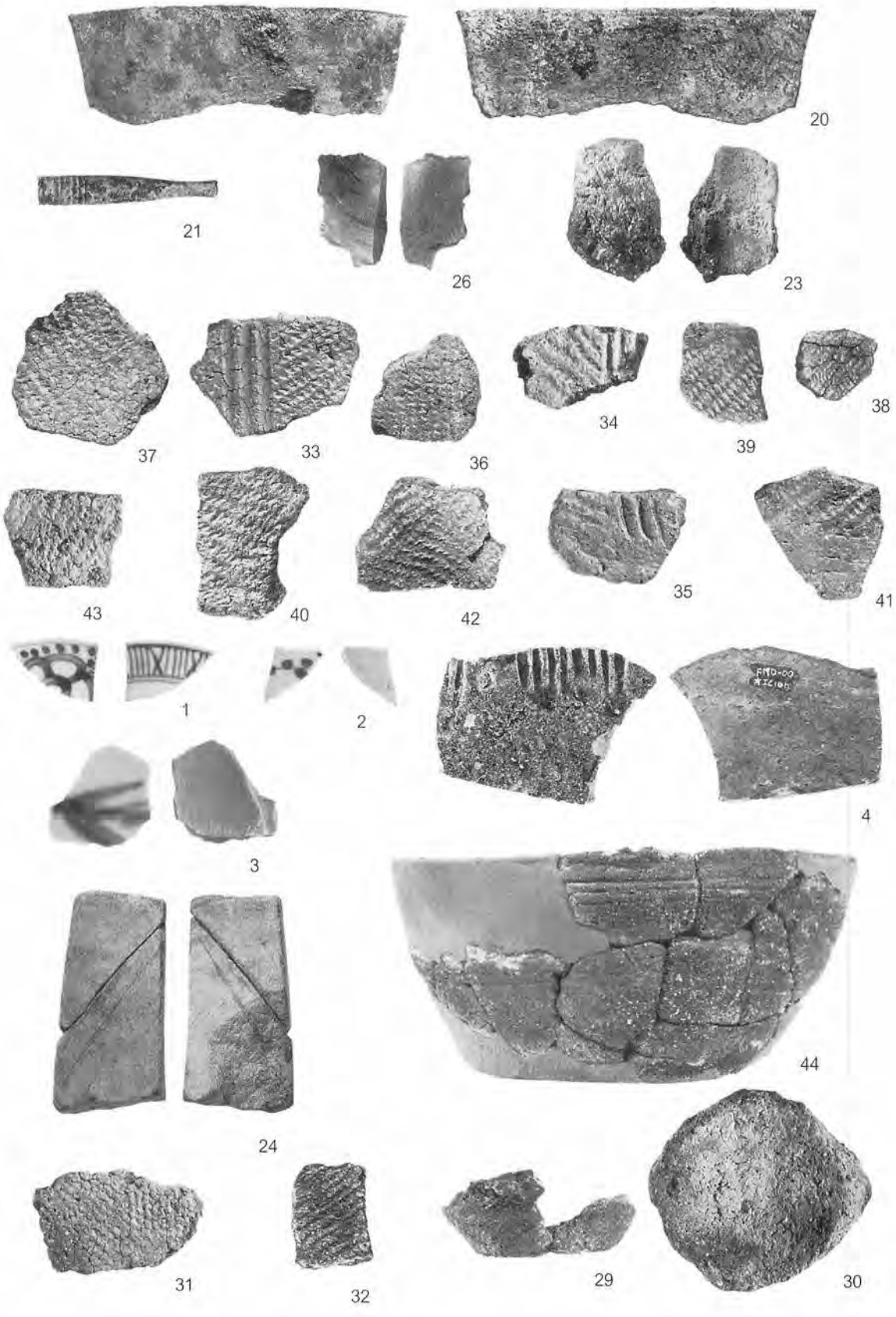
写真図版10　7号溝跡、柱穴群



写真図版11　1・2号堀跡、Ⅰの郭出土遺物



写真図版12　Ⅱの郭出土遺物



写真図版13　Ⅲの郭出土遺物

報告書抄録

ふ り が な	ふなまるたてあとはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	船丸館跡発掘調査報告書
副 書 名	広域農道整備事業関連遺跡発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第385集
編 著 者 名	小笠原　健一郎
編 集 機 関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所　在　地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地　TEL 019－638－9001
発行年月日	西暦　2002年1月24日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
所収遺跡	所在地 岩手県東磐井郡千厩町奥玉字船丸51ほか	03423	NF81-2212	38度 57分 7秒	141度 22分 1.9秒	2000.6.2 ～ 2000.7.26	4,612㎡

調査原因	所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物
広域農道整備事業に伴う緊急発掘調査	船丸館跡	城館跡 散布地	中世 縄文（晩期）	郭　3ヶ所 堀跡　2　条 土塁状遺構　1　基 掘立柱建物跡　2　棟 焼土遺構　1　基 土坑　11　基 柱穴群　2　基 （柱穴状土坑90基）	陶磁器 （肥前産、常滑産） 金属製品（煙管） 石製品（硯・砥石） 木製品（樋） 銭貨 土器（大洞Ｃ２）

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所　　長　伊藤民也

〔管理課〕

管理課長　韮澤正吾
課長補佐　山崎善光
〃　山岸直美
主　　査　立花多加志

〔調査一課〕

調査一課長　佐々木　勝
課長補佐　佐々木清文
〃　高橋義介
文化財専門員　小山内　透
文化財調査員　中田　迪
〃　飯森秀文
〃　赤石　登
〃　吉田　充
〃　亀大二郎
〃　小原眞一
〃　佐々木信一
〃　小笠原健一郎
〃　金野　進
〃　小松則也
〃　岩渕　計
〃　鳥居達人
〃　金子昭彦
〃　羽柴直人
〃　千葉正彦
〃　長村克稔
〃　星　幸文
〃　佐藤あき子
〃　菊池貴広
〃　村上　拓
〃　本多準一郎
〃　村木　敬
〃　北村忠昭
〃　高瀬克範
〃　丸山浩治
〃　島原弘征
〃　中村絵美
期限付調査員　小林弘卓
〃　江藤　敦
〃　菊池　賢
〃　井上信介
〃　川又　晋
〃　吉田真由美
〃　坂部恵造
〃　木村ひかり

副所長　高橋正儀

嘱　　託　高橋照雄
〃　佐々木光重
〃　加藤美代子
〃　湯澤邦子

〔調査二課〕

調査二課長　高橋與右衛門
課長補佐　中川重紀
文化財専門員　金子佐知子
文化財調査員　阿部眞澄
〃　飯坂一重
〃　阿部　徹
〃　濱田　宏
〃　安藤由紀夫
〃　高木　晃
〃　佐藤淳一
〃　星　雅之
〃　菅原靖男
〃　半澤武彦
〃　杉沢昭太郎
〃　溜　浩二郎
〃　中村直美
〃　西澤正晴
〃　八木勝枝
〃　（阿部勝則）
期限付調査員　吉川　徹
〃　北田　勲
〃　吉田里和
〃　原　美津子
〃　斎藤麻紀子
〃　駒木野智寛

㈶ 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第385集

船丸館跡発掘調査報告書

広域農道整備関連事業遺跡発掘調査

印刷　平成14年１月17日
発行　平成14年１月24日

発　　行　㈶ 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　　話　(019) 638－9001・9002
F　A　X　(019) 638－8563
印　　刷　㈲ 博光出版
〒020-0122　盛岡市みたけ５丁目８番43号
電　　話　(019) 641－0671

㈶ 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター